

---

Happy!! ~みんな幸せになあれ!~

火野村祭

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Happy!! ～みんな幸せになあれ!～

### 【Nコード】

N5569N

### 【作者名】

火野村祭

### 【あらすじ】

イギリスのほあたで受けズが女の子になってしまって、結婚したりとか子供出来たりとかするほのぼのストーリー……かもしれない。  
主CP：米英、独伊、西ロマ、仏加、露中、喫普、立波、愛拉、典芬。

**A t t e n t i o n !**

**必読!**

この作品は、もし、作者の好きなCPの受け子たちが女体化して、結婚したり子供ができたりしたら…という作品です。

もしジョーカーに子供がいたらどんななんかな？ それ言うなら独伊とか西ロマとかも… そーいえば最近妊娠パロとか好きなんだよな… よし、小説にしてやろう

…って感じで作成に入ったテスト前のテンションの作品。

・ 誰得？俺得。 な作品

・ CPは作者の独断で決めました。

・ 後天性によたなので、もともとは男同士だから注意。

・ 結婚するわ妊娠するわ、てんやわんやだったり。

・ ほぼ全員親バカ。

主なCP（王道を選んだつもりです）

- ・米英
- ・独伊
- ・西口マ
- ・仏加
- ・露中
- ・立波
- ・塙普
- ・典芬
- ・愛拉

その他リクエスト等あれば出てくるかもしれない。

でも基本この9組だけで突っ走ります。反対意見は認めないぞ！

合言葉は「みんな幸せになあれ！」です。その合言葉を思い浮かべながら読んでね！

以上を読んで、

「おk、大丈夫。」

な人だけ、本編お読み下さい。

プロローグ ・ 幸せな今 ・ (前書き)

受けズ女体化&子供ズがいます。

## プロローグ - 幸せな今 -

「アリス！次はニーナたちも入れて遊びましょうよ！」

「いいね！それじゃあマリアやクラウスも入れない？」

「ヴァレリーたちも入れようぜ姉さん」

「じゃあユーリイもどう？」

ミシエル、アリス、アーノルド、ルカはひとつ遊びが終わって、話していた。

「どうせなら、みんなで遊ばない?!」

「いいねいいね！じゃあみんな呼んでこよう！」

4人は笑いながら、庭を駆けていった。

「子供さんたち、元気ですねえ」

日本が微笑む。

「ああ。本当、元気すぎて困るくらいなんだ」

「ふふ、そうですか？」

縁側に座る笑顔のイギリスに、日本は言う。

ここは日本宅。夏休みを使って、各国が子供連れで遊びに来ているのだ。

「日本ー！アーノルド達を見なかつ…あ、イギリス」

「アメリカさん」

「アメリカ。  
アーノルド達なら、向こうに言ったぞ。」  
イギリスは、アーノルド達が駆けていった方を指差す。  
「分かった、ありがとう！」  
また後でね、イギリス、日本」  
「ああ」  
「はい」

アメリカはイギリスと日本の後ろを通り抜け、玄関へと向かっていった。

「あいやあ、日本、英国。  
なにしているあるか？」  
「中国さん。ちょっとお話をしていたんですよ」

アメリカと入れ代わりで、今度は中国がやって来た。ちなみに中国は着物姿だ。

「中国お前、ユーリイは？」  
「ミシエルたちに連れてかれたある。  
子供は元気でいいあるな！」  
「我はもうあっちこちガタガタある！と中国はため息をつく。」

「まあ…なんだかんだ言っても、  
幸せだから、いいあるが」

中国は呟く。

「…そう、だな」

「こんなことになるなんて、少し前までは考えられませんでしたしねえ」

3人は、微笑む。

「まあ、ある意味英国のおかげと言っていいかも知れねえあるな。」

「そうか？」

「イギリスさんが魔法をかけなければ、こうはなりませんでしたから」

あの時は大変でしたよねえ、と日本は笑う。

「というか…酔った勢いで手当たり次第に女にしちまうなんて、本当英国は酒癖わりいあるよな」

「う、うるせえよっ！」

イギリスは赤くなっている。

「しかし…あの時は本当、大変だったあるな…」

「ですねえ…。」

二人が言うあの時、とは、各国が女になってしまったあのパーティーの夜のことだった。

フランスが気まぐれに開いたパーティーで、イギリスは酒を大量に飲み酔っ払い、なにを思い付いたのか手当たり次第に各国に魔法をかけ、女にしていたのだ。

そしてアメリカにまで魔法をかけようとして、アメリカが

『おーっとこんなところに鏡がーっ！』



と跳ね返したのがイギリスに当たり、イギリスまでも女になってしまった。

そこでイギリスの暴走はおさまったのだが、魔法にかかった者たちは一向にもとに戻らず、今に至るのだ。

「…本当、

大変でしたねえ…」

「大変だったあるな…」

「……………すまなかつた……………」

日本と中国は遠い目をし、イギリスは沈んだ。

すると、

「ママーっ！パパが呼んでるあるよーっ」

と、庭の方からユーリイの声。

「今行くあるーっ！」

中国は大きな声で返事をする。

「じゃ、行くある。また後である、日本、英国」

「ええ、また後で」

「また後で、な」

中国は軽く手をふり、小走りで玄関へと向かっていった。

「…なあ、日本」

「はい、何でしょう？」

中国を見送ったイギリスと日本は言う。

「…もし、あの時俺が魔法をかけなかったら、今俺達はどうなってたんだろうな」

「…さあ、どうでしょう。」

日本は、きゃあきゃああと庭に戻ってきた子供達へと視線を移す。

「でも、今、こうして…皆さんが幸せなら、それで、いいんじゃないでしょうか？」

にこり、と日本はイギリスに笑いかけた。

「……そうだな」

イギリスはそう言って、くしゃりと笑った。

プロローグ - 幸せな今 - (後書き)

まあ…なんとというか、こんな感じで再投稿です。  
よろしくお願いします。

## 子供ず設定（前書き）

子供ずの設定です。

基本は一家族2人。

年齢とかは後々考えます…（おい

## 子供ず設定

\*米英家\*

アリス 女

米英家姉。

見た目英似、性格米似の元気っ子。眼鏡。

ロングの髪をツインテールにしている。

髪の色：金（英似）

目の色：青

アーノルド 男

米英家弟。

見た目米似、性格英似の紳士な子。

口は結構悪い。眼鏡はかけてない。

髪の色：金（米似）

目の色：緑

\*独伊家\*

ニーナ 女

独伊家双子・姉。

見た目・性格ともに伊そっくりな子。

長い髪をポニーテールにしている。

髪の色：茶

目の色：茶

ロベルト 男

独伊家双子・弟。

見た目独似、性格はどちらかといえば伊似。

イタリア男なのでフェミニスト（笑）。

髪の色：金  
目の色：青

\*西口マ家\*

カルロ 男

西口マ家双子・兄。

見た目・性格ともに西そっくりな悪ガキ。  
妹溺愛。悪戯好き。

髪の色：焦げ茶

目の色：オリーブ

エレナ 女

独伊家双子・妹。

見た目・性格ともにロマそっくりな可愛い子。  
髪はセミロングでカチューシャをつけている。

髪の色：茶

目の色：オリーブ

\*奥普家\*

マリア 女

奥普家一人っ子。

見た目普似、性格奥似な美人さん。  
普ゆずりで元気なところもある。

髪の色：銀

目の色：紫

\*仏加家\*

ミシエル 女

仏加家姉。

見た目加似、性格仏似。

可愛い顔して悪いこと考えてたりする。超美人。

髪の色：金（加似）

目の色：青紫

ルカ 男

仏加家弟。

見た目・性格ともに仏似。

女装も似合うし結構好き。常識派。

髪の色：金（仏似）

目の色：青紫

\*露中家\*

ユーリイ 男

露中家一人っ子。

見た目中似、性格はどちらかというと露似。

女の子に間違えられるのが悩み。エセ中国語で話す。

髪の色：白銀<sup>ロングヘア</sup>

目の色：茶

\*立波家\*

クラウス 男

立波家兄。

見た目・性格ともに波似。

口調も波。でも人見知りはない。

髪の色：茶

目の色：深緑

レイティス 女

立波家妹。

見た目・性格ともに立似。

でも波ゆずりでお茶目なところもある。兄は苦勞のもと。  
髪の色：金  
目の色：青

\*愛拉家\*

ヴァレリー 男

愛拉家兄。

見た目（顔）愛似、性格もどちらかと言えば愛似。

髪型は拉似。伊達眼鏡かけてる。

髪の色：金茶

目の色：青

リディヤ 女

愛拉家妹。

見た目（顔）拉似、性格もどちらかと言えば拉似。

髪型は愛似で、肩ぐらいまでの長さ。たまーに（伊達）眼鏡。

髪の色：金

目の色：茶

\*典芬家\*

ソフィー 女

典芬家妹。

見た目・性格ともに芬似の可愛い子。

髪は肩ぐらいの長さ。食いしん坊。

髪の色：白金（芬似）

目の色：青

シーランド 男

典芬家兄。

妹溺愛。お兄ちゃんって呼ばれると凄く喜ぶ。



髪の色：金  
目の色：緑

## 子供ず設定（後書き）

再投稿でこんなに設定変わってしまい申し訳ないです…!!

名付けはみんな苦戦しました。再投稿なんで一応調べたんですよ、名前。

一番大変だったのはユーリイと、あとリディヤとレイティス！

ユーリイは親が文化違いすぎてどっちの国でも通用する名前を探したらこれくらいしかなかった。orz 最初の女の子はどこいったい

頑張ります…

## 奥様ず外見設定（前書き）

サブタイトルのまんま。

あと先謝っておきます。なんかすいませんでした

## 奥様ず外見設定

イギリス

髪はロングで、まとめてたりまとめなかつたり。

眉毛はちよつと太い。でも男のときより細い。

胸は小さいけど、他はスタイルいい美人。

スーツが似合う女性だと思います。

イタリア

髪はそのまま。

胸はCカップくらい？

スタイルいい。可愛い。

ワンピースとかが似合うといいです。

ロマーノ

髪はセミロング。カチューシャついたりくつたり。

スタイルいいけど、胸はちよつとイタリアに負けてる。

可愛い。美人。

やっぱりワンピースとかが似合うと思います。

プロイセン

髪はロング。基本おろしたまま。

超美人。超スタイルいい。

胸はけっこうでかい。

ラフな格好が似合うんじゃないかと。

カナダ

髪はそのまま。

可愛い。すごく可愛い。

スタイルはもちろんいい。  
でも胸はけっこう普通サイズ。  
カントリーな感じのワンピースとか似合うと思います。

中国

髪はそのまま。

可愛い。というか美人。

胸は小さい。イギリスといい勝負。

全体的に細い。ちっちゃい。

やっぱりチャイナドレスと、あと着物も似合う。

ポーランド

髪はロングで、いろいろいじって遊んでる。

胸はそんなに大きくないけど細いし、可愛い。

やっぱりスカートが似合うと思います。

ラトビア

髪はそのまま。

胸…というかやっぱり体が小さい。

可愛い。とにかく可愛い。

スカート結構似合う。でも基本パンツスタイル。

フィンランド

髪はロング、癖っ毛。サイドテールがお気に入り。

胸は肩凝りするほど大きいと思います

全体的に丸め。でも太ってるわけではない。

ロングスカートが似合う。

## 奥様ず外見設定（後書き）

フィンランドは調子乗りました。ギャル的に言つとチヨづいてました。すみませんでした。

某動画のフィンがかわいかったただそれだけ

## プロポーズ（前書き）

受けズ9人（うち1人は自業自得）はイギリスのほあたで女の子になっ  
てしまいました+戻れなくなりました。

そういう設定です。プロローグでも書きましたが。

まずは結婚編からスタート！順番は前と一緒にです。

では本編どうぞ。

## プロポーズ

「結婚しよう」

目の前の光景と聞こえた言葉に、目と耳を疑った。

ちよつと高級なレストランで、食事を済ませた直後だった。

真剣なアメリカの表情、差し出された開いた小箱に光るリング。

しばらくぼかんとして、ああ、プロポーズされてるんだってやっとわかった。

「もちろん、国としてじゃなくて、個人として。

…絶対、君を幸せにする」

アメリカに、プロポーズされている？嘘だろ。これは夢か？

そう思つてちよつと頬をつねってみたが、痛かった。夢じゃないんだ。

「…イギリス」

彼が俺の名前を呼んだ瞬間、涙がこぼれた。

「イギリス！泣かないで！」

アメリカの慌てた声。溢れ出る涙を袖で吹くが、なかなか止まる気配はない。

「っふ…っ、」

アメリカはハンカチで後から後から溢れ出る涙をぬぐってくれる。

「な、泣かないでくれよ、イギリス…」

「…だって、うれし、からっ」



ひっく、としゃくり上げると、彼の声が一瞬途切れた。

「…それは…」

OK、ってことで…いいの？」

何を言ってるんだこの男は。俺が、断るはずないってわかってるくせに。

「…ったり前だ、ばかっ…」

そう言ったら、温かい掌が頬に触れた。

「…幸せにしないと、許さねーからな  
ばか、と言つと彼は笑った。

「君を幸せにできないヒーローなんて、ヒーロー失格さっ」

そう言つて笑つたアメリカの顔は、今までで一番かっこよかったと思つ。

## プロポーズ（後書き）

次回結婚式控室の巻  
リメイクしてありますので前回のを見た人も是非ご覧下さい！

結婚、します(前書き)

結婚式控室です！

まあ…温かい目で見てやって下さい

## 結婚、します

アメリカは、目の前の人物を見て固まった。

「…なんだよ、ばかつ。」

何か言えよっ」

その言葉を発する唇には紅が引かれ、セットされたアッシュブロンドにはヴェールがかかり、純白のドレスに身を包んでいる、愛する人を見て。

「…本当に、イギリス？」

「花嫁の顔忘れてんじゃねーよ」

イギリスはちよつと不機嫌そうな顔をする。

「はは、ごめん。」

…すつごく綺麗だよ、イギリス」

アメリカはイギリスの手袋をはめた手をとって、素直な気持ちを言った。

「ん。お前も…」

すつごく、格好いい」

アメリカの言葉に少し頬を染め、俯いたイギリスも、素直な気持ちを言った。

セットされたハニーブロンドに、綺麗な青空の瞳。それに白いタキシードが良く似合うアメリカ人は、きつと誰が見ても格好良いと思うだろう。

「…俺たち、結婚するんだね」

「今更なに言ってるんだばあか」

二人は、お互いを見つめて、微笑みあった。

でも、なんだか実感がわかないのは、事実だった。

「あのとき草原で出会ったときは、

まさかお前と結婚するなんて思わなかったな」

ふふ、とイギリスは笑う。

「…そうだね

恋人になれたのも、奇跡みたいだと思ったのに」

これからは、夫婦になるんだね。アメリカ人は、そう言って笑う。

「…夫婦、か」

そうだな、夫婦。

ああ、なんだか、ほんと、

「夢、みてえ」

「そうだね

でも現実だよ。だって俺の手の温度、わかるだろ？」  
「ああ」

自分の手を握り直したアメリカの手の温度を感じて、イギリスは幸せな気分ではいっぱいになった。

結婚、します（後書き）

次回、米英結婚式本番の巻

幸せすぎて（前書き）

結婚式本番でございます。  
末長くお幸せに！！



## 幸せすぎて

本当に、本当に幸せだと思った。

幸せすぎて、もう何度泣きそうになったか。

ヴァージンロード歩いて、誓いの言葉を言って。

誓います、のたった一言が涙をこらえてうまく言えなかった。

少し震える手で指輪をはめて、自分と彼の薬指に光る指輪に口元が緩んだ。

牧師が、では、誓いのキスを、と言った。

やっぱり形式的なものとはいえ、皆の前でキスするのは恥ずかしくて、少し顔を赤くした。

ヴェールがめくられて、唇がふれて。

ああ、幸せだ、って思った。

また、泣きそうになったけど、ぐっところらえた。

そして、式もそろそろ終盤だ。

ヨーロッパをはじめとした大勢の国々から祝福の言葉を受け（俺は別に少人数でいいと言ったがアメリカが大勢の人に祝ってほしいと言って片っ端から呼んだ）、いよいよブーケトスとなった。

「いくぞーっ！」

ブーケを高々と頭上に上げてから、思いつ切り、投げた！

ブーケは弧を描いて飛んでいき、そして、まるでブーケに意思があるかのように、イタリアの胸元へとおさまった。イタリアは目を丸くしてブーケを見つめていた。

「イギリスッ！」

「なに…ってうわ?!」

アメリカに名前を呼ばれたかと思うと、ふわりと体が浮いた。途端に歓声が大きくなる。

「な、なにすんだよばかあっ！下ろせよ！」

「いいじゃないか！記念さ記念！」

「なにが記念なんだよばか！」

アメリカに、俗に言うお姫様抱っこをされて、とても恥ずかしくて、自分でもわかるくらい顔を真っ赤にした。

「愛してるよ、イギリス！」

「…っ！お、俺もだ、ばか！」

いつもに増して幸せそうに笑うアメリカにそう言って、俺はこれらの未来を想像した。

涙がでるほど、幸せすぎて

（そして君と、これからずっと一緒だから！）

幸せすぎて（後書き）

有難うございました！！

次回、2組目の巻

## 2 組目（前書き）

はい、独伊結婚編突入です。

イタちゃんかわええなあー！！

…では本編どうぞ。

## 2 組目

イタリアは、胸元に飛び込んできたブーケに目を丸くした。

「…俺が貰っていいのかな？」

イタリアは、隣にいたドイツに問う。

「いいだろう。」

それにまるで、ブーケがお前を選んだみたいだったしな」

「…そっか」

でも、普通女の子が貰うものじゃない？」

「今はお前も女だろう」

「あ、そっか」

イタリアはブーケを見つめ、えへへ、と笑った。

「…ブーケを受け取った人は、次に幸せになれる…」  
イタリアはぼそりと呟く。

「ねえ、ドイツ」

「何だ？」

こちらを見ているドイツに、イタリアはブーケを持つ手に少し力を  
いれた。

「その、…あのね、俺と結婚してくれる？って言ったら、  
ドイツはOKしてくれる？」

「…は？」

あ、やっぱりいい、気にしないで、とイタリアは赤い顔でうつむきながらぶんぶんと両手を左右に振る。

「…何を言ってるんだお前は」

ドイツは溜息をついてそう言つと、ぱし、とイタリアの右手をつかんだ。

「…断るわけ、ないだろう」

ドイツは微笑んだ。

え、と目を見開くイタリアの両手を、ドイツは自分の両手で包みこんだ。

「…イタリア」

「な、なに？ドイツ」

「…結婚しよう」

イタリアの両目がさらに見開かれる。零れ落ちてしまいそうだと、ドイツは思った。

「…いい、の？」

「当たり前だ」

「ほんと、に？嘘ついてないよね？」

「ああ」

結婚しよう、イタリア。ドイツは再度そう言った。

「…ドイツ」

「何だ？」

「…ありがとう」

俺でよければ、喜んで。

にこりと笑う彼女に、ドイツもまた、優しく笑った。



## 2 組目（後書き）

次回、幸せとかいてバカなカップルの巻

## 幸せ花咲く(前書き)

独伊結婚式控室です。

サブタイはお花夫婦とかけてみました。

では本編をどうぞ！

## 幸せ花咲く

「ねえ、どこもおかしくない？大丈夫？」

「大丈夫ですよイタリア君」

「大丈夫、ばつちり可愛いわイタちゃん！」

イタリアの控え室。そこには、すでにしっかりと花嫁姿になっているイタリアと、それを見て微笑んでいる日本とハンガリーがいた。

「しかしイギリスさんたちに続いてイタリア君たちも結婚なんてめでたいことですねえ」

「そうですねえ。」

日本の言葉にハンガリーが頷く。

「っていうか、イタちゃんドレスちょー似合ってるわ！」

「かわいいわー写真撮ってもいい？」

「いいよー！」

えへへ、可愛くとってね！」

「もちろん！」

ハンガリーはすかさずデジカメと携帯の両方を構えて写真を撮りまくる。

「あの、私も良いですか？」

「いいよーいっぱいとって！」

日本も、携帯とカメラを両方構える。

二人が写真を撮っていると、こんこん、とノックの音がした。

「どうぞー!」

イタリアが扉のほうに声をかける。

日本とハンガリーは写真を撮るのをやめ、扉のほうに視線を向けた。

「失礼する」

入ってきたのはドイツだった。

「ドイツ!」

うっわ、すっごいかっこいい!」

イタリアが声を上げる。

いつものように金髪はオールバック。それに白いタキシードが良く似合う。

「イタリア…」

お前もすごく、綺麗だ」

「えへへーありがとっ」

イタリアは満面の笑みで言う。

「幸せそうですねー」

「そうですねー」

笑い合う二人を見て、日本とハンガリーはそう言った。

幸せ花咲く(後書き)

次回幸せ結婚式の巻

君と笑い合う(前書き)

独伊結婚式です！

ずっと幸せならいいじゃないか

## 君と笑い合う

(ああ、幸せだなあ)

式の最中、イタリアは思っていた。

(結婚できたのって…あの時ブーケを受け取ったから…かな。  
それじゃあ、イギリスとアメリカに感謝しなきゃね。また後でお礼  
言わなきゃ！)

そう思いながら、教会の外へと出た。

皆からの祝福の声とフラワーシャワー。  
それがとっても嬉しくて。

隣の彼のほうを向いたらちよつと視線が合つて、えへへ、と笑つと、  
彼も微笑んでくれた。

そしていよいよブーケトス！  
本当はみんなに幸せになってほしいから、皆に渡したいぐらいなん  
だけど、さすがにそれはダメだろうから。

「いくよーっ！」

このブーケを受け取った人にも幸せになってほしいと思ひながら、

投げた！

ふわり、風に舞ったブーケは、大勢の人を飛び越えて後ろのほうへ。

そして、すみっこのほうにいた兄…今は姉、の額に当たって、そのままその手の中へ納まった。

それを見届けて、俺は、彼女にも、自分以上に幸せになってほしいと思った。

そして隣の彼のほうを見て、また、笑い合った。

君と笑い合う

(ずっとずっと、隣で笑い合っていていよう)



君と笑い合う(後書き)

次回西ロマ編です！

ええーい皆幸せになーあれー！！

### 3 組目（前書き）

はい、とうとうとで…3 組目ですー！

すぺりゅーんー！ 作者のテンションが変です

では本編をどうぞー！

### 3 組目

「わっ?!」

いきなり額に当たった物に、ロマーノは驚いた。

「…へ？」

うそ

それは弟（妹？）が投げたブーケで、まさか自分がとるなんて、とロマーノは見開いた。

「やったやんロマーノ！ブーケもらえたな！」

ロマーノの隣のスペインが喜びの声を上げる。

「え…俺がもらって、いいのか？」

「ええに決まっとるやん！よかつたな」

スペインはロマーノの頭をなでる。

なでんなコノヤロー、とロマーノはスペインの手を払いのけた。

「まあ〜でもよかつたな！これでロマーノが次に幸せになれるんやな」

「は？」

ロマーノはきよとんとする。

「なんや、ロマ知らんの？ブーケを受け取った人は、次に幸せになれるんやで」

「次に幸せに、なれる？」

「まあ、次に結婚できるっちゅうことやな」

「…結婚？」

ぽかんとするロマーノのその手を、スペインが取った。

「せやから、俺、ロマを幸せにせなあかな！」

笑顔でスペインが言うと、ロマーノは、え、と呟いてからぼぼぼと赤くなった。

「そ、そそそれって、」

「もちろん、プロポーズやで！」

…結婚しよ、ロマーノ！」

スペインの言葉で、ロマーノはさらに赤くなった。

うわ、ロマーノ真っ赤！トマトみたいでかわええなー、とスペインが言えば、うるっせえ！！という言葉と共にスペインの顔面にロマーノの頭突きが炸裂した。

「いったー！ちよ、ロマ酷いわ！俺悲しい！」

「うっせーこんちくしょー！！！」

そう言うとロマーノはスペインに抱き着いた。

「俺のこと…」

し、幸せにしるよこのやろー」

ぎゅう、とスペインに抱き着いて、眩くよつにロマーノが言った。

「ロマーノ……」

「あつかんロマむつちゃかわええ！！！！」

俺世界中の誰よりもロマのこと幸せにしたるで……！！」

「はっ、はなせちくしょー……！！」

そう言い合いながらぎゅうぎゅうと抱き合う(?)。(二人はとっても  
幸せそうだったとか。

### 3 組目（後書き）

次回、まわりを見るよバカっふるの巻

愛してる(前書き)

西ロム控室編です。

## 愛してる

『うわーっ！兄ちゃんすっごい綺麗！』

『そ、そうか…？』

『ええ、とつても綺麗よロマーノちゃん！』

『う…なんか恥ずい…』

控え室から聞こえてくるそんな声を、スペインは扉の前で聞いていた。

（あかん…ロマーノの花嫁姿、どんななんやろ…緊張してきたわ）

スペインはどきどきしながら、こんこん、とノックをした。

「ロマーノ、入るでー！」

『ふえっ?!す、スペイン?!』

え、ちよ、待っ…』

ロマーノのいいと言う返事を待たずに、スペインはがちゃりと扉を開けた。

「…え、」

スペインは固まった。

そこにいたのは純白のドレスとヴェールに包まれ、綺麗にメイクをしたロマーノがいたから。



「あらスペイン！  
夫婦そろったわね」

ロマーノの隣にいたハンガリーが、かしゃりとカメラのシャッターをきる。

「うわ、スペイン兄ちゃんもすっこいっこいい！」

イタリアが言う通り、スペインは白のタキシードに身を包んで、とても格好良かった。

「…ほんとにロマーノなん？」

「…そうだよ」

「…むっちゃん、綺麗や」

「なっ?!」

の言葉に、ロマーノはかっとな赤くなった。

「しかも、

むっちゃんかわええ」

スペインはそっとロマーノの肩に手を置いた。

「…なあロマ

キスしてええ？」

「は?!」

ロマーノは驚く。

「式のと看できんだろ…」

「せやかて、我慢できへんもん」

赤い顔で俯くロマーノにスペインが言う。

「な、キスして、ええ？」

「…しょうがねえなあ」

どこか必死な顔のスペインの言葉に負け、ロマーノははあ、と息をつく。

「一回だけだぞ」

「おおきにな、ロマ」

至近距離で幸せそうに笑うスペインに、ロマーノも自然と笑顔になる。

「愛してるぞ、ロマーノ」

「俺もだよ、このやる…」

そう言うて二人はキスを交わした。

「…ねえ、俺達の存在忘れられてるよね」  
「そうね」

そう言いながらハンガリーはカメラのシャッターを切り続けるのだ  
った…

愛してる(後書き)

次回結婚式本番の巻

出会えてよかった(前書き)

西口マ結婚式本番です!!

まあ、一生幸せならいいじゃないかな

出会えてよかった

「…誓いますか？」

「…誓います」

誓いの言葉を言って、

「…では、誓いのキスを」

…誓いのキスをして。

(…愛してる)

キスの後こっさりそんなことを呟いたりして。

本当に、

「…幸せ、だ」

わあああつと言う皆の歓声を受けながら、俺たちは大量のフラワーシャワーを浴びていた。

皆が俺たちを祝福してくれていると思うと、とても嬉しかった。

そして、いよいよブーケトスが迫ってきた。

「…なあスペイン」

「何？ロマーノ」

「俺さ、

お前と出会えて、ホントよかったと思うよ」

「…なんなん急に？」

「いや、別に？今言っとくのが一番いいかな、って思って」

「そか。」

俺も、お前とおんなし気持ちやで、ロマー」

「…なあ、

幸せ、だな」

「せやな」

そう言つて微笑み合い、皆のほうに向きなせる。

「よし、いくぞーっ！」

その掛け声の次の瞬間、ブーケを投げた。

ブーケはふわりと宙を舞い、隣にいる自分の夫の、悪友の手の中へと収まった。

63

「お、プーが取ったか」

「そうみたいだな」

ブーケを持って隣の恋人に話し掛ける銀髪のその人を見て、あいつにも幸せになつてほしいな、なんてことを思った。

出会えてよかった

(君と出会えたことに、そしてこれからの未来に感謝を！)





出会えてよかった（後書き）

有難うございましたー！！

次回壘普編です！

## 4 組目

高く上げた手の中にブーケが落ちてきて、プロイセンはよっしゃ！  
！と喜びの声をあげた。

「ちょっとプロイセン！なんであんたがとってんのよー！！」  
「うるせーよっ！ケセセセツ、とったぜブーケ！」

右隣からハンガリーの少し怒ったような声が聞こえるが、プロイセンは上機嫌に笑う。

「…ブーケをとったら、次に幸せになれるんだよな」

ブーケを見つめ、プロイセンは咳く。

「なあなあオーストリアっ！」

「なんですかプロイセン」

プロイセンは左隣にいたオーストリアに話しかけた。

「あのだ、

俺と、結婚しねえ？」

ケセセセ、とプロイセンは笑う。「冗談のつもりで言った言葉だった。

「…いいですよ。  
結婚しましょう」

「は？」

プロイセンは目を丸くした。

「実は、イギリスとアメリカが結婚した頃から、考えていたんです。

結婚、してくれますか。プロイセン」

驚いたままのプロイセンの手をとり、オーストリアは言った。

「は？え…え？

それ、って…」

プロポーズ？とプロイセンは首を傾げる。

「そうですね、お馬鹿さん。」

オーストリアが言うと、プロイセンはかあああっと赤くなった。

「け、結婚…してくれんの、か？」

「はい」

そして、プロイセンは照れくさそうに笑った。

「俺のこと、幸せにしてよなっ」

「もちろんです、このお馬鹿さん」

#### 4 組目（後書き）

次回こっぱずかしい二人の控え室の巻

ずっと幸せでありますように

「…悔しいけど似合うわね…」

「そりゃどーも」

結婚式の控え室には、ハンガリーと花嫁姿のプロイセンがいた。

「あんとオーストリアさんが結婚なんて…心境複雑すぎるわ…」  
「悪かったなオーストリアの相手が俺で」

考えるポーズのハンガリーと、椅子に座っているプロイセンが話している、こんこん、とノックの音がした。

『入りますよ』と声がして扉が開き、入ってきたのはオーストリアだった。

「オーストリアさん！タキシードよくお似合いです！」  
「有難うございます」

周りにハートマークを飛ばしながらハンガリーがオーストリアに近づく。

オーストリアもしっかりとタキシードに身を包み、式の準備は万端だ。

そしてオーストリアはハンガリーの横を通ってプロイセンの方へと近付いていく。

「…プロイセン」

オーストリアは眩くと、プロイセンの両手を自分の両手でとった。

「…とても、綺麗ですよ」

そう言っつてオーストリアが微笑むと、プロイセンは真っ赤になった。

「…オーストリア、

…お前もすっげえ、…かつこいいよ」

赤い顔で目線を伏せ、プロイセンが眩くように言っつ。

「…有難うございます」

そう言っつてオーストリアはにこりと笑った。

(…まったくプロイセンのくせに見せつけてくれちゃって…)  
プロイセンとオーストリアのやりとりを見て、ハンガリーは思っつ。

(…まあ、



幸せそうだし、いっか)

微笑み合う二人を見てハンガリーは、ずっと二人が幸せだといいわね、と思った。

ずっと幸せでありますように（後書き）

ハンガリーさん控え室居すぎワロタ

今気付きました、ハンガリーさんが3組連続控え室に登場している  
ことを…

次回感謝感動結婚式本番の巻

これからも(前書き)

ということとで結婚式です。  
永久にお幸せに！

## これからも

こつ、こつ、と赤色のヴァージンロードを歩く。

先に待っている愛する人の微笑みをこつそりと見て、また自分も笑みがかぼれた。

かつ、と、最後の一步。

なんだか、やっと2人並ぶことができた気がした。

皆の歓声とフラワーシャワーが、俺達を祝福してくれる。

祝福してくれる皆の中には、ついこの間結婚したばかりの弟や、悪友の2人もいて、なんだか胸がいっぱいになった。

そしてブーケトス直前。

大勢の人達を目の前にして俺は幸せを噛み締めた。

「…何故、泣いているのです?」

「は?え、」

言われて自分の頬に触れると、冷たくて、やっと自分が泣いていることに気付いた。

「…きつと、幸せだからだよ」

愛する人と結婚できて、皆に祝福してもらえて。  
こんな幸せなことはないから。

「…なあ、オーストリア」

「はい、なんでしょう」

「…今まで、ありがとう」

俺は彼の手を握った。

「…これからも、」

よろしく」

そう言つて、彼に微笑んだ。

彼は一瞬驚いた顔をしてから、微笑んで、繋いだ手を優しく握り返してくれた。

そして涙をぬぐい、皆の方へ向き直つた。

「うっし、いくぞーっ!!」

ブーケを高々と上げ、その掛け声と共に、投げた!

投げたブーケは大勢の人の真ん中に立っていた、あの金髪の悪友がみごとにキャッチした。

77

「フランスがとつた、か」

「そのようですね」

そう囁きあつてから、繋いだ手をまたぎゅっと握り合つた。

これからもよろしく

(ずっとよろしく、愛する人)  
パートナー



## これからも（後書き）

有難うございました！

次回から仏加編になります！次からは更新が遅くなりがちになりますので宜しくお願いします！



## 5 組目（前書き）

はい皆さん仏加編はいりまーす！！（メガホン使用で

…いや、うん はフザけただけです

はい仏加プロポーズはいりまーす！

## 5 組目

ブーケがとんできた位置は、丁度いい位置！  
あとは誰よりも先にブーケをとるだけ。

周りにいるお嬢様方には悪いけど、と俺は腕を伸ばした。

ぱしっ、とブーケをキャッチした感覚。見事にキャッチできたようだ。

周りの女性たちは残念そうな顔や悔しそうな顔をしていて、ごめんねマドモアゼルたち、と思いつつ、俺は愛するあの子のもとへと駆けていった。

「カナっ！」

「あ、フランスさん」

人混みを掻き分けて出てきた先に、その人はいた。

「どうかしました？」

「実は、カナに渡したいものがあるんだ」

「へ？」

はい、と後ろ手で隠していたブーケを差し出す。

「え、これ、って…！」

「そ。プロイセンのブーケ。

…カナダの為に、頑張つてとったんだけど」

「知らない？と聞くと、いえ、…嬉しいですっ！と赤くなりながら答えしてくれる彼女に、笑みがこぼれる。

「それと、…これ。」

スーツのポケットから、小さな箱を取り出す。

「？　なんですか？これ」

首を傾げる彼女に箱を開けてみせると、息を飲む音が聞こえた。

「…結婚、しよう」

箱の中身は、指輪だった。

派手すぎず、地味すぎないデザインの、真剣に選んだ指輪。

彼女に、似合うようにと。

「俺、まだまだ駄目なことかいっぱいあるし、いろいろ苦労かけることとかもあるかもしれない。

でも…絶対、幸せにするから。

結婚しよう、カナダ。」

愛する人の眼鏡越しの瞳を見つめて、言う。

カナダは目を見開いてぼかんとして、信じられないという顔をしていた。

「…カナダ」

「っ、はい」

やっと戻ってきた彼女は、俺の目を見つめ返した。

「あ、あの、」

「なに？カナダ」

「ぼ、僕で、いいんですか？」

赤くなって言うその人に、思わずぷつと吹き出してしまった。

「な、なんで笑うんですかあ」

「ふふっ…もう、馬つ鹿だなあカナは」

くすくすと笑いながら、俺は彼女の頬に触れた。

「俺は、」

『お前がいい』んじゃなくて、

『お前がいい』んだよ」

知ってるでしょ、俺のマイハニー？とにっこり笑うと、彼女は一瞬驚いた顔をしてから、はい、知ってます、と笑った。

「…幸せに、して下さいね？」

「もちろん」

愛の国の名にかけて、と彼女の手の甲にキスをすると、もう、フランスさんったら、と彼女が笑った。

ありがとう(前書き)

ネタがなくて支離滅裂。

仏加ファンの方すいません。

ありがとう

「…やっぱり本当、だったんですね」  
結婚のこと。

「何？悪い冗談だとも思ってた？」

ええ、フランスさんのことですから、と彼女は笑う。こちら、とフランスは彼女の頭を小突いた。

結婚式の控室、タキシード姿のフランスと、ドレス姿のカナダは、お互いに向き合って話をしていた。

「…フランスさん、」

「なあにカナダ？」

「…ありがとう、ございます」

フランスは、彼女の言葉に首を傾げた。

「あ、その特に意味はないんですけど」

なんとなく、言いたいなど。そう言っただけで目を伏せ微笑む彼女に、フランスは苦笑した。

「…それ言わなきゃいけないのは、こっちのほうなんだけど」  
「はい？」

フランスは、きょとんとする彼女を抱き締めた。

「……フランス、さん？」

「……ありがとう、カナダ。」

……俺と結婚してくれて。

俺と付き合ってくれて。」

俺と、出会ってくれて。

ぎゅう、とフランスは少し力をこめて彼女を抱き締める。

「フランスさん……」

抱き締められる彼女は、彼の背中に腕を回し、抱き締め返した。お互いの体温を感じて、じんわり、温かかった。

「……フランスさん

僕、幸せです」

「……そっか

俺も、だよ」

微笑む二人は、また、ぎゅう、と抱き締め合った。



ありがとう(後書き)

次回結婚式本番の巻

## 幸せとキスとブーケトス（前書き）

仏加結婚式本番です…

ネタがなかったなのでカナダ視点でかいてみました。

では本編をどうぞ。

## 幸せとキスとブーケトス

式本番は、もう本当に緊張したけど、とっっても幸せな気分でいっぱいだった。

だって一番愛してる人と、一緒になれるんだから。

誓いの言葉も終わった。

次、は、キス…だよな

やっぱり皆の前でのキスって…緊張するなあ、と思う。

ヴェールがめくられる感覚。そして頬にフランスさんの手の温度。

そして、

キス、された。

しかも、（みんなの前だって言うのに！）デーパーキス！

僕は恥ずかしくて自分で分かるくらい真っ赤になって。

やっとキスが終わったときには、羞恥と酸欠でくらくらして、フランスさんによりかかるような体勢なってしまった。

「カナダ」

「…はい」

「愛してる、よ」

「…っ、はい」

耳元で囁かれて、僕はさらに赤くなった。

もう我慢できねえフランスでめえそこに直りやがれ！ちよっイギリス落ち着いて！という声が聞こえたけど、フランスさんは別に気にしていないようだった。

そして歩けない状態の僕はフランスさんに抱えられたまま教会の外に出た。

たくさんの人たちが、僕らを祝福してくれてる。考えただけで、なんだか照れくさかった。

「フランスさん、もうそろそろ下ろしてもらって大丈夫です」

「そう？」

言うと、フランスさんはそっと僕を下ろしてくれた。

「じゃあ、」

「うん。どうぞ」

フランスさんに促されて、僕はみんなのほうに向き直ると、

「いきますよーっ！」

といつもは出さないような大きな声をあげて、ブーケを頭上に。

投げるとき、えいっ！と思わず声が出てしまい、ちよっ子供っぽくて恥ずかしかった。

ぼすつ、と見事にブーケをキャッチしたのは、思いもよらない、中国さんで。

様子からして自分から進んで取った、という感じで、なんだか中国さんらしくなくて目を丸くした。

「…中国がとつた？」

「みたい、ですね」

隣を見ると、フランスさんも意外だったようで、少し驚いていた。

「まあ、あいつも幸せになればいいよな、なーんて」

「…そう、ですね」

ブーケをとつたその人の黒髪が揺れるのを見て、僕たちはふふ、と笑った。

幸せとキスとブーケトス

( 幸せの思い出と共に、愛する君と共に )

( 共に歩んで、いつつ )

## 幸せとキスとブーケトス（後書き）

有難うございました！！

補足です

式の途中でいきぎが叫んだのは、大切な弟（妹）を大っ嫌いな髭野郎にやるってこと事態嫌なのにそれに加えてディープリキスなんてしやがったのでさすがに我慢の限界だったようです。

そういうことですが、また他でフランスがイギリスにカナダを下さ  
いって言いに行く話とか書きたいです。

次回からは露中編です！！

## 6 組目（前書き）

更新おそくなり申し訳ありません！露中編です！

本当は中国さんにはろっさまのごとびアニーヤって呼んでほしかったけど諦めた。

## 6 組目

「俄？斯！！」

揺れる黒髪。中国は、なんとかとることができたブーケを持って、ロシアのもとへとやって来た。

「中国くん。えっと…どうしたの？」

恋人のその言葉に、中国はずっこけそうになった。だって、頑張ってブーケをとって、…勇気を振り絞り、ロシアのもとへとやって来たと言うのに、そんな言葉だったから、だ。

「おまつ…どうしたの、じゃねーあるよ！お前恋人が必死にブーケ取ってたのも見てねかったあるかっ！」

「え？」

そーだったの？と首をかしげる恋人に、中国ははあ、と溜め息をつく。

「今日はこのために来たようなものなんあるよ？」

人が勇気振り絞って頑張ってるっていうのに、お前ときたら…」

「え、」

ロシアが目を見開く。

「ねえ、それって、もしかして…」

そう言って目を見開くロシアに、中国は赤くなる。



そして俯きながら、ブーケを持った両手をずい、と前に突き出した。

「…っほら！空気読むあるよ！

ブーケをとった女性の恋人は、…その女性になんと言っあるか？」

中国の言葉にロシアは微笑むと、彼女の手に自分の手を重ねた。

「…『結婚しよう』」

…合ってるよね？

ロシアは、自分を見上げる中国の瞳を見つめた。

ふっ、と中国は笑った。

「正解、ある！」

赤くなりながら、彼女は満面の笑みを浮かべた。

「はあ、よかったあ正解で。

君がそんなこと言うなんて思ってたから」

「…周りであてられたんあるよ」

「ふふ、そう？」

ロシアは中国の黒髪をなでる。

「……結婚してくれるあるか、俄？斯？」  
「もちろん。」

「絶対、幸せにしてくれるあるか？」  
「うん。絶対」

君を幸せにするよ。

彼は、そう言って微笑んだ。

6 組目（後書き）

次回控え室の巻

幸せを願ってくれる貴方たちに（前書き）

サブタイ長くてサーセン…っ、露中控え室です！

亜細亜メンバー出てます。

幸せを願ってくれる貴方たちに

「うそ……」

本当に、センセイ？」

「老師、パネエ……」

マジ beautiful なんすけど」

そう言うのは、台湾と香港の二人である。

ここは中国の控え室。花嫁姿の中国と、亜細亜4人（台湾、香港、韓国、日本）がいる。

「とても綺麗ですよ中国さん。ドレス、よくお似合いです」

「……お世辞はやめるよろし、日本」

「おや、お世辞ではありませんよ」

赤くなる中国に、日本はにこりと笑う。

「……………」

「あれ、そういえば韓兄、なんか静かだネ」

「どーしたんすか韓兄」

「……………」

「…アニキいいいつ！！」

「うわっ?!」

韓国はがばつと顔を上げたかと思えば、いきなり中国に抱き着いた。

「兄貴いいいなんでロシアなんかと結婚するんですかああああ！  
兄貴は俺のもんになるって信じてたのにいいいつ！……！」

「誰がお前のもんになるあるかっ！あとドレスに鼻水つくある離れ

るよろし！」

「うわぁぁあ兄貴いいいい！！！」

韓国は中国の言葉も耳に入っていないようで、中国に抱き着きながらわんわんと泣き続けている。

「韓兄落ち着いてヨ、センセイ困ってる」

「そうですよ韓国さん、素直に認めましょっよ」

「韓兄、諦め悪いっすよ」

3人もなだめようとしたりひっぺがそうしたりするが、韓国は泣き続けている。

「どーしようもねーあるななこいつ…」

「ドレスが汚れちゃうヨ」

「まったく仕方ないですねぇ」

「韓兄マジ泣きのな」

中国に抱きついたままの韓国を見て、呆れ顔になる4人。

「こいつこれから大丈夫あるか…俄？斯とも一応義兄弟になるって言うのに」

「…ああ、そういえばそうでしたね」

「わぁー新しいお兄ちゃんダネー」

「ぶっっちゃけ複雑でなくもない的な」

「ロシアさんと義兄弟ですか…あの人の弟になるなんて…かなり複雑です」

「ええーひどいなぁ日本くんは」

いきなり背後から聞こえた声にびくつとして日本が振り向くと、そこにはタキシードを着たロシアがにこしながら立っていた。

「俄？斯、いつからいたあるか?!」

「んー？」

韓国くんが中国くんを抱きついたあたりからかなあ

「そーあるか…」

「全然気付かなかったヨ…」

台湾が驚いた表情で言う。

「ていうか、いい加減韓国くんは中国くんに引っ付きすぎじゃない？僕のお嫁さんなのになあ」

「韓国さん、いい加減離れて下さい。ロシアさんが怖いですから」

「うう…」

韓国は日本に言われて、名残惜しそうに中国から離れた。

「…中国くん、とっても綺麗だよ」

「…謝謝。」

ロシアが中国の手をとって言うと、中国は赤くなりながらも礼を言った。

「ふふ、中国くん可愛い」

「なっ、なに言ってるあるか!」

「えへへー」

幸せそうに笑うロシアと、赤くなりながらも幸せそうな中国。

「…センセイ、幸せそうだね」

「てか、幸せなんじゃないの的な」

「ふふ、そうですね」

「…うう…兄貴いい…」

4人はそう言って、幸せそうな2人を眺めていた。

「…中国さん」

日本が呼ぶと、中国は日本たちのほうへ振り向いた。

「……………幸せに、

なって下さいね」

にこり、と日本は笑った。

「日本…」

「センセイ、幸せになってネ」

「幸せになって下さい、老師」

「…兄貴…幸せに、なって、下さいい…っ」

「台湾…」

香港、韓国…」

じわり、中国の目に涙が浮かんだ。



だが中国は涙をつかべながらもにこりと笑い、

「謝謝。」

と言った。

過去、今、未来（前書き）

露中結婚式本番です！

ネタがね…もうそろそろ尽きてきたんですよ。結婚式の。この先大丈夫かな…

それでは本編どうぞ。

## 過去、今、未来

思えば、最初出会ったころはそんなにこいつのことは好きじゃなかったと思う。

いや、むしろ嫌いに分類されただろう。

でも、なんだかんだでいつも近くにいるこいつ見ていたら、いつのまにか好意を抱くようになって。

…そして、それはいつのまにか恋情になっていた。

ちらり、隣にいるそいつを、見た。

今でも思い出せる、告白の言葉。

いつもは見せない、必死なような、焦ったような、あの赤い顔。

告白された時は、驚いて、そして嬉しくて。

つい涙がこぼれてしまったのを覚えている。

恋人になってからは、まあ、なんとというか、いろいろあった。もちろん喧嘩もした。

長い間だった気がするが、短い間だった気もする。たくさんのがあった。

そして、今、自分たちは、結ばれるんだ。

考えたら、少し、頬が熱くなった。

誓いの言葉、指輪、そしてキス。

ふわり、といつもとは少し違う笑みを浮かべるそいつに、なんだかちよっとだけ、恥ずかしい気持ちになった。

「…中国くん」

祝福の歓声の中、ロシアが我を呼んだ。

「何あるか、俄？斯」

「…幸せだね」

そう言って、ふわりと笑みを浮かべるそいつに、また頬が熱くなっ  
た。

「…ああ、  
そうあるな」

そう言っつて我は、大勢の人達に視線を移すと、ブーケを高々と持ち上げた。

「いくあるよーっ！」

一瞬きゅっとブーケを握ってから、たくさんの人達に向けて、投げた！

すると大勢の人達の中から一本腕が延びてきて、見事ブーケをキャッチした。

やったしー！！と元気な声が聞こえて、その腕が誰のものだったのか、だいたい分かった。

「うふふ、ポーランドくんが取ったのかな？」

「そーみてえあるな」

隣で笑うそいつを見て、我も笑う。

「…中国くん」

「何あるか」

「愛してるよ」

「！」

いきなり言われた言葉に、我は自分で分かるくらい真っ赤になった。

「かーわいい中国くん」

「うるっせーある！」

笑うロシアの頭を、ぺしんと一発叩いた。

あいたあ、とロシアが声を上げるが、あえて気にしない。

少しの間があったあと、ねえ、とロシアの声が降ってきた。

「…あのさ、ずっと」

幸せだといいね」

「…何言ってるあるか」

小さく、溜め息をひとつ。

「ずっと幸せじゃなかったら

一生恨むあるよ！」

少しだけ舌を出してそう言つと、ロシアは目を見開いた後、ふふ、  
そうだね、と笑った。

君との過去、今、未来  
であえたこと  
（過去に感謝を、  
しあわせ  
今に微笑みを、  
このさき  
未来に愛と希望を！）

過去、今、未来（後書き）

有難うございました！  
次回立波編です！



## 7 組目（前書き）

今回から立波編です！  
更新遅くなってますみません…。

## 7 組目

「リトーっ!」

大切な人の、自分を呼ぶ元気な声。

もしかしたらと思ってはいたけど、駆け寄ってくるその人の手に握られているのは、

「リト!見て見てブーケ取ったんよ!」

「あー…うん」

俺凄い?!と言うポーランドの頭をなでてあげる。

やっぱり、とつてきたか…ブーケ。

「俺頑張ったんよ!たーくさん人がおる中でな、こっつ、ぐーって腕伸ばしてな、」

「あー…はいはい」

ぼんぼん、と、俺はポーランドの頭を軽く叩いた。

「…なあ、リト。

知つとる?ブーケを取った女の人は、次に幸せになれるんよ」

だから、と彼女は一旦言葉を切って、

「なんか俺に言うこと、ないん？」

と言った。

…やっぱり、そう来たか。

まあ、そう来なくても、今日言うつもりだったけど。

「…………ポーランド」

彼女の名前を呼ぶ。

…………大丈夫、だよな。

うん、大丈夫大丈夫。

そう自分に言い聞かせ、俺は彼女の手を握った。

「俺、さ。

絶対君を世界一幸せにしてみせる、とか、かっこいいこと言えないんだけど」

ぱちり、と見開かれたポーランドの目を、真っ直ぐに見た。

「それでも、…出来る限り、頑張る。ポーランドが、助けが必要なら助けるし、悲しくて、泣きたいなら胸を貸すし、なんなら一緒に泣く。

楽しいなら一緒に笑いたいし、嬉しいなら一緒に喜びたい。

一緒に、いたい。

だから、

結婚して下さい。」

ぎゅ、と、握った手に力をこめた。

ポーランドはしばらく目を見開いたまま固まっていたが、すぐいつもの顔に戻って、「その顔、マジつけるしー」と何時ものように笑った。

「……ポーランド、」

「何？」

「…返事、は？」

「は？」

俺がたずねると、ポーランドはこてんと首をかしげた。

そして、ぷーっと笑うと、真っ直ぐに俺を見て、

「そんなん、決まっとるしー！」

と言った。

「もちろん、」

OKやし！

そう言って、彼女は満面の笑みを作った。

## 7 組目（後書き）

今回はあれですよ、

リトに誠実な感じでプロポーズしてほしかっただけ。

…さーせんっしたー

次回あの子はピンク大好きの巻

君の好きな色と笑顔（前書き）

うわーものすごく久しぶりな更新なんじゃないですかこれ！うわー  
うわー

立波控え室編です！では本編どうぞ

## 君の好きな色と笑顔

「うわぁ……見事に、真っピンクだね」

「ピンク色が鮮やかすぎて…目が痛いですよ」

「え〜、別にいくね。ピンクめっちゃ可愛いし〜」

そう言っただけで彼女は、自分の好きな色一色のドレスを見る。

イタリアがさつき言った通り、ドレスに身を包んだポーランドは、本当に真っピンクだった。

「本当はリトも会場も全部ピンクにしたかったんよ。でもリトがそれは絶対駄目って言うから仕方なくドレスだけにしたんよ」

「さすがに会場全部ピンクは無理がありますよね…」

ドレスをまじまじと見ながらラトビアが言うと、ポーランドが不服そうな顔をした。

「えーラトもリトとおんなじこと言うん?!別にいくね会場全部ピンク〜」

俺的には今からでも遅くないと思うんよ!」

「まだ諦めてなかったのポー?!もお、駄目ったら駄目なの!」

「なんなんよリトのいけずー!」

ぶー、とリトアニアの言葉にポーランドは膨れる。そしてきやいやいと始まった言い合い。

だけど、そんな二人はどことなく幸せそうで、イタリアとラトビアはくすくすと笑った。

「? なんなん、ラトもイタリアも?」



「うん、なんでも」

「二人が言い合いしてるのに幸せそうなので、つい」

ポーランドが首をかしげると、笑顔で彼女たちはそう言う。

「リト聞いた？幸せそうやって、俺ら！」

「…うん、そうだね」

だって、

「本当に幸せだもん」

リトアニアの言葉に、ポーランドは一瞬だけ目を見開いてから、笑顔になった。

「俺も幸せやし！」

「そっか。」

そう言って笑い合う二人に、イタリアとラトビアまで幸せな気持ちになったのだった。

## 君の好きな色と笑顔（後書き）

最初は拉は結婚する予定ないの的な会話入れてたんですがやっぱりそれで文字数稼いでもなあ、みたいに思い却下しました。その結果がこの短さだよ！

いや…今までもこれくらいだった気が…ちょっと読み返してきます

## 美しい表情（前書き）

きよわーっ、立波結婚式編ですっ！

もーなんか…今回、難産でした…なんなんだいこの結婚式編の難しさ…

ではでは、本編をどうぞ！

## 美しい表情

「…リト、」

小さく呼ばれて彼女のほうを向けば、そこには彼女の美しい微笑みがあった。

「…ポー」

こちらからも小さく返せば、ポーランドは照れ笑いする。そのポーランドの手には指輪が光っていて、結婚したんだなあ、と改めて思った。

「…幸せやね」

「そうだね」

にこ、と笑うと、俺たちは教会の外に出た。

フラワーシャワーはポーランドのドレスと同じピンク色。皆からの祝福の言葉が嬉しい。

おめでとう、と言われて、ありがとう、と返す。それが、とてつもなく幸せなことのように思えた。

そして、いよいよブーケトスが近づいてきた。

大勢の人たちを前にして、なんだか、今俺世界一幸せかもしれない、  
と思った。

ぎゅう、と彼女が腕に抱き着いてくる感覚に、俺は反射的に彼女の  
ほうを向いた。

そこには満面の笑みのポーランドがいて、ああ、俺ってほんと幸せ  
だなあ、と思つて微笑んだ。

ポーランドは俺の腕に自分の腕を絡ませると、皆のほうを向く。

「行くしー！」

元気なかけ声の後、思い切りブーケを投げた。

ブーケはふわりと舞うと、重力に従つて落ちていく。その先は、ブ  
ーケが落ちてきて驚いたような嬉しいような表情をしているラトビ  
アだった。

「やった、ラトんとこ行つたし！」

ポーランドは、結婚が決まったときからずっと、

「ブーケは絶対ラトにあげるんよ！あのカップルまじ煮え切らんか  
らー、けっこういい進展のきっかけになると思っくんよ！」

と言つていたから、思い通りに行つて嬉しいのだろう。

そう思いながら、俺は満足気な笑みをうかべるポーランドを見て微  
笑んだ。

「…ポーランド」

「ん？」

彼女が名前を呼ばれて、振り向く。

「…愛してる、よ」

「…っ」

ポーランドが小さく息を飲む。

彼女は少し俺をにらみつけると、ぎゅう、と再度俺の腕に抱きついてきた。

そして彼の顔をまっすぐ見て、言った。

「…俺のほうが、

リトのこと、愛しとるから！」

にい、と少し意地悪く笑う彼女に苦笑する。

「…俺のほうが愛してる自信、あるんだけどな」

そう言われて反論しようとして少し開いた彼女の唇を、俺の唇で塞いだ。

そして唇がはなれたときの驚いたような怒ったような照れたような表情が、可愛いと、そして美しいと思ったことは、ポーランドにも内緒のこと。

美しい君の表情を

(いつまでも隣で見たいねますよっぴ)

## 美しい表情（後書き）

有り難うございました！

いやいや、立波はリトアニアをただかつこよく！リトアニアがかつこよければそれでいい！と思いつつ書いてるなんてそんなこと（ry

…すみませんでした。

次回から愛拉編です！！



## 8 組目（前書き）

おおおおおやっど8組目ですっわぁぁあ  
今年中には終わらせたい…結婚編…！

愛拉プロポーズの巻、です！

## 8 組目

「えっ?!」

ラトビアの驚いた声が聞こえる。

ブーケが、ちょうど良くラトビアのところに飛んできたのだ。

「わ、ど、どうでしょうエストニア…ブーケとっちやいました」

ラトビアが僕にブーケを見せる。

ポーランドが、

『俺ブーケラトにやるから！エスト、男見せるんよ！』

進展なかったらまじ許さんからー』

と言っていたけど、まさか本当にやるとは…

だいたい、こんな大勢の中でどうやってラトビアを見つけたんだろう。偶然にしてはちょうど良すぎるから。

「…えと…ブーケとった人って何があるんだっけ？」

「……た、確か…次に幸せになれる、だったと」

「…え、

つまり…は？」

「…次に結婚…できるってことですね」

そう言ってラトビアはほほほっと赤くなった。あ、可愛い。

って思ってる場合じゃない！

(…この場合僕はどうすれば…?!…!)

やっぱりプロポーズする…べきか？

いやでもまだそれは早い…気がするんだけど

いやでもせつかくのチャンスだし…リトアニアとポーランドが結婚したんだから、ラトビアももしかしたら結婚したいなんて思っ…て…

…ああああああ落ち着けっ、落ち着け僕…!!…!!  
ど、どうしよう…?!…?!

「……エストニア」

「え、な、なに?!」

いきなり名前を呼ばれて、ぱっと俯いていた顔を上げる。

「…あの。」

僕、その…え、エストニアが、幸せにしてくれるな、ら…

すくく…嬉しいんですが…」

「っへ…?!」

「……だっ、だからっ

エストニアと…結婚できたら…

すくくっ、幸せなんですけど…」

かああああとラトビアが赤くなる。つられて僕も赤くなった。

幸せ?嬉しい?僕と?結婚できたら?

頭の中でラトビアの言葉がぐるぐるぐるぐる回って、なんだかわけ

が分からなくなってきた。

……ああもう、なんか……

言うしかない!!

「ラトビアっ!!」

「へ、は、はいっ!!」

僕は、ブーケを持ったままのラトビアの手をとった。ラトビアは驚いていたが、真っ直ぐに僕の目を見てくれた。

「……ラトビア。」

結婚しよう」

驚いて大きくなっていたラトビアの目が、さらに大きくなった。

「…え、えええっエストニア？」

「な、何？」

「ほほ、ほ、本気で言ってるんですか？」

「…うん」

「結婚、つて、」

「っ、僕！」

「ラトビアを絶対幸せにするから！」

「だから、結婚しよう。」

「きゅっ、とラトビアの手を握った。」

「…エストニアっ」

「何？」

「…違いますよ」

「え、なっ、何が？」

「赤みの残る顔で、ふっとラトビアは微笑んだ。」

「…二人で、幸せになるんです」

「僕は目を見開いた。」

「微笑むラトビアが、とても綺麗に思えた。」

「…僕でよければ、」

「結婚しましょう、エストニア」

次の瞬間、僕はラトビアを抱きしめていた。

ああこれから、二人で、幸せになるんだ！

## 8 組目（後書き）

有難うございました！

実はプロポーズの回の中では1番長いとかそういうのは気にしない！  
！過去は振り向かない！前だけ見ていくの！

次回結婚式の巻です

サムシングフォーネタでいきたいと思います

次回も頑張ります

## 貴方との幸せを願う（前書き）

愛拉控え室です：よかった一週間以内に更新できて…！  
前回（立波）ありきな感じですが。



## 貴方との幸せを願う

「ラトー、ちよい下向いてな。

…ん、オツケー」

頭を上げると、ちゃり、と少しだけネックレスが鳴る。

「ありがとうございます、ポーランドさん」

「ぜんぜん大丈夫やし！俺なつ、ラトとエストが結婚するのがマジ嬉しいんよー！」

そう言うてはしゃぐ彼女に、笑う。可愛い人だなあ。

「てか、ほんとにそれで良いん？ネックレス。」

「はい、大丈夫です。」

…それに、これがしたいなって、思ったんです。」

僕の首に光るのは、ポーランドさんが結婚式でつけていたネックレス。サムシングフォーの中のひとつ、サムシングボロウ…何か借り物。

他の3つは、古い物が、家にずっとあった髪留め。新しい物が、この前買いに行った（もちろんエストニアと一緒に、だ）イヤリング。青い物は、ドレスの下、ガーターにつけたりボン。

花嫁の幸せのお守りだ。

そう考えると、ああ僕結婚するんだなあって実感して。

なんだか幸せと、慈愛のような気持ちが、溢れてくるんだ。

「…なあラト？」

「何ですか？」

「今、幸せ？」

「……………はい」

「だよなー」

だって、俺もそうだったしー。と彼女は笑う。彼女の左手に指輪が光っているのが見えた。

「…ポーランドさんも、今幸せですか？」

「うん。」

「…幸せ、だし。」

「…そうですね。よかった」

ポーランドさんは、結婚して、本当に幸せなんだろうなあ。彼女の表情で、分かった。

こんにちは。

ノックの音がした。誰だろう？

『ラトビア、入るよー』

『ポーランドいるー？ラトビアー、入るよー』

「！ エストとリト！」  
「え、エストニア！」

かちゃり、と扉が開く。そこにはもちろん、エストニアとリトニアアがいた。

「リトーっ！」

「わ、もうポーいきなり抱き着かないでよ」

リトニアはそういつつも嬉しそうだ。幸せそうだなあ、二人とも。

「…ラトビア」

名前を呼ばれて彼を見上げる。もうすでに眼鏡がなくて、見慣れないその顔に少し驚いた。

「…エストニア、  
タキシード、よく似合ってますよ」

「……………僕が先にラトビアを褒めたかったのに……」

その言葉に、つい吹き出してしまふ。

なんだかこの人可愛いなあと思った時、両手をとられた。

「……………綺麗、だよ、ラトビア」

「……………有難う、ございます」

俯いて、呟くように言う。

僕は自然と苦笑した。

きつとこれが幸せすぎて困る、ってことなの、かな。

「…エストニア」

「…何？」

「…愛しています」

「うん、」

僕も。…愛してる、よ  
「よ」

## 貴方との幸せを願う（後書き）

\*サムシングフォーについて\*

・サムシングボロウ

何か借り物。友人や隣人との縁を表す。

幸せな結婚生活を送っている友人や隣人の持ち物を借り、その幸せにあやかる。

ハンカチやアクセサリーを借りるのが一般的。

・サムシングオールド

何か古い物。祖先、伝統などを表す。

先祖代々伝わる物や家族から譲り受けた宝飾品を使用するのが一般的。

・サムシングニュー

何か新しい物。これから始まる新生活を表す。

新調した物ならなんでも良いが、白いものを用意するのが一般的。

・サムシングブルー

何か青い物。聖母マリアのシンボルカラーである青、つまり純潔を表す。

これは目立たない場所につけるのが良いとされており、白いガーターに青いリボン飾りをつけるのが一般的である。

参考：ウィキペディア

今回サムシングオールドは”家にずっとあつた髪飾り”にしましたが、それはおそらく、ラトビアが誰か思い入れのある人から貰つてずっとしまっておいた物…だといひです。  
髪飾りといつてもヘアピンみたいな感じのやつだと思ひます。

次回、結婚式の回です

君と、幸せ（前書き）

どうもっ、一週間ぶりです…！

クリスマスまで十日を切りました。そろそろ本気でとりかからないとクリスマス間に合わないよ、スーフィン。

愛拉結婚式本番です。どうぞ

## 君と、幸せ

結婚式本番となると、やっぱり緊張してしまう。

たくさんの人の中で誓いの言葉を言ったり、指輪を交換したり、  
…誓いのキスをしたりするのは、式の形式上のもとはいえ恥ずか  
しかった。

でもそれ以上に幸せで、嬉しくて、キスの後二人で顔を見合わせて  
微笑んだ。

愛してます。二人で幸せになりましょう。式の前にも散々言い合っ  
た言葉だけど、また繰り返さずにはいられなくて。

今と、これからの事を考えるとすごく幸せで、  
ああもしかしたら過去にあったつらい出来事は、全部この幸せのた  
めにあつたのかもしれない、とも思えた。

大勢の人の歓声に、顔を上げる。そうして見た世界は、なんだか輝  
いて見えて、自然と笑みが零れた。



「…ねえエストニア」

「なに？ラトビア」

「…僕もう、たとえ明日が世界の終わりでも、いい気がしてきました」

「……奇遇だね」

僕もそう思ってた。エストニアは笑う。

そんなことを言えるほどに、僕は、僕たちは幸せだった。

「ほら、ラトビア。」

「ブーケトスだよ」

「はい」

言われて、少し前が出る。僕はブーケを握り直した。

「…いきますよー！」

ブーケを持った手を振り上げて、そして、投げた！

ブーケは人混みの中へ吸い込まれて行き、誰が取ったのかは確認できなかった。でもきつと誰かの手に渡ったのだ。だから、その人にも、幸せになってほしいと思った。

ブーケを持っていた手が空いて、一瞬、少しだけ虚しくなった後、幸せや感動や慈愛や、そんな感情が一気に溢れ返った。

胸がいつぱいになって、幸せだけど、どこか悲しいような気がした。

「…エストニア、

泣いて、いいですか？」

「……………もう泣いてるじゃないか」

エストニアが、僕の頬に伝う雫を、指先でぬぐう。

それでも僕は限界に達してしまって、みっともなく嗚咽を上げて泣いた。

ぎゅっと抱きしめてくれた彼の胸の温度が温かくて、ああ、僕って本当に幸せだなあ、と改めて思った。

そして、この幸せがいつまでも続くように、僕は（僕たちは）心の中で祈るんだ。

君と、幸せ

(君と僕、二人の幸せが  
いつまでも続きますように)

## 君と、幸せ（後書き）

ありがとうございます！自分のできる限りの上手い文章を目指した結果がこれだよ！

むうん、どこか文才とやらは落ちていまいか。

次回からスーフィンです。結婚式はクリスマスに合わせようと思っています。応援よろしくお願いします。

## 9 組目（前書き）

ど、どうも！そろそろクリスマスですね！

それなのにまだあと2話かいてないとか！

ヤバいです！

ということだ（どういうことだ）典芬プロポーズの回ですっ…！

## 9 組目

「ママーっ!」

呼ばれた方に振り向けば、たたた、と走ってくるシー君の姿。その手に握られているのが、さっきまで花嫁　ラトビアさんの手に握られていたブーケだったから、僕は驚いて目を見開いた。

「シー君っ、そのブーケどうしたの?!」

しゃがみ込んで、飛び込んできたシー君を受け止めてから、シー君と向き合い聞いた。

「なんか落ちてきたから取ったですよ。ラトビアのブーケ!」

「あー…」

子供は無邪気だよなあ…。これのためにどれだけの女性が頑張っていたかなんて知らないで…。

「?　なんか駄目なことだったですか?」

「えっ、ううん、いいんだよ。」

ただ女性たちが幸せになる…かもしれないチャンスを、一回無くしてしまっただけで。

「でもシー君が貰っても効果あるのかなー」

「効果、ってなんのことですか?」

「え? ああシー君は知らないのか」

首を傾げるシー君に、くすりと笑う。そっか、知ってたらきつと取らないもんね。

「効果、って言ったのはね、ブーケをとった人は次に幸せになれる、って言う言い伝えのことだよ」

「次に、幸せになれる？」

「うーん、まあ次に結婚できる、ってことかな？」

「結婚…」

そこまで聞くと、シー君はブーケを見つめた。どうしたのかな？と思っていたら、シー君がブーケを僕に差し出した。

「え、シー君？」

「ママにあげるですよ」

「え？」

「…ママに幸せになってほしいですから」

目を見開いたまま、差し出されたブーケを受け取った。シー君がそんなこと言うなんて思ってなかった。

「ママ、まだパパと結婚してないですよね？」

「うえっ?! あー、うんまあ…」

「だから、パパと結婚するですよ!」

「へえっ?!」

な、なに言い出すのこの子?!

スーさんと結婚なんて、…一緒にいるのが当たり前すぎて考えたことなかった。

…でも、結婚か。

「あっ、パパー！」

「へ、スーさん?!」

俯いていた顔を上げると、そこにはスーさんがいた。さっき誰かと話してたけど、もう話終わったのかな。

「すまね、フィン

長話になっだ」

「いえ、いいんですよ」

にこりと笑うけど、さっき考えてたことがことだけに緊張してしま  
う。今の笑みもきつとぎこちなかっただろう。

「…フィン、おめ、それ…」

「へ? あ、」

スーさんが僕の手元を指差す。ブーケのことだ。

「シー君に貰ったんですよ、これ。」

「…シーに?」

「パパ、ママを幸せにしてあげてほしいのですよ」

「?」

「え、わ、シー君?!?!」

スーさんは首を傾げる。シー君なんてこと言うのもお!

「…フィンを、幸せに?」

「そうですよ!ママと結婚してほしいのですよ!」



「え、ちょちょちょシー君っ?!?!」

この子爆弾発言を…!

僕は顔を自分でも分かるくらい真っ赤にして、わたわたと慌てた。

「あ、あのスーさ、」

「…そが。結婚…、な」

スーさんは僕を見て、ぷすりと笑った。

「え、な、なんで笑うんですかあ?!?!」

「…すまね」

スーさんは一度左手で顔を覆って、それから手を離し真顔になった。

「…フィン、」

「は、はい」

「結婚、…すねが?」

「…へ?」

僕は静止した。

今、この人はなんと言った?

「んだがら、」

結婚、すねが。」

「へ、」

え、

えええええっ?!?!」

結婚、って、もしかしなくても、それって、

「プロ、ポーズ…?」  
呟けば、彼は優しく微笑んで（でも多分、僕ぐらいしか分からない変化だろう）頷いた。

「…おめが、ええなら。」

ああ、この人は…!

僕が、断るはずなのに!

「……喜んで!」

精一杯の笑みで言うと、スーさんは一瞬驚いたような表情をして、それからそれは安心の表情に変わった。

## 9 組目（後書き）

お分かりになったとは思いますが、スーさんが言ってた、すねが、は、しないか、です。

方言とか、いつものことだが無理）、．．．（

次回はクリスマススイヴに更新予定です…

典芬のクリスマスの奇跡を起こそうぜ！ ？

## 聖誕祭の幸福（前書き）

メリーメリークリスマス……！！！！イブ……！！！！

イブでも私はネット充してます（・・・）リア充爆発しろ！

今回は本編中でもクリスマスになってます。ところでなんでクリスマス当日よりイブのほうが盛り上がるのでしょうか？

## 聖誕祭の幸福

「…あ、また雪ですよー！」

窓際に立つシー君が言う。その言葉通り、窓の外ではさつきまではやんでいた粉雪がちらほらと舞っていた。今日も外は寒いだろうなあ、と思う。

「ホワイトクリスマス、ですね」

「まあ、この辺では当たり前だけどね」

窓際に立つラトビアさんと、その隣のエストニアが笑う。僕も自然と笑みがこぼれた。

「…ん、フィン？」

「はい？なんでしょう」

「…なじよして笑っとる？」

隣に立つスーさんの言葉に、僕は目を細めた。

「…………エストニアとラトビアさんが幸せそうなのと、

…自分が幸せだから、ですかね？」

そう言って胸に手をやる。もう今日は、朝から胸がいっぱいだった。

今僕は白のウエディングドレスを見にまとい、スーさんも白のタキシードを着ている。式が始まるまではまだ時間があるけど、準備はもうほとんどできていた。

ちなみに結婚式をクリスマスにしようと言ったのは彼の計らいだ。クリスマスイブにはサンタとしての仕事もあるから、もちろんイブは避けてもらった。

きゅっと胸の前で両手を組み合わせる。ああ、なんなんだろうな、この言い表せない感情は！

「ママーっ!」

「わ、シー君。どうしたの?」

ととと、と飛び込んできたシー君を受け止める。上げられた顔は、かわいい笑顔だった。

「へへ、」

「ママ、結婚おめでとうなのですよ」

「……!」

そういえば、シー君からはまだちゃんと言って貰ってなかったと気付く。僕は目を見開き、つい泣きそうになってしまった。

泣くのは堪えて、少し無理に笑顔を作る。ありがとう、と返事をすれば、シー君はにこりと笑った。

「パパも、結婚おめでとうなのですよ!」

「……ん」

スーさんはありがとう、と言う代わりに、シー君の頭を撫でた。スーさんも、嬉しそうな表情をしていた。

「……あ、そうですよ、もうひとつ!」

「なに？シー君」

僕が聞けば、シー君は再びにっこり笑って、

「メリークリスマス！」

と言った。

「……メリークリスマス」

そう言っただけで笑った僕とスーさんは、違っただけで同じな、幸せな表情をしていた、と、後でエストニアとラトビアさんに聞いた。

聖誕祭の幸福（後書き）

イベントって楽しいですよね！（\*´、\*）クリスマス万歳！

明日も更新したいと思います！頑張ります）・・・（



愛と涙と幸せと（前書き）

メリークリスマス！どうも火野村です！

今回で…やっと、結婚編完結でーーす！

長かった…なあ…

最初の男同土版からだど、約半年です…

これも応援して下さいました皆様のおかげです…有難うございます。

## 愛と涙と幸せと

「病めるときも、健やかなるときも」

牧師が言う言葉はうすぼんやりとしか耳に入っていない。なぜなら、涙を必死にこらえるので精一杯だから。

スーさんと一緒に暮らすのはもう当たり前になってしまっていて、それが結婚しているみたいで、本当に結婚するなんてこれまで考えたことなかった。最近になってよく結婚式に呼ばれるようになって、そうだった。

でも本当に結婚することになったら、嬉しさとか、愛、とかが溢れてきて、凄く幸せってものを実感して。

結婚式になったらもう、本当に胸がいっぱいで、泣きそうだった。

涙をこらえながら誓います、と呟くように言って、指輪を交換して。誓いのキスは、もう我慢できないかも、と思ったけど、耐えた。

キスしたあと、スーさんの目は僕の目を真っすぐに見つめてくる。その目には、優しい光が映っていた。

「（……………フィン）」

「（……………はい?）」

「（……………愛、してる）」

僕は息をのんだ。

もう、この人は、僕がどれだけ耐えていたかも知らないで！

「（……………僕も、…です）」

ポロポロと零れる涙を指先で拭いながら、言った。ああせつかくしてもらったメイクが落ちちゃうな、なんてことを思ったけど涙は止まりそうになかった。

ブーケトスのため、沢山の人を前にして僕とスーさんは立っていた。外は寒すぎるから、屋内、だけれど。

僕たちのためにこんなに多くの人達が集まってくれたんだなあと思うと、嬉しいという気持ちと、感謝の気持ちでいっぱいになった。

僕は微笑むと、ブーケを頭上に突き上げた。

「…いきますよー！」

掛け声から一息おいて、僕はブーケを投げた。

ふわりと舞ったブーケは綺麗な紫色のドレスを纏った女性がキャッチした。女性は小さくだが、歓声を上げていた。

泣いた後の目が痛くて、少しだけ目を押さえた。これでもう今日は泣かないかな。

ぼん、と頭に何かが乗る感覚に、手を離れた。スーさんの手が、僕の頭に乗っていた。

「…スーさん」

「…ん」

にこりと笑うと、彼も笑い返してくれた。それでまた胸がいっぱいになって、少しだけ、涙ぐんでしまった。

愛と涙と幸せと

(あなたと結婚できてよかったと、心から思います)

## 愛と涙と幸せと（後書き）

ありがとうございましたー！！！！！！

結婚編、完結！いえい！

後で補足とか活動報告で書くんでよければ閲覧下さい！

ここまで応援ありがとうございました！これからも頑張っていくた  
いと思いますのでこれからも宜しくお願いいたします！

## 新生活 (前書き)

どうも火野村です。今回は、米英の結婚式のあとのお話です。  
突発的1時間クオリティーです。  
うん、ただのバカップリ(r y

## 新生活

見慣れた家なのに、どこか違うように感じるのは、積まれた段ボール箱のせいだろうか。

「よし、これで最後！」

「ありがとな、アメリカ」

「ははっ、You're welcome！」

笑う彼もどこか違って見えて、なんだか緊張してしまう。

「今日からずっと、君と一緒に過ごせるんだね」

彼は積み上がった段ボール箱を見て言った。その表情は、優しい。

「なんか、まだ実感わかねえなあ。」

「そう？」

ふう、と息を吐く。俺は自然と笑った。

結婚して、そろそろ一週間。家から必要なものを持ってきて、アメリカの家へ。そう、同居、するため。

今日から俺はここに住むんだと思うと、なんだか恥ずかしかった。

「…なんか夢みてえ」

「…それ式のときも言ってたぞ」

「仕方ねえだろ。」



だって、お前と一緒に暮らせるなんて、夢としか思えないんだから。言ったあと、恥ずかしくて顔が熱くなった。気付かれないようにと俯いたけれど、おそらく気づかれただろう。

「…愛してるよ、イギリス！」

「わっ？！いきなり抱き着くなっ、ばか！」

抱き着かれて感じた体温に、幸せだ、と思ったのは、言うまでもないだろうな。

新生活  
(後書き)

しばらくこんな感じの、夫婦な話が続くとおもいます…。宜しくお  
願いします。

旦那サマ愛してる！（前書き）

どうもこんばんは火野村です。

今回の話はただ新婚独伊夫婦がいちゃいちゃしてるだk（ry

砂糖吐くくらいの甘さを目指しました。どうぞ

旦那サマ愛してる！

ソファーにふたりで座りながら、ぎゅー、とドイツの体を抱きしめる。すると、なんだ、と予想通りの声が頭上から降ってきた。俺はえへへ、と笑うと、またぎゅー、とドイツを抱きしめた。幸せだなあ、と、思う。

「……お前はなんなんだいいつも……。どうした？」

結婚してからずっとこうじゃないか。とドイツが俺の頭を撫でた。

「…だって、幸せなんだもん。」

こうしていると、幸せだーって心の底から思うんだ。俺はそう言って笑った。

結婚してから、そろそろ2週間になる。新居（といっても、ドイツの家を少し増築しただけだけ）にも、だいぶ慣れてきたところだ。新婚生活はなかなか順調で、自分で言うのもなんだけど、毎日らぶらぶ、って感じかな。

「…全くお前は…」

「だってほんとだもん」

ドイツあいしてるー！と今度はドイツの首に腕を回して抱き着いた。

「ねードイツ、キスしてキスっ」

「はあ?!お前、何を言うんだ突然!」

「いーじゃん、ねードイツ、キスしてほしいであります！」

ドイツは顔を真っ赤にしたままキスしようとはしてくれない。でもねだり続けていればしてくれるってことは、俺だけが知ってるんだ。

「…あぁもう、まったくお前は…」

ちゅ。

……ほらね！

「……ドイツ、全身全霊あいしてるよーっ」

「わ、イタリアお前、っ苦しい！」

ぎゅーぎゅー抱き着いて、ドイツの顔中にキスの雨を降らせた。

ああほんとに大好き愛してる、俺の、俺だけの旦那サマ！

旦那サマ愛してる！（後書き）

ありがとうございます。独伊かわいいよ独伊  
新婚さんイイナ！

## 今年最後のありがとう（前書き）

どうも火野村です。もうそろそろ年明けですね。

今回はスーフィンで12月31日です。新婚さんバンザイ。

暖炉とロウソクの明かりだけの室内を想像しつつお読み下さい  
た  
だの作者の理想

## 今年最後のありがとう

「今年も終わり、ですねえ」  
「……んだな」

僕は窓の外を見た。雪は止んでる。けど、やっぱり寒いだろうな。

12月31日、今の時間は午後11時半くらい。シー君は12時まで起きてる、って言ってたけど、結局寝ちゃった。

「今年は、いろいろありましたよねえ」

「……だな。」

「プロポーズされて、結婚式の準備をして、結婚式を挙げて  
なんだか結婚ばかり意識してましたね」

「……んだな」

気配にそちらを向いてみれば、スーさんが隣に立っていた。  
窓の外を見るその目は、優しい。

「あ、ウエディングドレス決めるとき、わざわざ作るうってスーさんが言い出したのはびっくりしましたよ。」

「……そーなのけ？」

「はい。でもあのドレス、すごく可愛くて大好きです」

「……そつが。」

「……お前に、似合うように、デザインして貰った、から」

「……スーさん」

微笑む彼に、胸がいつぱいになる。



僕は、幸せを噛み締めた。

「…フィン」

「はい?…ひよわっ?!」

名前を呼ばれたと思ったら、いきなり抱きしめられた。な、何?!  
慌てていると、フィン、とまた彼の声。それと共に、頭を撫でられる感覚。

「…ありがとう」

ぎゅっ、と抱きしめられて、僕は目を細めた。

「……」

抱きしめ返して、小さな声で、愛してます、と一言、付け足しておいた。

## 今年最後のありがとう（後書き）

ありがとうございます！。新年は夫婦な話を各CPひとつづつく  
らい書いてから、妊娠編かきたいと思います。

## 大好きな君（前書き）

あけおめです火野村祭です。

新年はじめのHappy!〜は露中です。12月30日露とまの誕生日祝いを忘れていたのでそういう意味もこめて。例によってただいちゃこらしてるだけです…

## 大好きな君

「ちゅーうごーくん!」

「うわっ?! な、なにがあるかロシア?! いきなりあぶねーじゃねえあるか!」

ソファーに座りながら、後ろから中国くんを抱き抱える。何か言ってるけど別に気にしないもん。

腕のなかにすっぽりとか、中国くんってほんとちよūdいサイズだよ。ああほんとこうしていると癒される。あ、中国くんの匂いだ。一緒に暮らしていると匂いと一緒になってくるけど、まだ完全に一緒にはなっていないみたい。やっぱりこの匂い安心するなあ…。

「おい聞いているあるかロシアっ! 毎回毎回、ほんと人の話を聞かぬーやつあるな」

「別にいいでしょ。そんな注意僕が聞いて守ると思う?」

「う…、…思わねえ…あるが」

でも人の話はちゃんと聞くべきあるっ!」

「はいはい。こんな僕と結婚したのは君だよー」

「お前結婚してからいつもそれあるよっ!」

ああまた騒ぎ始めた。んもお、可愛い僕のお嫁さんは小言が多いなあ。僕そついうのあんまり好きじゃないよ。

しばらく黙って聞いてたけど、お小言は終わりそうにない。はあ、と小さなため息をつく。仕方ないけど、そろそろあれ使つか…。

「……………中国くん。」

いい加減やめないと襲うよ?」

びたり。  
声が止んだ。

……これは毎回効果てきめんだなあ。一回ほんとにやったときのやつがよっぽど強烈だったのかな。

「……お前が悪いんじゃないかあるか……」

「ん。そーだねごめんね」

拗ねたような顔で呟く中国くんをきゅっと抱きしめて、後頭部にキスを落とした。同時に静寂が落ちる。  
しばらく沈黙。

そろそろ静かなことに耐え切れなくなつて、中国くん、と彼女の名前を呼んだ。

「……あのさ…僕、思ったんだけど」

「……何あるか」

「……君の結婚相手、ほんとに僕でよかったの？」

名前を呼んだのはいいけど、何を話せばいいかわからなくて、ただ思いついたことを言った。

これはさすがになかつたかなあ、と思いながらも答えを待つ。正直なところ、これは結婚してからずっと思っていることだった。

なんだかいつも僕より堂々としていて、僕なんかはふさわしくないんじゃないかと思うことがよくあって、いつも不安になるんだ。

「…えーと、中国くん？」

中国くんは黙つたままだ。表情も見えない。ああやっぱりこの質問はなかつたかな。沈黙のままが嫌で、他の話題を、と思いい口を開い

た。

「ちゅ」…お前、そんなこと考えるのはやめるよろし「……………え？」  
今、なんて？中国くんに聞き返すと、だーかーらっ、と言ってがば  
つと中国くんは振り返った。

「冗談じゃねえなら、そんなこと考えるのはやめるよろしっ！」

一息に言っつて、そのあと深呼吸。僕はぽかんと口が開いたまま動け  
なかった。

「…………お前馬鹿あるか馬鹿あるかっ?!」

お前はっ、我の、何あるか！」

「…お、夫、だけど」

「じゃあ自信もつよろしっ！」

我が、…お前がいいんあるからっ！」

中国くんはそう言っつたあと真っ赤になっつて俯いて、なにも言わなく  
なっつた。

…まさか思いつきの質問で、こんなこと聞けるなんて思っつてなかつ  
たなあ。

「…中国くん大好きだよ！」

「っ、…………そこはっ、あい、してる、あるっ」

「ふふふっ、じゃあ、愛してるっ！」

抱きしめて、幸せを噛み締めた。もうほんとに可愛いなあ。僕の奥  
さんは！



## 大好きな君（後書き）

今回長いな…

露さまの襲うよ発言はすみませんとしか言いようがないですほんとすみません言わせたかっただけです！

露中は殺伐としてるのもいいと思えますが夫婦ならばほんとラブラブだといいです。露さまがそういうの好きそっっていう偏見。



夫婦、だから（前書き）

こんにちは火野村です。寒いです。

今回は夫婦な愛拉を書きましたがぶつちやけ『これ、どつなの？』  
って感じなのでまた他の書くかもです。  
文才がほしいです。

## 夫婦、だから

はあ、と、ため息をひとつ吐き出す。すると、どうしたの？と彼の声がした。

「悩み事？なんなら相談に乗るけど」

「エストニア…」

彼は僕の顔を覗き込みながら、ソファアームに座った。

心配そうな彼の手には、指輪が光っている。それを見て、また憂鬱さが増してしまった。

「あんまり溜め込むと体調にも影響出るから、無理しちゃ駄目だよ」

「……いえ、大丈夫です。大したことじゃ、ないので…」

そう、本当に大したことじゃないんだ。ただ、僕が気にしなくてもいいことを気にしているだけで。

俯いて、また小さく、ため息を吐く。

「本当に、ささいなことなんです。だから、気にしないで下さい」

「そう言われても…僕が気になるんだから仕方ないじゃないか！」

きゅっと手を握りしめる。でも、僕のこんな小さな悩みなんて、打ち明けても…。

そんなことを思っていたら、エストニアの手が、僕の手を取った。彼の手は、温かった。

「ねえラトビア。」

僕たち、夫婦なんだよ？お互いの悩みくらい共有しないでどうするのさ。

どんなことでも、二人一緒、だろう？」

「……………え、……………あ、」

夫婦。

その単語が、すとん、と心に落ちてきた気がした。

……………ああ、そつか。夫婦なんだ。理由もなく、納得した。

「もっと僕を、頼ってよ」

きゅ、と僕の手を握る彼の手に力が入る。僕は唇を引き結んだ。

「……………僕、」

エストニアと比べて、体が小さいじゃないですか」

「っ、…っ、うん」

「だから、周りから見ても夫婦だって、分からないんじゃないか、って。むしろ、兄妹に間違われるくらいでしょう？」

「…うん」

「だから、自分が小さいってことが嫌で。」

『僕はこの人の妻なんです！』

って堂々と言えてないみたいで。

……………嫌、なんです」

そこで口を閉じる。打ち明けて、しまった。

こんな小さなこと、気にしてること自体恥ずかしかった。沈黙が、辛い。

もしかしてこんなことで悩んでる僕に呆れて、エストニアは何も言わないんじゃないかとまで思えてきて、慌てて彼の表情を見ようと彼のほうへ振り返った。

「…う、わっ?!」

するといきなり彼の手が伸びてきて、僕の頭を撫でた。少し、雑な撫で方だと気付いて彼の顔を見れば、そこには、優しい彼の微笑み。

「……………もう……………」

そんなこと、気にしてたのか。」

「なっ……………」

そ、そんなことってなんですかそんなことって!ば、僕は本気で悩んでたんですよ!」

くすくすと彼は笑う。まさかそんなこと言われるなんて思ってなかった。顔が熱い。

「堂々としていればいいんだよ」

「…っへ?」

「自信を持ってはいいいんだよ。ラトビアは僕の、妻、なんでしょ?」

「は、…はい」

「僕はこの人の妻なんだって、この人と夫婦なんだって胸張って堂々としてればいいんだ。」

周りにどう思われるかなんて関係ない。僕たちは夫婦なんだ、って、堂々と言えればそれでいい。

見かけなんて気にしなくていいんだよ」

彼は、ふわり、微笑む。レンズ越しの彼の瞳がとても優しく、思わず涙ぐんでしまった。

「…ラトビア。」

「はい」

「……抱きしめて、いい？」

「……はい」

次の瞬間、感じる体温。

目を閉じると、幸せばかり感じる気がして、涙が出てきた。

ああ、この人と結婚してよかったな、と、心から、思えた。

夫婦、だから（後書き）

愛拉は身長差すごいと思う。

そして見た目年齢が二人とも未成年なんで夫婦とはわかりにくいのではないかと思えます

てかぶっちゃけ見た目兄妹じゃん？

あと他のCP…なに書こう…

Love・Cocoa・Happy・(前書き)

こんにちは、火野村です。今回の話はリクエストの香氷です。

スーフィン結婚式のあとの話です。香氷かくのは初めてなのでおかしいところもあると思いますが、許容して下さい…

ちよこつと氷の外見設定

髪型は後ろ髪だけ長くなった感じ。美人。体型はスレンダー、つまり貧にゆ（ry

Love, Cocoa, Happy.

ふう、と息を吐く。もうそろそろ、日付が変わる時間だ。ほんの少しだけの眠気の中、僕はソファーに沈みながら今日のことを思った。今日は、フィンとスヴィーの結婚式、だった。

フィンの綺麗なドレス姿、スヴィーのタキシード、2人の誓いのキス、泣きながらも笑っていたフィンの顔、ブーケトスでざわめいた会場。

すべて鮮明に思い出せる。  
なにもかもが綺麗で、そして幸せに満ちていて、外に降る雪ですら2人を祝福しているみたいだった。

そんな2人を、別に、うらやましいとまでは思わないけれど、  
……いつか、いつか僕も……

「……イース？」

名前を呼ばれて、はっとする。声が出たほうを見れば、香が立っていた。手には湯気のたつマグカップがふたつ。

「sleepy的な？大丈夫？」

「ん、大丈夫……ありがとう」

マグカップを受け取ると、じわりと温かくてなんだか安心した。マグカップの中身は、ココアだった。



香が隣に座ると、少しだけソファーがきしりと音を立てる。香がこちらを見てきたので、何？と少しぶっきらぼうに返した。

「…今日さ。フィンさんとスウェーデンさんのweddingまじ素敵だった的な」

「…ん、そうだね」

「なんか2人ともマジHappy的な感じだったことね？」

「うん」

相槌をうちながら、僕はココアを一口飲む。ん、ちょっと熱かった。

「んで…さあ、その……」

「ん？」

香が言葉を切って俯く。何、この煮え切らない感じ。意味わかんない。

何となしに香の視線をたどると、彼が持ったままのマグカップの、ココアの水面に当たった。そのあと香の瞳を盗み見る。

「……何？言いたいことあるならはっきり言えば？」

むに、と香の頬をつねる。相変わらず柔らかい。

つねる指を離せば、香がいきなりこちらを向いた。若干びっくりしてから、香のまっすぐな視線に気付いて平静になる。

「……………あの、さ。その…wedding見て思った的な感じなんだけど。」

イスと、いつか、あんなwedding出来たらいいなーみたいなの……」

一瞬、香が言っていることの意味が分からなかった。2回ほどゆっくり瞬きをした後やっと意味が分かって、顔が熱くなった。

「な、な、なに言ってるの?!?!意味わかんない!!」

女になって長くなった髪が揺れる。落ち着こうとココアを一口飲んだ。もうココアはぬるくなっていた。

「……イース」

香が僕の髪を撫でて、少しびくり、としてしまう。香の顔が見られなくて、僕は俯いたままだ。

「……もう何なの…意味わっかんない何期待してるの?」

「……まあ、返事的な?」

「………何期待してるの」

こいつ馬鹿じゃないの、と本気で思った。僕が答えられると思ってるの?!

「………バーカ」

顔を上げてそう言えば、香は目を見開いてまぬけな顔してた。答えなんて言う必要ないでしょ。と、視線で伝えた。直接は言えないけど、どうせは、おんなじ気持ちなんだから!

「明日 engagement ring 買いに行かないの？」  
「…もう今日だけだね」

「いいよ、と言って微笑んだ。繋いだ手が温かくて、幸せだと思った。」

Love・Cocoa・Happy・(後書き)

グダグダでマジすみません…っ！精進してえよっ…(、；、；)

この2人は結婚目前だと思えます…幸せになればいいよ。  
もしかしたら続きかくかも。

次回は丁諾か土希の予定です。

だってわたしだけの（前書き）

どうも、火野村です。

今回の話は丁諾です。かいてみました。

で最初に諸注意。まず、グダグダです。そして、方言とか無理っす

！（´・`・`・`）

てかノルさんって何弁？津軽弁とか聞いたけど本当かい。

諾の外見設定

髪はそのまま長くなった感じで、基本一本にまとめて一方の肩の前に流してる感じ。超美人。体型はイースと同じく（兄弟だし）スレンダー、つまり貧（言わせねえよ

だってわたしだけの

さてこの状況どうしたのか。とデンマークは冷や汗をかいていた。

今、デンマークはノルウェーとショッピングモールへ来ているところである。だがノルウェーが一人で済ませたい用があるからと言って、彼を一人で待たせていた。そんな時だった。

デンマークの目の前にはそこそこの容姿な女性3人。何故かと言えば、俗に言う逆ナン、というものをされているからである。

(困ったっぺ…)

デンマークはとにかく困惑していた。こんな状況になったことは初めてだったからだ。いつもはだいたいの場合ノルウェーがいるため、声など掛けられることはないのだ。

「ねえおにーさん？」

さっきからずっと女性たちは甘ったるい声で話し掛けてくる。どう返していいものか。

(ノル) …早く戻って来っぺ…！)

デンマークは念じたが、(当たり前だが)あまり意味はないようだった。

遊びに行きましようよ、と真ん中の女性が言ったと同時に、腕を引かれた。連れていかれる、とデンマークは思った。

しかし目の前の3人ともが同じような驚愕の表情をしているのに気付き、初めて手を引いている人物を見た。

「ノル！」

「…おめは何しどる…」

ノルウエーは呆れ顔で溜め息をついた。そしてデンマークの目を見てから、睨むような目で女性たちを見た。

女性たちが少し怯んだのを確認したノルウエーは、ぐい、とデンマークを引き寄せ、腕に抱き着くような形になった。

「…おめら、

人ん男に何しどるだ。」

ノルウエーが今度こそ確実に女性たちをきつ、と睨む。怯んで動かない女性たちを気にしようともせず、彼女はデンマークの腕を半ば乱暴に引いてその場を後にした。

「の、ノル？」

怒つとるんけ？と声を掛けると、ノルウエーは一瞬だけ振り向いた。

「…このでれすけ」

それだけ言い、彼女はただ早足で進んでいく。

やっとノルウエーの足が止まり、手を離された。デンマークが辺りを見渡そうと顔を上げれば、目の前には、

「……………宝石、店？」

そう、光り輝く宝石店があった。デンマークがノルウエーの方を見れば、彼女はさも当たり前のように店内へと入っていく。彼は慌てて後を追った。

「ノル、どうということだっぺ？」

宝石店なんて来て？と聞くがノルウエーは答えない。デンマークは疑問ばかりが浮かんだ。

ノルウエーが立ち止まったのを見てデンマークはその隣へ行く。彼女の視線をたどれば、そこはガラスケースの中に入っている指輪だった。

「の、ノル？」

「一番安いんでええな」

は？とデンマークが言ったと同時に、宝石店の店員へ彼女が声を掛ける。

店員がやって来ると、ノルウエーはガラスケースを指差し、こんでザインの指輪ペアで、と淡々と言う。

「はい、かしこまりました。サイズはいかがでしたでしょうか？」



「…こいつん指に合うもん1つと、俺ん指に合うもん1つ」

ぐいっとノルウェーはデンマークの手を持ち上げ、指を店員に見せる。同じ用に自分の指も見せた。

「かしこまりました。サンプルを持ってまいりますので、少々お待ち下さい」

店員は軽く頷いてからそう言うと、目の前から立ち去った。それを確認するかしないかがぐらいで、デンマークはノルウェーのほうを向いた。

「ノル?!なんだっぺこれ?!指輪、って」

デンマークの言葉を遮るように、ノルウェーは左手の人差し指で彼の喉笛あたりを突く。

デンマークがきょとんと目を見開けば、ノルウェーが口を開いた。

「…首輪、だ」

ふっと微笑するノルウェーに、デンマークはさらに首をひねる。お待ちせいたしました、と店員の声があった。

「…おめは俺のもんなんだべ…？」

なのに、このでれすけ、馬鹿あんじ。  
そんな眩き、デンマークには、当然聞こえないのであった。

だってわたしだけの（後書き）

グダグダ…です…すみません…

やはり方言は無理だと再び悟りました。もう…無理だ…

次回は土希の予定ですが、他のCPのリクエストも募集中です。夫婦編でまだ描いてないCPとかリクエスト採用率高いですよ！ 何様

是非よろしくお願いします。

## とある日の平和な午後2時（前書き）

こんばんは、火野村です。

今回の話は、予告通り土希です。でも今回は、嫌い嫌いでも本当は、みたいな土希じゃなくて、好き好きオーラたれ流しな土希です。サーセン。

特に結婚とかは考えてない感じだと思います。

ギリシャさんの外見設定

髪はそのまま、身長は女性にしては高めで、体型は少しガチツとしてる感じ。スタイルがかなりいい。結構巨乳。

## とある日の平和な午後2時

青い空、眩しい太陽。まったく自然ってーのはいいもんだよ。  
ざりざりと砂を踏みながら歩く。少し暑いくれえの、この気候は心地好いもんだ。

「どこにいるんでいギリシャよお…おーいギリシヤー」

あいつの名前を呼びながら、遺跡のまわりを歩き回る。さっき家に行ったらいなかったから、おそらくこのあたりで昼寝でもしてんだろう。

……と思ったら、案の定。

見つけた。

「…ったくよお…」

無防備な寝顔晒しやがって…。

沢山の猫たちと一緒に眠るそいつは、幸せそうな顔で寝息を立てていた。

俺の気配に気づいたんだろう猫たちが起きはじめ。まあお、にやあお、と欠伸だか鳴き声だかを出していた。

「へいへい猫たちよ、どいてくれよ」

猫たちをどかそうとすれば、でけえ鳴き声をあげて一匹の白猫が飛び掛かってきて驚く。その猫に続いて、他の猫たちまで飛び掛かってきてさすがに慌てた。

「うおお、わっ？！てめえらっ、離れる！ちよっ、いてえいてえ！」

猫たちが爪をたてやがる。いてえってんだ、離れやがれ！

俺が猫相手に慌てていると、くすくす、と笑い声。猫たちも気づいたらしく、一匹、また一匹と離れていく。笑い声のしたほうを見れば、予想通り寝起きのあいつが笑っていた。

「何してるんだよ…お前。…起きがけに笑わせるな。」

そいつは目を細めたかと思えば、ひとつ欠伸をする。

こんな一挙一動すべてをかわいいと思っちゃうのは、多分仕方ねえことなんだろうな。

「お前…猫に何したんだ？…まあお前なら、あんなこと、当たり前…だけど」

「おうギリシヤ、どういう意味でいそりゃ。」

「お前が猫に嫌われてるって意味だ…トル」

そーかい、と返事をして隣に座り込む。つい、よっこらせ、と言ってしまったら、ギリシヤにおっさんくさい…と呟かれた。ほっとけ。

「…てかよお、お前、なんでこんなところで寝てやがんでい。」

「…俺の勝手だろ」

「そっいうことじゃねえよ。てめえ、今は女なんだからよお。少しは危機感持ったらどうでい」

そう言えば、ギリシヤは不思議そうな顔でこちらを見てくる。俺の言葉の意味分かってねえな、こいつ。

「自覚ないだろうがな、てめえはめつたにいねえようない女なんだよ。」

だからそのへんで寝てて、襲われでもしたらどうすんでい

つい早口になりながら、言い切る。隠しきれねえ照れが顔の熱さに変わっていく。

ギリシヤの手元を見れば、茶色の猫が撫でられながら幸せそうな顔をしていた。ギリシヤがふっ、と笑うのが聞こえる。

「…馬鹿だなあお前」

「だっ、誰が馬鹿でい！」

「だから…お前だよ」

ギリシヤの膝の上から、猫が飛び跳ねるようにしていなくなる。すると今度は別の猫がその場所を占拠した。

自分の膝の上でごろごろと喉をならす猫を撫でながら、ギリシヤはこちらを見てきた。淡い翠が、いつもより綺麗に見えたのは、気のせいだろうか。

「…そういうときは、

お前が助けにきて…くれるんだろ？」

ふわりと、柔らけえ向かい風が吹く。それと同時に優しげに微笑んだ俺の恋人は、本当に誰よりも、何よりも、美しいと思った。

「……あんまり期待しすぎると、それこそ痛い目みんぜい！」  
「はいはい……」

ばたりと後ろに倒れこんで、空を見上げた。青い空がどこまでも続いている。

自然があって、愛している人が隣にいて。そうかこれが幸せってやつか、と、思った。

「……トル」

「……ん？」

「……好きだ」

「……おう。」

俺もだ、と、声にするのではなく、口づけで、伝えた。



とある日の平和な午後2時（後書き）

あれ、なにこのバカップル。

あれ、なにこれ。

つてなりました作者自身。すみません本当すみません。土希ファンの方すみませんマジで

んでまあそれはさておきですね（切り替え早っ）、リクエスト募集とかの話はば。

前回のあとがきでもかきましたリクエスト募集中です。できるだけレギュラー9組で、かいてほしいシチュエーションなんかがありましたらリクエスト下さい。特にまだ夫婦編かいてない4組のリクエストを…よろしく願います。是非是非っ、よろしく願います！

今回は、リクエストあったらそれで、なかつたら…まあ、その時考えます。

おそろい。(前書き)

サブタイトルがどうにもなー…と思います火野村です。今回はリク  
エストの、立波でショッピングです。いつものごとくグダグダです  
が…

おそろい。

「リトリトリト！ちよっあれめっちゃかわいくね？どうよ？」

「まだ買うのポー？！もうそろそろ限界なんだけど…」

「大丈夫！リトならまだいけるし！」

いや、お金的にも体力的にももうそろそろ無理なんだけど…。

俺がそう思ってげんなりしているのも知らずに、ポーは、好みそうな服がショーウィンドウに飾られた店へかけていく。

今、ポーと俺は買い物に来ている最中だ。新生活に必要なものを買って思ってたのに、ポーは自分の服とかもちゃっかりねだってくる。もうすごい数の店を回っていて、そろそろ両手がいっぱいだから困ってるんだけど、ポーのあの元気さではまだ留まりそうにない。

「リトー何しとるん？早くー」

「あー…はいはい…」

なんだかんだでポーに流されてしまう自分を悲しく思いつつ、ポーのいる場所へと速足で向かった。隣に並んだら、すぐさま店に入っていく。俺はポーに気づかれないように、小さくため息をついた。

「な、これいいと思わん？めっちゃかわいくね？」

そう言うポーの手には、ハンガーにかかった、白にピンクのフリルつきワンピース。可愛いけど、さ…

「うん、いいけどさ…俺が持ってるの、半分以上ポーの服だからそ

ろそろ……」

「えーでもでもお、今日こついう服まだ買つとらんしー」

「でももうお金もなくなってきたし、」

えー?!とポーが声を上げる。声大きいよ、と慌てて言い聞かせた。ポーは頬を膨らませて、んじゃ服はもうやめる!と服を元あった場所(と、思われるところ)に戻した。

ん?…『服は』?と俺が首を傾げれば、ポーがそれに気づいたようで、口を開いた。

「あ、実はな、俺買いたいもんがあるんよ。先買つときゃよかつたし」

行くしりト、とポーが俺の手を引いて、店を出る。ちょっとだけ、肩にかけていた袋がずり落ちた。

手を引かれるままに入ったのは、小さな雑貨屋だった。木でできた濃い茶色の棚や壁、置かれた商品は素朴なものばかり。そういえば、前にも来たことがある気がする。

「お、あつた!」

ポーの声と共に、手が離された。くるりとこちらを向いたポーの両手には、

マグカップが、ふたつ?

「なーリト、このマグよくね?」

「え、マグカップ?」

マグカップならまだうちにあるじゃない、たとえば、ポーはこれがええんよー！と頬を膨らませた。

ポーの手には、シヨッキングピンクのマグカップと、淡い青のマグカップ。デザインはふたつとも一緒だった。

「これ、俺とリトの色やから！だからおそろで買っ！」

「……ポーと俺の……」

そう呟いてから、ついふつと吹き出してしまった。なんでそこで笑うん？とポーランドに言われたけど、自分でも良くわからなかった。でもまあ強いていえば、おそろい、とか当たり前すぎて、改めて言われるとなんか笑えたっていうか、照れた、みたいなの。

「リトおかしーしー！」

「うん、ごめん」

ふふつ、と笑って、じゃあそのマグカップ買おっか？と言つと、ポーは満面の笑みを浮かべた。

おそろい。(後書き)

ありがとうございました…むずかしいな…うう…

そろそろ夫婦喧嘩な話書きたいです(・・・)

夫婦喧嘩をした日（前書き）

どうもこんばんは火野村です。最近土日しか更新してないな。今回は西口マです。しかし最近糖度低いような気がするな！…どうしよ。

## 夫婦喧嘩をした日

「ごめんなーロマーノ…」

「……………ふん。」

「…なんか言ってるよ…」

そう言っただけで彼女の肩に顔を埋める。まだ、ロマーノは不機嫌なままだ。

なんで不機嫌かって、それはほんの少し前に喧嘩したばかりだから。結局、俺の勘違いだったんだけれど。

つかつかとなんか言いつつ、ロマーノが泣き出して。それではと我に返ってちゃんと話を聞いたら、ただの勘違い、で。

もう自責と羞恥と彼女の態度で、今度はこっちが泣き出しそうなくらいだ。

「なあロマーノ…俺が悪かったって…」

「……………さつき、もういいつつたろ」

「せやけどお…」

謝りきれんもん、と言って、ソファアに座った俺の膝の上のロマーノを抱きしめる。ふわっと彼女の香りがした。

「ごめんなあーロマ…」

今度は呟くように言えば、一秒ほど置いてから彼女が小さくため息をついた。こちらからは後ろ向きだから、彼女の表情は見えない。

「…っただあもう！お前なあ、いつまでもウジウジ言ってるじゃねえ



つつの！いつものウザいぐらいの明るさはどうした？！

「え、やって、」

「やってもだってもねえんだよ！」

いきなり俺の腕を解いて立ち上がったロマーノが言う。また、怒ってる。ロマーノははあ、と呆れたようなため息をついた。

「……お前さ、毎回そんなだったら、これから大変だぜ？」

「…は？」

「どーせ、喧嘩なんて飽きるほどすんだろーがよ」

俺とお前なら特にな、とロマーノは腕を組んだ。そして、また、ため息。幸せが逃げるな、と場違いなことを考えてしまった。

「…あと、別に、今回は説明不足だった俺も悪かったし。

そこまで謝られると、調子狂う」

ふい、と視線をそらす彼女。なんだかその仕種が可愛くて、つい抱きしめたくなった。

「…いいか、もう、今回のことで謝るのなし、な」

分かったか？とロマーノが人差し指で俺を指す。頷けば、よし、とロマーノは腕を組み直してから、またすぐ崩して俺の隣にどかと座った。

どう声を掛けていいのか迷い、結局何も言わなかった。少しの間、無言が続く。

ぼすり、と肩に重さがかかって、見ればロマーノが俺の肩に頭を乗せていた。やっぱり、かわいいと思ってしまう。まあ、仕方ないこ

とだと思っけど。

「…なあ、スペイン」

「ん、何？」

「…今日、初夫婦喧嘩」

ロマの言葉に、目をぱちぱちと瞬かせる。初夫婦喧嘩？、って、

「っそーやん！そーいえばそうやんなあ！

うっわ、何、記念日にしよか！今日何月何日？！」

「おまつ、アホか！記念日とかっ、そんなのキリねえだろ！」

やってめでたいやん！と言えば、アホか！と再度言われる。夫婦になつたのがどれだけ俺にとって幸せだったかロマーノは分からないんだろうか。いや、分かってると信じてるけど。

「お前、馬鹿かっ！こっばずかしいだろーがちくしょー！」

「でも初夫婦喧嘩って言ったんはロマあいだっ！」

「なんとなく言ったただけだこのやるー！」

ロマーノの頭突きが顔面にヒットする。鼻いたいねんけどオ…と  
言ってもうるっせえ、という声ぐらいしか返ってこない。

うなりながら鼻を抑えていれば、でも、と声が降ってくる。ぱつと  
顔を上げれば、ロマーノの、赤い顔。

「…その、記録しとくだけとかなら、いい…けどよ」

お祝いとかは、いちいち恥ずかしい、とロマーノが言うから、その  
可愛さにどうしても抱きしめたくなくて、実際抱きしめてしまった。

おいっ、はなせちくしょー！というロマーノの聲が聞こえるけど、  
とりあえずしばらくは離せそうにないと思った。

## 夫婦喧嘩をした日（後書き）

ありがとうございます！。ふう、とりあえずあと3組か。でも先に妊娠編upすることになるかもしれません。今同時進行で執筆してるので…

あ、リクエスト随時募集中です。よろしくお願いします。

## 幸せな不思議（前書き）

サブタイまじでどうにかならない？と思ってる火野村です、こんばんは。

今回は夫婦編ですね。割り込み投稿機能まじ便利ですね。結婚してすぐの奥普夫婦のお話です。

## 幸せな不思議

ふわ、と香る優しい匂いに、俺の家、じゃないな、と思ったけれど、今日からここは俺の家なんだ。

妙に落ち着かない。

いつも当たり前のように来ていた、のに。いつもこのソファで寝ていた、のに。

「不思議…、ですね」

俺の代わりにそう言ったのは、昨日結婚したばかりのあいつだった。声がしたほうを見れば、部屋の扉が開いて、あいつが立っていた。

「いつもと変わらないはずなのにな」

「ええ」

ごろん、とソファに寝そべると、はしたないですよ、といつものようにオーストリアは言った。

「なんか、現実味がないんだよな」

その言葉にオーストリアは頷いて、ソファの片隅、俺の足元のほうに座った。

「…そうですね。」

あなたが客人…いえ、恋人としてでなく、

妻としてここにいるなんて」

ふ、と笑うオーストリアの表情は、優しい。そして、私は今幸せですって顔に書いてあるみたいに見える。

部屋の明かりを受けて、俺とオーストリアの指にきらりと光ったのは、指輪。結婚指輪。

…まさか自分が嵌めることになるとは思っていなかったものを、今は、俺たちは指に嵌めている。

やっぱりどうにも実感が湧かないけれど、これを見ると、ああ、っ  
て思っんだ。

「……結婚。したんだな、俺達」

そう言ってへら、と笑うと、オーストリアはくす、と笑った。  
寝そべったままの状態で見渡す。シンプルかつ綺麗なリビングだ。

ここで毎日暮らすことになるのか、と思うと、ちょっと照れ臭くな  
った。

「プロイセン」

名前を呼ばれて、視線をそちらに向ける。先程と変わらない笑顔がそこにはある。

「……これから、よろしくお願いしますね」

「……おっ」

こちらこそ、と返して俺は目をつぶった。

この家での不思議な感じが、いつ俺にとっての当たり前前に代わるの

か、ちょっとだけ楽しみだった。



## 幸せな不思議（後書き）

ありがとうございました！

しかしね。最近この作品お気に入り登録がものすごく増えてて、確認したときものすっげえびっくりしたんですが、一体誰がこんな駄作をお気に入り登録してくださってるんでしょうか。気になって仕方ねえです。

てことで、よろしければ感想、メッセージ等でお知らせくださると嬉しいです！

3月9日（前書き）

今わたしがここにいるのは、あなたが隣にいたからです。

わたしがあなたを愛することができたのは、きっとあなたがわたしを愛してくれたからです。

幸せそうに眠るあなたの寝顔を見ることができるようのも、みんなみんなあなたとわたしとの奇跡なのです。

わたしの隣にいるあなたに、めいっぱいの感謝と愛をこめて。

仏加結婚記念日小説です。

3月9日

フランスさん！

舌つたらずな声で呼ばれて振り返れば、そこにいたのは幼いころの愛する人。

俺に可愛い笑顔を向けるその人に、ああここは夢の中なんだなって思いつつも、その人を抱きしめる。

温かい。

ふわふわした感覚の中で、気付いたら腕の中の温かさは消えていた。まわりを見渡しても、いない。

と、思えば、目の前にいる。

幼いあの人。背をむけてうづくまるその人。今度は、泣いている。

漏れて聞こえてくる声は、わかりにくいけれど確かに俺の名前を呼んでいる。

抱きしめたいと思ったけれど、体が動かない。

あああの頃と同じなんだなって思って、悲しかった。

泣かないで愛しい人。俺も会いたかった。

ねえ、お願い泣き止んで。振り向いて。

『（俺はここにいるよ）』

声は出ない。でも、言葉を紡ぐ。

ふ、と顔を上げたその人が、振り向いた。

きらり、白い粒子の流れが周りを包んで、その人が見えなくなっただと思えば、次の瞬間いなくなっていた。

慌てて周りを見る。誰もいなかった。あの人は、どこへ行った？

『フランスさん』

背後から聞こえた声に振り向けば、そこにいたのはすっかり大人になつたあの人。

眉を下げて微笑むその人を、無意識のうちに抱き締めていた。俺よりも大きくなつたんじゃないかというくらいの体。愛しさが溢れて堪らない。

好きだよ。

そう言ったら、ぱん、と弾けるように腕の中からぬくもりは消えた。そして目の前に再びその人は現れる。

白いドレスを見に纏うその人は忘れることはないだろうあの日の姿。純白の衣装、手に持ったブーケ、とても綺麗だ。

涙が限界まで溜まった目で笑うその人の手の甲にキスを落として、それからヴェールをめくって、唇にキスを落とした。

「……愛してるよ、カナダ」

そう囁けば、その人の目から光る涙がこぼれ落ちて、僕もです、という言葉が笑顔とともに返ってきた。

\*

「……………ん」

ぱち、と目を開ける。見慣れた天井が見える。

なんだか、幸せな夢を見ていた気がした。

ふと横を向けば、そこには静かに寝息をたてる愛しい人の姿があった。微笑んでしまう。胸の奥がじん、と温かくなる。

その人の頭を撫でながら、今日のことを考える。

なんといつても今日は、俺たちの結婚記念日なんだから！

今寝ているこの愛する人が起きたら、二人揃って好きな雑貨屋やオシャレな洋服店へショッピングにでも出掛けるんだ。そして街角のいい雰囲気の花屋で花を買って帰って、今夜のご飯は二人一緒に作るんだ。

そこまで考えて、ああなんて俺は幸せ者なんだろうか、って思った。そしてこの俺の奥様はいつ目覚めて、俺にその綺麗な青紫色の瞳を見せてくれるんだろうって思って、つい笑った。

3月9日(後書き)

短編からこっちに移してきたブツでございました。  
ありがとうございます。

やっぱり仏加は書きやすいです。

## はじまり(前書き)

こんにちは火野村ですっ、はわわっついに妊娠編始動ですよっ！  
夫婦編の残りは同時進行でいきたいと思いますっ  
まず最初は米英ですっ。では本編をどうぞっ

## はじまり

「気持ち悪い……」

ソファアーに寝そべるイギリスが咳く。いつも俺がソファアーで寝てる  
と行儀が悪いって注意するくせに、とも思うけど、咳きの内容のほ  
うが気になった。

「イギリス大丈夫？風邪かい？」

「ん、アメリカ……いや、ただなんか、吐き気がするんだ。他はなん  
とも……」

ソファアーの背の後ろから覗き込めば、イギリスは口元に手をやり、  
込み上げてくる何かを抑えているようだった。俺はソファアーの前に  
移動し、しゃがみ込んだ。

「じゃ、食べ過ぎとかは？最近よく食べるじゃないか君。」

「いや、それはないと思うんだが……」

うつ、とイギリスが顔を背ける。大丈夫?!と慌てて声をかければ、  
ああ、とイギリスの顔がまた戻ってくる。

ひどいなら寝室行って寝てなよ、と声をかけながら、彼女の頭をな  
でる。どうやらかなり弱っているらしい。ぐったりした様子からわ  
かる。

「……なんなのかな？この症状……」

「……わかんねえ」



小さな声。やっぱり弱ってる。

わからないと言っても、最近、イギリスがどこか変わったのは事実だ。よく食べるし、突然すっぱいものとか食べたくなって言うし、イライラしやすいし。

こんな症状が出る病気なんてあったかな？と、気持ち悪っ…と漏らすイギリスを見ながら考える。

彼女の頭、長い金髪、と順番に撫でた。俺とは少し違うブロンドを見て、男のときのあの短さも好きだったんだけどなあ、とつい思考がずれてしまう。

「…あ。」

イギリスが声を漏らす。なんだい？と言えば、この症状なんだけど…、と彼女は言っていてそこで一旦口をつぐんだ。

「…いや、やっぱりいい」

「えー？なんなんだい？」

「悪イ、…寝る」

むくりと起き上がったかと思えば、イギリスはリビングを出ていく。俺の疑問符は消えないままだ。

「…なんなんだろ？」

このとき俺は、おそろく、前までは男同士だったからだろう  
とっの可能性を思い付くことがなかったんだ。ひ

## はじまり(後書き)

すく。。。。わかりやすいのに。。。。

というツッコミは入れないでください)ry

ひさびさの米英でかいてたのしかったです

## うちあけ話（前書き）

こんばんは、最近1話につき1000文字以上ないと不安になります、火野村です。

今回は前回に続き米英です。タイトルまんまっっていえばまんま。やっぱ夫婦編より妊娠編のほうがかきやすいというね！

## うちあけ話

「妊娠した。」

イギリスの一言。俺は固まった。仕事から帰ってきて、大事な話があるってダイニングテーブルの椅子に座って、一呼吸おいたあとの一言だった。

…今、なんて？と反射的に聞き返してしまう。当たり前だが、また、同じ言葉が返ってくる。俺はぼかんと口を開いたままだ。

「さ、3ヶ月、だって」

イギリスは俯いたまま言う。気のせいか、彼女の頬は赤い。今日病院いったら、そう言われた。ってイギリスは言う。

「…つまり、」

俺と君の子供ができた、ってこと…?」

こくり。彼女は頷く。エイプリルフルは今日じゃないよな、とそんな思考が頭の隅に浮かんだ。当然だけれど、今日の日付はエイプリルフルと程遠い。

つまりは本当。本当に、イギリスと俺の子供ができたんだ！しばらく固まったままだったけれど、気づいたら、机を乗り越えてイギリスを抱きしめていた。

「あ、あめ、アメリカ？」

「…やったつ、

やったよイギリスっ！俺達の子供だよ！！」

ぎゅっぎゅっとなんかを抱きしめる。子供が、できた。俺とイギリスの！

あまりの嬉しさに力加減を忘れていて、腕の中の彼女が苦しい、と漏らすまで、それに気づかなかつた。

「あ、ご、ごめん。つい」

「いや、いいよ。てかお前…子供好きだったのか？」

あんまりそんな感じしなかつた、とイギリスが言う。俺は一瞬きよんとしてから、すぐに、笑ってしまった。

「なに言ってるんだい？」

君との子供だから嬉しいんじゃないか」

「なっ…?!」

ぼぼぼっ、とイギリスが赤くなる。かわいいなと素直に思った。

そっか。妊娠してたんだ、イギリスは。それなら最近のイギリスの変化や体調不良も説明がつく。思えば妊娠中の諸症状ばかりじゃないか。なんで気付かなかつたんだらうか。

でもそんなことを考えるより、今は目の前の幸せと嬉しさを感じていたかつた。

「イギリス、元気な子産んでね」

「ん。…でも、よかつた」

「何がだい？」

聞けば、お前が喜んでくれたから、って。つい、どういう意味だい？ってまた質問してしまった。

「だって、もしお前が子供嫌だとか言ったらどうしようって…」

「なに言ってるんだい？！俺が嫌なわけないじゃないか！」

「でも、お前自身が子供みたいだしよ…」

イギリスの言葉に、失礼だなっ！と言って唇を尖らせる。あっはっは、と彼女は笑った。なんだよ、これでも大人の男になっただつもりだぞ。…イギリスとはいつも一緒だからそういう面が見えるだけで。

「まあでも、…不安、だっただよ。だから、よかった。」

下がる視線に、また抱きしめなくなった。今度は、しっかりと、だ。でも俺はすんと椅子に座って、微笑んだ。そして机の上に置かれていた彼女の手をとって、両手で包み込む。そして、I love you、と呟く。3秒ほど後に、me too、という小声が返ってきた。じわり、と胸の奥あたりが暖かくなった気がした。

「イギリス、子供の名前はとうする？というか、男の子かな？女の子かな？」

「おまつ、まだ気はええよ。」

「でも決めておきたいじゃないか！」

この一言一言の会話がどれだけ幸せか他の人にはたぶん分からないんじゃないかと、ふと思う。

この幸せの中に、もうすぐひとりの愛らしい子供が増えるんだと思うと、胸がいつぱいで、仕方がなかった。





うちあけ話(後書き)

ありがとうございました！

後半ぶっちゃけ力尽きた(ry

適t(ry

…次回はたぶん仏兄ちゃんの出番っ！

妊娠中。(前書き)

どうもこんにちは火野村ですっ。テスト？なにそれおいしいの？な時期になってまいりました。

今日からテスト週間なんですけどやる気なんてさらさらないです。

今回は英と仏でお送りいたします。ちょっと文章中アレな表現とかありますが許容して下さい。

妊娠中。

「マジで？」

「マジだ。」

見りゃ分かんたろ、と俺は自分の腹に手をやった。

某会議室。今日は、久しぶりの腐れ縁の隣国との会議だ。

こいつに妊娠したと伝えるのを忘れていて、目立ってきた腹を見て  
驚愕された。

「そっか、そうだよなー。もう結婚してだいぶ経つしな」

「まあな。」

「で、今何ヶ月なの？」

「んー、6ヶ月、だな」

へえ、と漏らすフランスを尻目に、俺は渡されていた資料に目を通  
した。

あ、やべえちよつと気持ち悪イかも。吐いたらどうしよう。

「アメリカってあんまり子供好きじゃなさそうだけどなー。どう  
なの？」

「大喜びしたが？」

「へえ」

まああいつのことだしな、とフランスは頷く。普通そうだと、と付  
け足しておいた。

「…ってかよあ、お前はどつなんだ？」

「…一応聞くけど、何が？」

「子供」

オバサンとかやだけどな、と少し舌を出す。フランスとカナダの結婚は未だに認めたくないといえれば認めたくないが、仕方ない。

「正直、…考えたことなかった」

「…マジかよ」

二人だけつてのが当たり前になってたし、とフランスは資料に視線を落としていた。

こいつはそういうことではきっちりしてそうだから、きっと避妊とかもちゃんとしてんだろ。…ぶっちゃけ、うちのダンナサマアメリカは、そういうのしないから。俺あいつの育て方間違えたかな。

「でも…子供かあ」

「欲しいのか？」

「当たり前だろ」

でも女は子供できると変わるって言うぞ、とえばフランスはう、と詰まった。

「旦那より子供、ってな」

「イギリスも、そうなる？」

「…多分」

でもあいつも子供みたいだから構ってやらねえとぐずるだろうな。…それが怒りに変わって俺にぶつけられたら 特に情事で、だったら たまったもんじゃねえ。あいつ実はさだし。

「ま、そういうことだしよ。カナダも、案外変わったまうかもしれねえぜ？」

「…カナダはそんな子じゃないもん」

「そーかい。」

にやり、と笑うと、同時に気持ち悪さが込み上げてきた。やべえ、これは吐く。

「…悪いちょっとトイレっ…」

「ん、お、おう」

がたんと席から立ち上がる。頑張れ妊婦、と後ろから声が掛かった気がしたが気にかけてる暇なんてない。

このつわりさえなければ妊婦も多分楽なもんだと思うんだが、と考えながらトイレへダッシュした。

妊娠中。(後書き)

ありがとうございましたー！

すみませんでした。途中の米が云々なところは確実に作者の趣味で  
ございます。

次回は米英な話か世界会議か仏加か、って感じで考えてます。

辛いかもだけどとかそついう話(前書き)

毎度のことながらサブタイがあれだなあ。センスほしいです…。

今回は仏加です。深夜でちよい眠いくらいで書いたシロモノなんでちよつとグダグダな感じもしてますが許容していただければと。最近こんなのばっかやな

## 辛いかもだけとかそついう話

ふわりと、湯気が揺れる。ホットミルクが入ったマグカップは、お気に入りの柄のマグカップだ。

夜、リビングのソファに座りながらのんびりするのには、僕の日課になっている。

ふと天井を見上げながら、ソファにもたれていれば、きしりと振動を感じる。隣を見ればフランスさんが座っていた。

フランスさんは微笑んで、僕の頭を撫でる。

「……ねえカナ。」

「はい？なんですか？」

僕は首を傾げる。フランスさんは相変わらずの優しい顔をしていた。僕はサイドテーブルにマグカップを置いた。

「カナってさ、子供、好き？」

「……へ？」

いきなりの質問に、更に首をひねる。嫌い、ではないですけど、と答えると、そっか。と彼は笑って、僕の髪を撫でた。カナの髪は綺麗だね、という呟き付きで。

「子供がどうかしたんですか？」

「ん、いや、そのさ。実は今日、イギリスの腹が大きくなってさ」「え、」

それって、と言うと、妊娠6ヶ月だって、とフランスさんは言う。



イギリスさんが妊娠、してる？！

「ほ、本当ですか？それ」

「もちろん。アメリカも大喜びだって」

そんなこと、全然知らなかった！イギリスさんが妊娠してるなんて、ここ最近アメリカとは会っていたけれど、そんな話聞いたことなかったし。話してくればよかったのに。後で電話しよう。決めた。

「で、なんだけど」

「はい？」

「その、俺も」

カナダとの子供、欲しいなーなんて…」

「っへ?!」

フランスさんの言葉に、一気に顔が熱くなる。

子供、って、そんないきなり何を言い出すんだろうこの人は！

「ふ、ふふフランスさん?! な、なんでそんないきなりっ」

「あー、ごめんカナ、いきなりだね。」

そうですよっ、と言えば、ごめんね、と言うフランスさん。今までそんなこと、一言も話したことなかったのに。

「でもやっぱりいいなって思ってたさ。」

子供。と、フランスさんは僕の手を握った。温かい手。

「だけど今日、イギリスがつわりで苦しそうですさ…ぶっちゃけあれ、吐いてたよ。」

だから妊娠って大変なんだなって思って」

子供は欲しいけど、カナダに辛い思いさせたくないから。ぎゅっ、と握られる手。やっぱりこの人は優しいなあって、改めて思った。

「…フランスさん」

名前を呼んで、微笑む。確かに妊娠って、出産って、辛いかもだけど、でも。

「……僕も子供、欲しいです。」

あなたとの子供が。と、僕は、握られた手にもう片方の手を重ねた。真っ直ぐ見つめた彼の瞳には、いつもより優しい色が宿っている。

「…ありがとうカナダ」

俺の大事な奥さん、と、抱きしめられながら言われた。つい、笑みが零れてしまう。

「あ、でも、すぐ、じゃなくていいです…」

「うん。」

それでもいいと言わんばかりに抱きしめられて、なんだか幸せだなって、そう思った。

辛いかもだけとかそついつ話（後書き）

ありがとうございました！

文才ほしい！

次回はおそらく世界会議だと。

## 出陣、世界会議（前書き）

サブタイどにかしたい。こんにちは火野村です。

明日はテスト最終日なんですが、教科が教科なんで勉強してません。だいたい勉強嫌いだし

今回は世界会議のお話です。

## 出陣、世界会議

「大丈夫？」

「おう」

「無理しないでね」

イギリスの手を引いて、俺は会議室前へとたどり着いた。今日は、5ヶ月ぶりの世界会議だ。

イギリスはもう妊娠8ヶ月目に入った。お腹もかなり大きくなって、そろそろ出産の覚悟つてものをしなきゃいけなくなってきた。

前回の世界会議のときはまだ妊娠が発覚してなかったし、お腹もそう目立ってなかったから、イギリスが妊娠してるなんて、あの時は確実に誰も知らなかった。だからきつと、

「驚かれる、かな？」

「さあ、どうだろうな。」

イギリスはくすりと笑った。俺も笑い返して、会議室の扉のノブに手をかけた。

「Good morningみんなー！！ヒーローアメリカの登場だぞっ」

「うるせえよ、ばかっ」

ごん、と後頭部にげんこつがひとつ落ちてきた。痛いじゃないかつ、と横にいるイギリスに言うと、会場がざわついているのに気付く。やっぱりな、と呟いたイギリスは、席を探してすぐに座ってしまった

た。何か話し掛けてきた隣の席のフランスを、早速殴っている。

すると、前方から向かってくる、茶色に気が付く。手を振る彼女に俺も軽く手を振った。

「アメリカっ！ねえイギリスのお腹どうしたの?!」

「見てわかるだろう？妊娠だよ。」

やっぱり?!と驚きながら目を輝かせているイタリアは、相変わらず可愛いと思う。イギリスとは違う可愛さなんだよね。いや、イギリスのほうが可愛いけど。

「な、何ヶ月なの?」

「8ヶ月。ちなみに女の子だよ」

「ええっいいなあ〜!!」

イタリアはいいなあいいなあと繰り返す。そう言われると、ちょっと照れ臭い。

イタリアは子供とかどうなんだい?と聞くと、ええっと声をあげる彼女。赤い顔でうーん、と言う彼女に、そっか、と笑って、そろそろ席に着こうと自分の席を探した。

席につくと、みんなの視線がだいたいイギリスに集まっているのがわかった。確かに物珍しいかもしれないけど 国の妊娠なんて俺が知ってる限り見たことないし あんまりじろじろ見ないでくれよ。俺の奥さんだぞ。

イギリスは周りを気にせず資料に目を通してている。あ、今動いたのかな。イギリスがお腹気にした。

ふう、と俺は息を吐いて、イギリスのお腹を見た。

そろそろ、名前決めないとなあ。赤ちゃんの。

## 出陣、世界会議（後書き）

イギリスさんはあと2、3話くらいで出産の予定です。  
そろそろ子供<sup>ぐ</sup>の年齢と誕生日公開しないとなあ  
…



思うこと（前書き）

どうもこんばんは火野村です。そろそろ花粉の季節ですね。私は花粉症なんで鼻と目がそろそろヤヴァイです。

今回は…えっと、独伊と西ロマが会議の帰り道あたりに思ったこと！みたいな！

…ぶっちゃけこんなのうpしていいのかなと思ってます…

グダグダですが、そんなんでいいならどうぞ

## 思ひごと

- E -

今日の世界会議では、ほんとびっくりした。なんであって、いつもより早めに会議場に到着して、待ってたら、入ってきたイギリスのお腹がすごく大きかったから！

もしかしてと思ってアメリカに聞いてみたら、妊娠8ヶ月、だって女の子らしい。

いいなあいいなあ。俺だって、ドイツとの赤ちゃんほしいよ。

休憩時間は、アメリカがイギリスに、大丈夫？しんどくない？とか言ってる。イギリスのお腹をなでてる二人が、本当に幸せそうで。うらやましいなあ。

俺はドイツがずっと避妊してるから、赤ちゃんほしくてもできないんだよね……。

……今度アピールしてみようかなあ……。

- R -

今日の世界会議は本当びっくりした。

なんであって、会場に早めに着いたから待ってたら、入ってきたイギリスの野郎（今は野郎じゃないか？）の腹がすっげえでかかったから！

ヴェネチアーノがアメリカに聞いてたのを盗み聞きしたら、妊娠8ヶ月、女の子、だって。

……正直、うらやましい、と、思った。

変なところで律儀なスペインは毎回避妊、するから。俺だって子供欲しいぞこのやろー。

でも、弟（妹？）みたいに面と向かって言えねえし、…あいつがその気になってくれれば、いいんだけどな。

- G -

今日の世界会議は、正直、驚いた。

何に驚いたって、イギリスの腹が大きかったこと、だ。

見た瞬間、これは妊娠してるな、と思った。

聞こえてきたアメリカとイタリアの会話によれば、妊娠8ヶ月目、女の子、らしい。

会議中、イタリアを隙あらば見ていたが、明らかに視線はイギリスやアメリカのほうに行っていた。

瞳は羨ましいなあと言わんばかりで、数回、悩ましげなため息をつけていた。

…家に帰ったら、少し話して、みるか。…子供のこと。

今日の世界会議ではほんまびつくりした！なんでって、イギリスの腹がむっちゃでかかったから！

今日は珍しく早う会場に着いて、待つとったら、入ってきたイギリスが、や。ほんまびつくりした。

あれは妊娠しとるでかさやと思った。妊娠、か。と、考えさせられた。

聞こえてきた話によると、もう妊娠8ヶ月なんやて。子供は女の子。

……正直なところ、むっちゃ羨ましい。子供ができるとか、幸せやろうな、アメリカもイギリスも。

ぶっちゃけ今日、始終幸せオーラ放つとったし。

ええなーええなー。これまで考えたことなかったけど、俺もロマーノと子供欲しいわー。

…まあ、ロマーノがええって言うたら、かな。

思うこと（後書き）

ありがとうございました！え、みんなだいたい同じだった？あえてのだいたい同じなんだよ！一回黙ろっか。

…すみません。

次回は名前決めの話になると思います。



## 君の名前は、

会議休憩時間。

俺は自分の席に座り、視界の端に映るイギリスを気にしながらも、手に持った紙を見て考え事の最中だった。

文字がずらりと並ぶ紙面を見て、うーん、と唸れば、ぱっと紙が手の中から消える。はっとして顔を上げれば、フランスが紙面に視線を落としていた。

「なに悩んでんのアメリカー？これ、名前？」

「フランス！ちょっと返してくれよっ」

「やーなこーった」

へえー、とフランスは紙をひらひらさせながら、紙に書かれた名前を見ている。書かれた字はもちろん俺の字だ。

「イザベラ、エマ、オリヴィア…子供の名前？」

「…そうだよ。そろそろ考えなきゃだろ？」

「そーだねえ。」

フランスはちらりとイギリスを　いや、正確にはイギリスのお腹を、見た。そしてまた紙面に視線を戻す。

「イギリスは結構ポピュラーな名前が好きかもね」

「そーだね。もういい加減紙返してよ」

「やだっつってんじゃない。あーじゃあお兄さんが一緒に考えてあげる」

別に君の協力なんて要らないんだぞ、と例えば、イギリスの好みなら俺のほうが詳しいっしょ、と返されてぐつと詰まる。1000年単位で付き合ってるっしやる腐れ縁サマにはさすがにそういうところでは勝てないだろう。

「ねえカナダー子供に名前つけるとしたらどんな名前がいいかなあー？」

「ふえ?!あ、え、あ、アメリカとイギリスさんの子供の名前、ですか？」

俺の隣にいた(てか、いたんだ)カナダが、いきなり声をかけられて間抜けな声をあげた。フランスはカナダに紙を見せて、俺はこれとかいいと思うんだけど、とか名前を指さして言っている。

「アメリカっ、なにに?子供の名前決めてるの?」

「ああイタリア。そうなんだ、でもフランスが勝手に協力してやるのかなんとか言ってきてさ」

大袈裟に肩を竦めて見せれば、彼女はいつもの鳴き声を発する。そして、アメリカはどんな名前がいいの?と聞いてきた。

「んー、そうだね、イギリスの好きな名前かなあ」

「となるとポピュラーな感じかな?」

あーやっぱりそう思う?と聞けばうん、と彼女は笑った。それからフランスのところへ行って、フランス兄ちゃん俺にもそれ見せて!とか言っている。

紙もしばらく返って来なさそうなので、イギリスのもとに行くこと



にする。イギリスは自分のお腹を　我が子を撫でながら幸せそう  
な、そうでありながらどこか不安そうな表情をしていた。

「イギリス、大丈夫かい？」

「アメリカ。ん、大丈夫だ。今日は赤ん坊がよく動くぞ」

あ、ほらまた。とイギリスは言う。そんな彼女を一瞬だけどぎゅつ  
と抱きしめてから、お腹を撫でてみる。やっぱり、ああ愛おしいな  
あつて、思うんだ。

「…名前。考えてんだって？」

「ああ。今ちよつと候補の名前を書いた紙をフランスに取り上げら  
れてるけど」

先程までいた所を見れば、今度はドイツやロシアや中国まで巻き込  
んで、わいわいと話していた。それについて、苦笑する。

「で、どういう名前がいいんだ？」

「俺は君がいいと思う名前ならそれでいいんだけど」

「んー…あんまいいのが思い浮かばねえな」

ぼりぼりと頭を掻くイギリスは、もうとっくに母の顔をしている。

俺はしゃがみ込んで、イギリスのお腹越しに、君はどんな名前がい  
い？と、我が子に心の中で問うてみる。返事はないけど、つい笑み  
が零れた。

「……あの」

掛けられた声に、ふつと顔を上げる。日本、とイギリスが彼の名前を呼んだ。

東洋の友人は微笑んで、イギリスのお腹をちらりと見る。

「すみませんイギリスさん、お腹…触らせて貰っても宜しいでしょうか？」

「ああ。」

ありがとうございます、と言うと、日本はしゃがみ込んでイギリスのお腹を、おそろおそると言わんばかりに、触れた。ここに、赤ちやんが、という眩きが聞こえた。

「名前はお決めになられたんですか？」

「いや、まだだよ。今決めてるんだけどね」

彼からの問いに答えながら苦笑する。振り返ってみると、まだフランスたちは話しているみたいで、紙になにか書き込んでいた。

「……日本は何かいい名前ないかい？」

「私、ですか？」

首を傾げる彼に頷く。私なんかが意見して宜しいのですか、とか言うけど、彼ならいい名前考えてくれそうだ。イギリスも多分そう思ってるだろう。

「…では、その。」

アリス、は、どうでしょうか？」

アリス。

俺とイギリスが揃ってリピートすると、はい、と日本は頷いた。

「私のところの、お二方の呼び名から少しずつ頂いて、『アリス』、です。」

アメリカの『ア』と、イギリスの『リス』を組み合わせて…」

それに、イギリスさんはポピュラーな名前がお好きそうでしたから、と彼は言う。アリス。…俺とイギリスの子供らしい、いい、名前だな。

「…アリス。」

イギリスがお腹に手をやりながら我が子に呼びかける。

どん、と、胎動。まるで、アリスと呼ばれて、返事をするかのよう

に。決まりだな、とイギリスが呟いて、俺も頷いた。

君の名前は、（後書き）

につさまが名前考えるの書きたかっただけ。  
すんません。

フランスとか考えてんの無駄やんwとか思いますますがみんながわいわいしてんのが書きたかった。それだけ。

次回は…たぶん、出産です！

うまれました、ちいさな命が。(前書き)

こんばんは。深夜マンセー火野村です。さっさと寝ないから先生から疲れた顔してるって言われるんだぞ自分。パンダヒーローな顔になっちゃうんだぞ自分。

今回はっ！いよいよっ！

イギギ、出・産！

です！ うおおおとつとついちばん最初の子がうまれるぜヒャッハ  
ー！

うまれました、ちいさな命が。

「イギリスが陣痛?!」

思わず叫んだ会議室。回りにいた上司たちが少し眉をひそめたのが分かった。でもそんなこと気にしてる暇はない。

予定日はまだ先のはずなのに、イギリスが産気付いたと、連絡の電話だった。イギリスの携帯で、イギリスの上司から。

これから大事な会議なんだけどそんなことより俺はイギリスのもとへ行かなくちゃならない。出産に立ち会わなくちゃいけない。

電話を切ると、上司の顔を見た。眉根を寄せて考えこんでいるみたいだ。でもここは強行突破するくらいで行かないと、俺の愛するイギリスのところには絶対行かせてくれないだろう。

「ねえ。俺の妻が産気付いてるんだ。行っていいかい？」

「駄目だ。」

「そう言うと思ったよ」

肩を竦めて見せれば、上司はため息をひとつ。会議が終わってからだ、と言われた、けど。俺は一刻も早くイギリスの所へ行かなくちゃいけない。夫として、父親として！

「君にも家族がいるだろ？この気持ち分かってくれよ」

「今日の会議はお前がいないと成り立たないんだ。」

「そんなこと今の俺には関係ない」

こちらを向いた上司の目を、まっすぐに見つめる。真剣な目だつてことは、たとえこの頭の固い上司でもすぐ分かるはず。お願いだ行かせてくれ。

「今は行かせない。会議が終わつたら行かせてやる」

「そんな、待つてられないんだぞ」

そう言つて、俺は意を決した。はあ、とため息をついた上司が再び口を開くか開かないかくらいで、俺は踵を返して、駆け出した！上司の許可なんて、もう、知るか！

ばん、と扉が勢いよく開いて、俺は走つた。上司が追いかけてくるのが分かる。そこかしこに立っていた警備員が、俺が走つて過ぎ去つていくのを見て驚いている。後ろの上司が、警備員にも俺を追わせようと声を掛けていた。

でも俺は追い付かれない。イギリスのもとに向かうために！

\*

どたどたどた、と足音が聞こえて、ばん、と病室の扉が開く音が聞こえる。ベッドで寝そべつた体勢のまま、ぱちりと目を開けば、そこには見慣れたハニーブロンドがあつた。でも今は、走つてきたのか、いつもの整つた髪型はなく、ぼさぼさだ。

「…イギリス！」

「おっせえよ、ばーか…」

乱れた髪、スーツ、汗だくな顔。そんな姿で駆け寄ってくるのは、紛れもなく愛する夫で。ついさっき俺が産んだ、小さな命の父親で！

「イギリス、」

「…アメリカ。」

生まれたんだ、ぞ？」

俺と、お前の子供が。

俺の手を握るその人に言えば、うん、と返事。きらりと光って見え  
たのは、涙、だろうか。

看護婦から赤ん坊を受け取ったアメリカは、我慢する気がないと言  
うくらいにぼろぼろ泣いた。こっちは泣きたいの我慢してるっての  
に、こいつはまったく。

「泣くなよ、アメリカ。」

「だって…！」

ぎゅっと腕の中の赤ん坊を抱くアメリカに、こちら我慢ができな  
くなりそうだと思ったが、ぐっとこらえる。目を細めて愛する人と  
子を見れば、幸せが、あたたかい気持ち、ぶわ、と沸き上がって  
きた。

「ありがとう、イギリス」

「……おう。」

そう言って、ふっと力を抜けば、疲れが一気に襲ってくる。出産で  
使う体力は、やはり半端じゃなかったと頭の片隅で思った。

目を閉じると、急激な眠気に襲われた。アメリカの鼻をすする音に



気付いて、寝る、と呟いてから、俺はゆっくりと眠りの世界へと落ちてゆく。

目覚めたら愛する我が子を抱いて、夫に出産の大変さを延々聞かせて、色んな人達に出産の報告をするんだ。そう決めて、俺はいつの間にか寝息を立てていた。

うまれました、ちいさな命が。(後書き)

ありがとうございました！

アリス誕生です！おめでとう！

そろそろ子供ずの年齢とか誕生日とか、活動報告で書きたいと思いますのでよろしくお願いします)\*`、\*(

次回は独伊とかかな？と思います。

## キミとのごども（前書き）

お、お久しぶり？です、火野村です。

妊娠編がやっと書けたぜ…

あ、夫婦にもちよいちよいうろしてあるんでよければどうぞ。

今回は独伊です。もうイタちゃん大好きです。

## キミのごども

「えっ産まれたの?!」

おめでとー!とイタリアの声が聞こえる。先程電話が来たようだから、きつとそれだろうな。

産まれた、というのは、もしかしてアメリカとイギリスの子が、か? そう思いながら洗い終わった皿を片付けていると、ドイツー!と言いながらイタリアが部屋に飛び込んできた。なんだ、と返事をする前に、イタリアがまくし立てた。

「アメリカから電話あってさっ、アリスちゃん産まれたんだってー!それで今度遊びに来てって!」

「そうか。何事もなく産まれたみたいだな、その様子だと」

「うん、イギリスにもアリスちゃんにも問題はないってさ!」

にはあつとイタリアは笑う。まるで自分のことのように嬉しそうに話すイタリアに、俺もくすりと笑った。

ふと、そこで思う。あれを言うタイミングは今なんじゃないのか? と。

今言わないともういつ言えるかなんて分からないし、と思ったら、自然と口が開いていた。

「...なあ、イタリア。」

「ん?なあに?」

「その、ものは相談なんだが...」

切り出したものの本題が言えなくて、あー、とか、うー、とか意味のない言葉を発していると、イタリアが俺の顔を覗き込んできた。だから、つい赤い顔になりながらも、俺は言った。

「……お、お前との子供が、欲しいと思っっているんだ、が……」

言ったあと、かあああ、と音が出そうなくらい真っ赤になってしまつて、視線をイタリアに向けられなくなった。

イタリアはしばらく何も言わず動きもしなかったが、いきなりぎゅっ、と俺に抱き着いてきた。

「イタリア？と彼女の名前を呼ぶと、やっぱり俺達夫婦なんだね、とよく分からない言葉が返ってきた。

首を傾げていると、にっこ笑うイタリアが俺の顔を見上げてきた。

「俺も、そう思ってた」

俺もドイツとの子供が、ほしい。

そう言うイタリアに目を丸くした。へへ、と言いながらへにやりとした笑みになったイタリアを衝動的に抱きしめた。ドイツ？と驚いたような彼女の声が聞こえてくる。

ああ、なんて俺は幸せ者なんだろうっか！

「……つらいかもしれないぞ？」

「大丈夫だよー。」

だってドイツが隣にいてくれるんでしょ？と言うイタリアを、更に抱きしめた。

ありがとう、と言うと、こちらこそ、と返事。幸せに胸がいっぱいになりながらも、そう遠くない未来、産まれてくるであろう俺達の

子供の姿を想像した。

## キミとのごども（後書き）

ありがとうございました！

次回は、たぶん西ロマだと…。もしくは全CPに近いやつかな。  
頑張ります。

## 世界の笑顔と可愛い天使（前書き）

もーサブタイトルルどうかして。いつそ誰か作って！

この作品ではお久しぶりです火野村です。ちよっと潜りがちですみません。

今回は世界会議の直前みたいな感じでしようかね…。全CPは無理でしたごめんよ

いつもに増してグダグダですがそれでもよろしければどうぞ。



## 世界の笑顔と可愛い天使

……可愛い……！

イギリスの腕の中で笑う天使に、会議室内の全員がそう思った。

\*

「え、ちょ、待って?!」

なんでこんな可愛いのか?! イギリスの子供なのに!」

「どういう意味だてめえ」

がすっ、とフランスの腹に俺の右キックが入る。うずくまって唸るフランスは無視してアリスに笑いかけると、アリスもにぱあっと笑ってくれて、ついでれっとなってしまう。ああなんて可愛いんだろう、俺の娘は!

「ああもうアリスはホント可愛いな。食べちゃいたいくらい!」

「ははっ、ほんとにな」

隣のアメリカがそう言いながらアリスにキスを落とす。早いものでもうアリスは生後3ヶ月だ。

話しかければ笑ってくれるようになったし、もうすべてが可愛くて可愛くて仕方がないんだ!

「あいやー可愛いあるね〜!ほんとにあへんの子あるか?」

「うるせつ、正真正銘俺が腹痛めて産んだ娘だよばかあつ！」

俺とアリスを見比べる中国にそう言えば、冗談あへん！と言いつ返される。ぷに、とアリスのほっぺたが中国の人差し指につつかれた。

「いいな〜子供かあ。

僕らも欲しいね中国くん」

「っ、な、なに言ってるあるか俄？斯！」

「いいんじゃないか？お前らも子供作りや」

「か、簡単に言っつなあへん！」

後ろからロシアに抱きつかれながら真つ赤になった中国は大声でそう言う。ふつと笑うと、笑っつなあへん！と怒られた。なんで俺が怒られるんだ。

「まあでもいんじゃないの子供？お兄さんも欲しいし。ねーカナ。」

「ふ、ふふフランスさん皆さんの前でなに言ってるんですか?!」

いつのまにか復活していたフランスが、アメリカの横の椅子に座っていたカナダを赤面させる。っつかカナダいたのか。

「子供の名前とかやっぱり悩みどころだよねー。カナは何がいい？」

「もーフランスさんっ！」

ぷう、と頬を膨らませたカナダにフランスが怒られているのを見ていると、イギリス、と後ろから声が掛かって、振り向く。そこにはイタリアの笑顔 と、ポーランドのいつものニヤついているような笑みがあった。

「ね、アリスちゃんだっこさせてもらっつてもいい？」

「俺もだっこしたいしー！イギリス、ええよね？」

「ああ、別に構わねえぞ」

そう言えば、やったー！とはしゃぐイタリアとポーランドに笑ってから、イタリアにそつとアリスを手渡す。うまく抱きかかえてくれたイタリアに、アリスはにっこりと笑った。

「あのね、イギリス聞いてくれる？俺もねドイツと子供つくって決めたんだよー」

「そうなのか？！よかつたなー」

「うん！でもね、まだ心の準備とかいろいろあるからさ、すぐってわけではないんだ」

でもドイツが俺との子供ほしいって言うってくれたんだよー！と満面の笑みを絶やさず話してくれるイタリアは幸せそうだ。イタリアとドイツの子………いたいどんな子が生まれるんだろうか。

イタリアはアリスにおもいきり笑いかけてから、ポーランドにアリスをわたした。ちよつとおぼつかない手つきでアリスを抱くポーランドについハラハラしてしまつたが、一応ちゃんと抱きあげてくれた。

「つーか、イタリアがうらやましーし。リトなんて、そういう話はひとつこともしないんよ？…俺だつて、子供ほしいしー！」

「別に、ポーランドから話せばいいじゃない。」

「それだとなんか悔しいしー！」

小刻みに体を揺らして、唇を尖らせながら言うポーランドの頬は少し朱がさしている。ポーランドはあ、と小さなため息をついてから、アリス超かわいいしー、と微笑んだ。

「……………、イギリス、イタリア。俺決めたし」

「何をだよ？」

「俺もぜったい子供作るし！」

女の子がほしい！とポーランドは宣言するかのようには言い切った。イタリアと俺は一瞬目を丸くしたが、そのあと笑って、いいんじゃないかと言った。子供ができれば、リトアニアの気苦労が増えそうだな、と思いながら。

「アリス抱かせてくれてありがとうだし！俺席に戻る！」

「あ、じゃあ俺もー。ありがとイギリス！」

「おう。」

ポーランドは俺にアリスを返して、イタリアは俺に軽く手を振って、自分の席へと駆けていった。くすりと笑ってから、腕の中のアリスに視線を向ける。するとまた笑っているから、こっちの頬の筋肉は緩みっぱなしだ。

「アリスー。きっとお前は友達いっぱいできるぞー。」

よかったなー、と言っていると、大きな手が伸びてきてアリスの頬を撫でた。アメリカだ。

視線を上げるとアメリカの瞳とちょうどぶつかって、どちらからともなしに笑い合った。

「なあ。子供、どこの夫婦がいちばん早く生まれると思うっ？」

「さあ？あ、もしかしたらうちの第2子かもしれないぞー！」

「……………バーカ。」

ははっと笑って、会場内を見渡す。結構夫婦は多いけど、一体どの夫婦にどんな子供が生まれるんだろう。

「なんか、楽しみ、だな」

「…そうだね」

自分のことじゃなくても。と付け足して、俺はまた笑った。

## 世界の笑顔と可愛い天使（後書き）

ありがとうございました！

ポーランドは出すつもりはなかったんだけど書いてる途中でなんか出てきたんだ。

グダグダですみませんでした。

次回は西ロマかな。久しぶりに愛拉とかも書きたいです。

## ふたり（前書き）

こんにちは、ここではお久しぶりです、火野村です。

今回は西ロマです。でもついこの前西ロマ書いた気がするのは気のせい…？気のせいだよな。うん。

ふたり

「ロマは子供何人欲しい？」

至って真剣な、だけどいきなりな質問に、あやつく口の中のトマトソーススパゲティを吹き出すところだった。

「……つな、に、をいきなり……！」

すんでのところで吹き出さなかったスパゲティを飲み込んで、頬が熱くなつていくのをわかりながら、目の前の男に、聞く。

やって、と返す俺のダンナサマは、気楽そうにスパゲティを一口食べた。

「この前の、世界会議。」

「世界会議？」

聞き返せば、ん、とスペインは頷く。もぐもぐと口の中のものを咀嚼して飲み込んでから、スペインは再び口を開いた。

「イギリスが、赤ん坊連れてきたやる？」

「あー…そうだったな」

言われて、自分が遠目からしか見られなかったことを思い出す。本当はヴェネチアーノのように抱かせてもらいたかったのだが、そんなことをわざわざ離れた席へ頼みにいけるほどの度胸など俺にはない。



「それになーフランスとかロシアとかが子供欲しい欲しくて話してんのが聞こえたんや。だからなー俺もロマとの子供欲しいて思てん」  
スペインの言葉を聞いて、少しだけ、目を見開く。

ああそういえば、ヴェネチアーノも子供作るって決めたって話してたっけ。

……子供、か。

俺と、スペインの。

そう思ったら少し恥ずかしくて、目線が下がる。ごまかすように、手に持っていたフォークをスパゲティーの中に突き刺した。

「で、ロマは子供何人欲しいかなーって」

「なんで作ること前提なんだよっ」

目線をスペインの瞳に向けてそう言うと、え、子供欲しないのロマ！？と驚いた顔で言われた。

別に子供作ることには、反対じゃないけど。聞く順序ってもんがあるだろ！

「…俺は、ロマとの子供欲しいで？」

ロマは俺とおんなし気持ちちやうの？と言われて、つい、う、と詰まった。同じ、気持ちなのに。言われると、素直に言えなくなる自分がちよつとだけ嫌だった。

手に握りしめていたフォークでスパゲティーをつつく。こちらをじつと見てくる視線になんとなく恥ずかしくなりながら、だんだん俺は俯いていってしまった。

「……………べ、つじ。」

嫌、とか、そういうわけじゃ、ねえよ」

唇を尖らせながら、呟くように言った。

ふ、と顔をあげると、そこには満面の笑みがあつて。すぐ視線をそらしてしまった。

ああもうなんで俺がこんな恥ずかしい思いしなくちゃなんねーんだよ、と思うけど、言葉にはしない。

「…2人までな」

「え？」

「子供は2人までだ！いいなっ」

俺が大変なんだよコノヤロー、と目を丸くしたスペインに言えば、満面の笑みと、机を乗り越えてのハグ。

おおきになー、という彼に、こいつみたいなのが増えたら大変だろうなーと、微笑みながら思った。

## ふたり（後書き）

ありがとうございました！

あれですね、作者はハグが好きみたいです。すみません。

あとやっぱりボキヤブラリー少ないですね私。うん。

次回はなんだろ。米英かな。もしくは次の子供さつさと発覚させよ  
つかな。未定です。

## 2時32分のc a l l (前書き)

こんばんは、これまで厨2病でしたがこのたび本当の中2になりました火野村です。

今回は米英+仏加…というか正確には英と加が電話してるだけ！  
ぐっただですがそれでもよければどうぞ〜

## 2時32分のcall

『イギリスさん…僕です、カナダです…』

お忙しいのにすみません、と電話の向こうの相手は言う。弱々しいその声は、こちらもすごく不安になるような声で心配になってしまった。

「カナダ？どうしたんだ」

可愛い弟（妹？）分に、言葉を返す。実はお聞きしたいことが…、と携帯電話から聞こえてくる声に、俺に答えられることならなんでも答えるぞ、とできるだけ優しく言った。

あの…、とカナダは言いにくそうに俺へ質問した。

『その…』

イギリスさん、妊娠し始めの頃って体調とか、どうでした…？』

「妊娠し始めの頃？」

顎に手をあてて、考える。なんとなく、眠っているアリスのほうに視線を向けた。

妊娠し始めのころ…は、確か体調は、悪いばかりだったな。

「んー…とりあえず、すげえ気持ち悪かったな。そのせいで食欲失せてたし。

あーあと寝ても寝ても眠かったな。1日寝っぱなしだったこともあったな…。

ああそれから体調じゃねえが、イライラしやすかったし、なにもし

たくないつて感じだったときもあった」

『そ、そうですか…。』

妊娠初期を思い出しながら、諸症状をつらつらと並べると、カナダの変わらぬ弱々しい声が返ってくる。

『あの…イギリスさん』

「何だ？」

少し強くなったカナダの声に、首を傾げる。

少し間があつてから、息を吸う音が聞こえた。

『じ、実は…』

そんな感じの症状が最近続いているんですけど…』

「……………は？」

カナダの言葉に固まる。

妊娠初期の症状が続いてる、って。それ、まさか。

「…フランスは気付いてるか？」

『はい、僕の代わりに家事とかやってくれていますし…』

「病院には、行ってないんだな？」

『はい』

そうか。まあ、病院行ってたら俺に質問したり相談したりする必要はないもんな。

「…すぐ、病院行け。産婦人科行け」

『は、はい？』

少し大きめの声を出したカナダに、ふ、と笑う。結果は見えてるけど、病院は行つとかないとな。俺は携帯を持っていない手を腰にやった。

「ほんとに妊娠だったら、すげえお祝いしてやるからよ」

にっ、と笑って、言う。カナダの息を吸う音が電話越しに聞こえた。

『あ…ありがとうございます！すぐ病院行きます！ではっ』

「おう。じゃーな」

ぷつん。電話を切る。

ふう、と俺は息を吐いた。そうか、カナダが妊娠か。

ぱたぱたと俺は眠っているアリスに近寄った。その寝顔に笑いかける。

「アリスー、よかつたなー」。

友達ができるぞ」

いや、いとこって言ったほうがいいのか？と考える。一応、カナダは俺にとってもアメリカにとっても、兄弟みたいなもんだし。

まあ、カナダの子供ってことはあの腐れ縁の子供ってことだから複雑じゃないわけではないけど、単純に嬉しいという感情でいっぱいだった。

どんな子なんだろうな、と思いつながらアリスの頬にキスをして、アフタヌーンティーの用意でもしようとしてキッチンに向かった。

その夜、アメリカがとつた電話で、嬉しそうな声のカナダとフラン  
スから妊娠の報告が来たのは、また別の話。



## 2時32分のc a l l (後書き)

ありがとうございました！

実は、もう前回の時点でカナちゃん妊娠してたんですw

仏加の子供は、一応3ヶ月です。

アリスは生後6ヶ月になりました！早い！早いよ！

でもさくさく進めていきたいからな！

次回は仏加かな。

5ヶ月もつづく6ヶ月(前書き)

サブタイ無理。こんばんは火野村です！

だいぶ間が開いてしまいですみません！ローリングールがあんな長く

なければアアア……！

今回は仏加です。

## 5ヶ月もつすぐ6ヶ月

気持ち悪い。

とにかくその一言だった。  
妊娠してから、ずっとこうだ。

うう、と唸って僕はソファに横になった。もう妊娠5ヶ月目。5ヶ月目くらいになれば安定期に入ってつわりもおさまるらしいんだけど、僕の場合そうではなくて（どうやらイギリスさんもこうだったらしい）、まだまだつわりはおさまりそうにない。

そろそろお腹も出てきていて、妊娠してるなあって思う。幸せだなあって思う。  
けど。

「気持ち悪い……」

吐きはしないけど、ずっと気持ち悪さが続いている。それに加えてイライラとかもあったから、結構辛い。

覚悟はしてたけど、やっぱり辛いものは辛いんだなあ…。

「カーナダっ」

「わっ!?!」

ひょい、と目の前に現れたフランスさん（の、顔）に、驚く。あ、びっくりしちゃった？とフランスさんは眉をハの字にして顔を上げた。フランスさんはソファの横に佇んで、僕を見ている。

「大丈夫？」

「……大丈夫、夫……？」

「……ではない、よね、やっぱり」

彼の言葉に、はい、と頷く。僕は奥歯を噛み締めた。

フランスさんは屈んで、僕の頭を撫でてくれる。あったかい手。なんだか安心して、少し気持ち悪さもおさまった。

「……無理、しないでね？」

「……はい」

フランスさんの優しい声色に、微笑みながら、僕は返事をした。

さらり、撫でられた髪の毛が揺れる。僕は目を閉じる。

そして、

とん。と動きを感じる。

びっくりして静かに目を開けた。

気のせい、じゃ、ないよね？

「………動い、た、？」

僕の一言にフランスさんは驚いて、そしてそのあと2人で歓喜の声を上げた。

## 5ヶ月もつすぐ6ヶ月（後書き）

ありがとうございましたー！

こんな感じでしたとささとざくざく進めていきたいと思っておりますのでよろしく願います！

次回は…仏加と、どうか他夫婦の話だと思います。

## 母（前書き）

こんにちは火野村です相変わらずサブタイトルが無理です  
今回は仏加＋（壊）普です。

## 母

「邪魔するぜ！」

午後3時。かつ、とブーツの踵を鳴らしてやって来たのは、銀髪の悪友だった。

\*

「ちよつとプーちゃん勘弁してよ……」

「別にいいだろー！他に行くところなかったんだよ！」

「せめてスペインのそこ行ってくんない？うちはさあ見ての通り妊婦さんがいるわけでも臨月なわけよ。いつ産気付いたらもうおかしくないの」

「それくらい分かってるっつもの！」

こいつ絶対分かってないなと思った。

とりあえず煎れたコーヒーを飲みながらソファの半分を占領するプロイセンに、呆れ顔になってしまふ。

プロイセンの隣 俺の目の前 では我が愛しの奥様が、プーちゃんのことを気にしながらお腹に手をやっていた。

「……だー、畜生オーストリアの野郎オ……まじイライラするぜ」

「ちよつと貧乏揺すりしないでよ」

唇をとがらせるプーちゃんに言う。もう、どうせなら実家帰ればい

いのに。  
うちの邪魔はできるけど弟夫婦の邪魔はできないっていうのかなこの人は。

「喧嘩、ですか？」

「ん？ああ…だー思い出すだけでムカつく。あっちが謝るまで許してやんねー！」

カナダからの質問にそう答えて、プロイセンはがしがしと銀髪を掻き混ぜる。

俺はため息をついてひじ掛けに両肘をついてしゃがんで、理由はなんだったんだよ、と聞いてみる。さっさと帰れという念を込めるのも忘れずに。

ああ理由はなあ…とまで言って、はた、とプロイセンの動きが止まった。

「あれ…？なにがきっかけで喧嘩したんだっけ？」

「……知るか」

俺を見て言うな。

馬鹿だこいつ。じゃなきゃ阿呆だ。おそらく夫婦共々。

あつれー、とか言いながらプーちゃんはカップに口をつける。

「おつかしいなー…なんだったっけか…？」

「覚えてないくらい些細なきっかけだったってことだろ…」

はあ、と再びため息。もうさっさと仲直りして家に帰ってほしいな。いつもみたくカナダといちゃいちゃもできないじゃん。

「あ、フランス！コーヒーおかわりくれ！」



「お前も帰れ」

ついイライラが口調に出る。さっさと帰って仲直りしてこい。ええーと大声を上げるプロイセンから、呆れ顔でマグカップを取り上げた。

「コーヒーもう一杯飲んだら帰りなさいよ」

「でも俺、家飛び出してきちまったから帰りづら」いいから帰れ。」  
……うえー……」

心底嫌そうな顔をするプーちゃんに背を向けて、俺はキッチンに向かう。

絶対素直に帰らないだろうから、オーストリアに電話して連行：じやなかった、迎えに来てもらおう。

そう考えながら、ぬるくなっていると思われるコーヒーをカップに注いだ。

「お、おいフランス！」

「何？コーヒー注いで持ってくるまでの時間も待てない？」

「ちっげえよ！カナダが！」

「え？」

コーヒーが入ったマグカップを置く。急ぎ足でリビングに戻ると、カナダがお腹を押さえて床にうずくまっていた。

「カナダ！」

「ふ、フランスさん……」

「大丈夫！？は、早く病院……！」

これもう、もしかしなくても産まれるよ、と思いながらカナダの背中を優しくさする。

救急車呼ばなきゃと思って顔を上げると、プロイセンが携帯を耳に当てていた。

俺は目を見開く。プロイセンが落ち着いた口調でこの住所を告げる。

ぱちん、とプロイセンが携帯を閉じる音で俺ははっと我に帰った。

「おい、救急車呼ん…あ、悪い、余計なことしたか？」

「い、いや。ありがとう」

おう。と返事をするプロイセンに微笑む。そしてカナダのほうを再び見る。カナダの額には汗が滲み出っていて、苦しそうだった。

「カナダ、大丈夫か？」

「は、はい多分…っ…っ…！」

「お、おいおいほんとに大丈夫かよ!？」

プロイセンがカナダのそばにしゃがみ込む。プロイセンは眉をよせている。

頑張れ。

プロイセンがカナダに言う。小さい声で、はい、とカナダが返事をする。

頑張れって、俺が言わなきゃなのに、先に言われたな。

「…愛してるよカナダ」

「…っへ…？」

「だから頑張って」

きゅ、とカナダを抱きしめる。プロイセンが見ているってのは気にしない。

「頑張つて、元気な子、産んで。

俺からお願い。」

そう言つて、笑う。

はい、と返事をしたカナダは、もう母の顔をしていた。

母（後書き）

ありがとうございましたー！

普が出てきたのは次回に繋げる為です（ネタバレや

次回は仏加と壘普の2組でお送りする予定ですが…ちよいちよい他の夫婦も出てくるかなーと。

## 出産。子供。（前書き）

こんばんは火野村です。イベントDVDにテンションの上がり方は  
はんぱねえです。のんたん大好きのんたん

今回は仏加＋喫普です。前半仏加で後半喫普になります。後半のが  
長いけど。

いつも通りアレなクオリティですがそれでもよければドゾー

## 出産。子供。

生まれてきた子は、女の子だった。

腕の中の、ほんとにほんとに新しい命は、小さくて、愛らしくて。心があつたかくなつて、笑みと涙が同時にこぼれた。

「…『ミシエル』。」

フランスさんが、我が子の名前を呼ぶ。

妊娠が分かってから、ずっと考えてきて、やっと決まった名前。可愛らしいその名前は、この子にぴったりだった。

「きつとカナダに似た可愛い子になるよ」

「フランスさんに似て綺麗な子かもしれませぬ」

「優しい子になるんだろうね」

「はい。フランスさんに似て」

「カナダに似て、だよ」

くすり、笑う。腕の中で眠る娘に、幸せな気分になる。

きつとこれから、この子を育てていくにあたって大変なこともあるだろうけど。頑張れる気がした。

この子のためなら、どんなことでもできる気がした。

「よろしくね、…ミシエル」

まだ呼び慣れないその名前を、呼ぶ。

自分もやっとなつたんだなあと思つて、つい、顔がほころんでしまった。

\*

「…なーんか、すごかった、な」

「そうですか？」

「ああ」

病院からの、帰り道。いつのまにか、もう夜になっていた。

覗き見たフランスとカナダは大丈夫そうだったから、居ても邪魔なだけな俺はさっさと退場してきた。

オーストリアも迎えに来てくれたし。

いつのまにか、喧嘩なんてなかったみたいになっていたしな。

「…しかし…出産のときに立ち会うことになるとはなあ」

ぼつり、呟く。

まさか自分の目の前でカナダが産気付くなんて思ってもみなかった。そして一緒に病院に行つて、直前までカナダを励まして、分娩室の前で、ずっと祈るみたいにしてるフランスに引き止められて、横に座つて。

ほんと、こんなことになるなんてびっくりだ。

「出産かぁー…」

ぶん、と右手に持ったショルダーバッグを振り回す。幸い周りに人はほとんどいないから、ぶつけてしまふ心配はない。けどオーストリアに、おやめなさいお馬鹿、と言われてしまった。いつものことだからあまり気にしないけれど。

…出産、妊娠。

その2つの単語について考えて、俺はなんとなく自分の腹に手をやった。

「子供、か。」

そう呟くと、オーストリアが、子供ですか？と横から覗き込んでてちよつとびっくりしてしまった。

でもすぐ平静に戻って、前を真っ直ぐ見る。夜の光り輝く街はとても綺麗に見えた。

「…なーオーストリア」

「はい？なんででしょう」

「もしさー…俺が子供欲しいって言ったらどうする？」

かっかつ、そろそろ季節外れのブーツの踵を鳴らしながら聞いた。真っ直ぐ正面を見たままだから、オーストリアの表情は見えない。だけど結構な間が開いたから、おそらく驚いたんだろっなと思った。

「……………そうですね。」

「私は構いませんよ？」

「……………ん、そっか」

俺は笑う。振り回していたショルダーバッグを肩に掛けると、くりりと後ろを向いた。オーストリアが、右斜め前の位置に見えた。

「な。オーストリア。」



俺、子供欲しい」

悪戯っぽく言うと、オーストリアは目を見開いた。そして、ほんのり赤に染まった。

というか、言った俺自身も赤くなってしまった。よく考えたら、かなり恥ずかしいことだった。

「……………いいですよ」

オーストリアの声。俺は目を見開く。するり、頬を撫でられる感覚。オーストリアの右手が、俺の左頬に触れていた。できるだけ努力します、とオーストリアは笑った。つい、もっと赤くなってしまう。

「……………いい、のか？子供」

「ええ。」

私も実は、欲しいと思っていましたし。とオーストリアは言った。少し静止してから、俺はにっと笑って、左頬のオーストリアの手に自分の左手を重ねた。

「ありがとう、な」

そう言うと、オーストリアの右手と俺の左手で、恋人繋ぎをして、歩いた。

幸せな気分になりながら、子供は女がいいか男がいいかなんて、ちよっと気が早いことを考えた。

出産。子供。（後書き）

ありがとうございました！

奥普いいですよね。マイナー？知ったこっちゃねーよ。って感じですよ。

奥普引っ張りましたが、別に次妊娠するのがプーちゃんなわけではないです。

次回は、独伊です。多分。西ロマかもしれない。妊娠する順序でお送りします。

## おふるの話（前書き）

こんばんは火野村です

重大なミスをやらかしました

妊娠の順序おもいつきり間違えました

愛拉が先です

独伊と西口マかなり後だ…すみませんでした…

今回はアリスたんの話ってか米英＋アリスたんです

これからちよつとの間、小説の内容アリスたんに頼りまくるよ！

アリスたんは1歳くらいになります。

## おふるの話

「きゃあ！」

「あつこらアリス！めっなんだぞ！シャワー取らない！」

きゃあきゃあと楽しそうに声を上げる娘に苦笑する。とりあえず自然にシャワーを取り返しておいた。

「アメリカー、大丈夫か？」

「大丈夫…だと思っよう！」

「なんだよそれ」

ドアの向こうから、イギリスの声が聞こえて返事をした。あ、笑ってる。

別に心配されなくても大丈夫なんだぞ。俺はヒーローで、そしてアリスのパパなんだから。

\*

今日はじめてアリスとお風呂に入った。

小さなアリスの体を洗うのはなかなか気がつかう。力の加減がよくわからなかったけど、とりあえず極力優しくやったら大丈夫っぽかった。よかった。

ただどシャワーで泡を洗い流すときが大変だったんだ。シャワーを取られるしシャワーの水を顔におもいきりかけられるしって感じだった。

でもずっと楽しそうに笑うアリスにこっちも優しい気持ちになって、自然と笑顔になった。

バスルームに響く笑い声がすごく楽しそうだったって、俺達が風呂から上がったときにイギリスが言ってたし。

「君って大変だね」

「ん？」

「毎日これだろ？」

風呂上がり、タオルにくるまったアリスを手渡しながら、イギリスに言った。

今まで、お風呂から響いてくる声を聞いたことがないわけではなかったけど。すごく大変なんだって今日初めて分かった。

毎日こうだったら疲れちゃうしうんざりしちゃうんじゃないかな、と思う。

でもイギリスは、

「まあ、大変だけど、

アリスのためなら」

って言った。そして笑った。

大袈裟かもしれないけど、聖母みたいだった。

ちょっとびっくりしたけど、娘思いな彼女に、俺は微笑んだ。

よく考えたら、優しいイギリスが、可愛い可愛いアリスのことですんざりなんてするわけないよね。俺はちょっと恥ずかしくなった。

それと同時に、きゃあ、って笑ったアリスに、俺はにっとおもいっ

きり笑った。

「イギリス」

「ん？」

「今度は3人で入るっか、お風呂」

「…おう」

にっと笑ったイギリスの頬にキスをして、アリスの頭を優しく撫でた。

俺って幸せ者だなあって、ほんとに思った。

## おふるの話（後書き）

ありがとうございました。

あれーアリスたんメインにしようと思ったのに  
最終的に米英がいちゃこらしてるだけやん  
俺馬鹿。

しかしこれ妊娠編でいいのかな。  
また後で整理するかも。

次回もおそらくこんな感じだと思います  
もしくはミシエルたんが出てくるかも

おんなのこと妊娠（前書き）

サブタイ氏んだー

どうもこんばんは火野村です。

今回は愛拉です。

いきなり妊娠発覚です。ネタバレや

女の子の日ネタが入ってます。とつてもデリケートな話。男性の方は注意です。

深夜の勢いで書いたグダグダなシロモノですがそれでもよければド  
ゾー



## おんなのこと妊娠

おかしい。

明らかにおかしい。

僕は思った。だって、女の子特有の、“あれ”が来ないから。

もうそろそろ、3ヶ月になる。女の子の体になってから来るようになったけど、ここ最近、ない。

なんでだろう。別に不健康な生活はしていないつもりだけどなあ。何か変なことしたっけなあ、僕。

“あれ”が来ると辛いし、来なければいいのにと思っていた頃もあったのに、来ないとこんな不安になるんだなあ。慣れって怖いなあ。

というか、ただの不順なのか、僕がなにかしたのか、それが問題だよなあ。

考えて、はあ、とため息をつく。

すると、ラトビア？と隣から声がかかって、はっとした。そうだ、エストニアが隣にいたのを忘れていた。

「またなんか悩み事？よければ聞きましょう？」

「…いえ、気にしないで下さ、！」

心配そうに僕の顔を見てくるエストニアに、さっと1つの可能性が頭をよぎる。

まさか、と思う。心当たりは ないと言えば、嘘になる。

ラトビア？と再び掛かる声に、僕はスカート裾をきゅっと握った。

「エストニア、あの」

\*

「おめでとつございます。3ヶ月ですね」

医師から告げられた言葉に、2人揃ってぼかんとした。

何が？誰が？3ヶ月？

疑問符が浮かんで浮かんで、消えない。目の前の医師はにこにここちらを見ているだけだ。

「順調に育ってますよ、赤ちゃん」

赤ちゃん？

その言葉に目を見開いた。

赤ちゃん、って、つまりは、僕は、妊娠してる、ってことで、僕が身籠ってるそれは、僕とエストニアの子供ってことで！

「…っ！」

僕は嬉しかった。

だって、大好きな人との、エストニアとの、子供が、できたんだから！

慌てて、隣のエストニアの顔を見上げる。

それが嬉しそうな表情だったから、ほっとした。

もし眉をしかめでもしていたらどうしようかと思ってしまった、から。

「っ……」

つい、頬が緩む。視界が滲む。

僕はいつまで経っても泣き虫だよなあ。そう思いながら、静かに袖で涙をぬぐった。

医師の説明はエストニアが熱心に聞いてくれているみたいだから、大丈夫だろう。

「（……ラトビア）」

「（……はい？）」

「（……ありがとう）」

「（……僕がお礼を言われることでは）」

「（それでも。ありがとう）」

小声のやりとりに、俯いたまま微笑んで、お腹に手をやって、僕はほんと幸せってものを実感した。

おんなのこと妊娠（後書き）

ありがとうございましたー。すみませんでした。

次回から愛拉妊娠中編。

そして、夫婦編リクエスト募集します。夫婦編じゃなくてもおkですが。よろしければどうぞ。

次回も頑張りますー

笑顔に、子供に、未来に、（前書き）

こんばんは、バリバリテスト週間中です火野村です。

勉強の合間合間に書いてたら書き上がっちゃったんだぜ…というこ  
とで更新です。今回は愛拉と露中。

いつものごとくggdggdですがそれでもおkならどうぞー

笑顔に、子供に、未来に、

「拉脱维亚！」

その声に、椅子に座ったままふ、と顔を上げた。にっと明るく笑うその人は、あのロシアさんの、奥さん。そう、中国さんだった。

\*

「あいやー、もう7ヶ月になるあるか。」

「はい、おかげさまで順調です」

「それはよかったある〜。」

中国さんは笑う。腹なでてもいいあるかつ、と元気に言うから、どろぞ、という中国さんはしゃがみ込み、そっと僕のお腹に触れてきた。もうそろそろ、お腹も目立ってきたところだ。

「ところで、ロシアさんは？」

「…あー、あんなやつ気にしないでいいある。全くあいつはほんっといつもいつも…」

ぶつぶつと文句を言い出した中国さんに、眉を下げた。喧嘩でもしたんだろうか。

今日は世界会議で今は休憩時間だから、もちろん会場か会場周辺のどこかにロシアさんもいるんだろうけど。

「ところで、子供の名前は決まったあるか？」

しゃがみ込んだまま見上げてきた中国さんに、はい、と笑う。ちょうど昨日、エストニアと話して話して決まった名前なんだ。

「ヴァレリー、に、しようかと。」

検査で男の子というのは分かっているから、男の子の名前だけを決めた。ちなみに、案を出したのはエストニアだ。

良い名前あるな、と中国さんが言ったので、ありがとうございます、と言っておいた。

「しっかし子供…いいあるなあ」

「はい？」

「うちの旦那もそういう覚悟を決めてくれたら良いんあるが」

僕は首を傾げた。あのロシアさんが？

はあ、と悩ましげに溜め息をつく中国さんに、もしかしたら喧嘩の原因もそれなのかな、と思った。

「ちゅーごくくうんっ!」

「ぎゃあああっ!?!?!?」

がばあ、というように、いきなり誰かがしゃがみ込んだままの中国さんの背中に覆いかぶさる。中国さんは悲鳴を上げた。ふわりとマフラーの端がひらめくのが見える。

その誰か、は、言わずもがな。

ロシアさんだった。

「今朝はごめんねつ。僕が悪かったよ、許して?」

「お前が素直だと気持ち悪いある……!とっ、とりあえず離れるよろしっ!」

「やだ」

「やだじゃねえある! 拉脱維亜がいるんあるから!」

そう言われてやっつと、ロシアさんが僕を見た。目が合って、にこつと笑ったロシアさんに一瞬ひるむけれど、なんとか微笑み返した。

「…赤ちゃん、7ヶ月だっけ? 確か。」

「え!? あ、はい。」

「産まれたら何かお祝いさせてね。頑張っつて」

再びにこつと笑うロシアさんに、ああ、と思う。結婚してから、ほんと変わったよなあ、この人。

昔の面影もあるっつて言えばあるけど、かなり優しくなったっつていうか、柔らかくなった? っつて感じたよな。

そう思考を巡らせながら、僕はありがとっつございます、と言っつて笑った。

「男の子? 女の子?」

「あ、男の子です」

「そう。エストニア似かな? ラトビア似かな?」

「とりあえず僕似ではないといいんですがね……。性格的な意味で。」

「ラトビアはおっちょこちよいだからねえ」

ふふ、とロシアさんは笑う。昔なら、こんな会話はできなかったのに。

きつと、中国さんのおかげなんだろうなあと思っつて、中国さんを見る。ロシアさんに覆いかぶさられたままのその人は、まだロシアさ



んに抗議と抵抗を続けていたけど、ロシアさんはあまり気にしていなかった。

「あれ、ロシアさん？」

「あ、エストニア。赤ちゃん、順調みたいだね」

「はい。ありがとうございます」

いつのまにかロシアさんの隣に来ていたエストニアは、そう言って笑った。それから僕に、大丈夫？と声を掛けてくれる。僕はい、と笑って返事をした。

「幸せそうだね、2人とも」

「へっ？」

僕とエストニアは目を丸くしてロシアさんの顔を見る。にこおーつと笑っているロシアさんに、あなたこそ幸せそうですが、と思った。

「……よし決めた。」

子供つくろっ中国くん！」

「はあ！？お前今朝はまだいらんのか言っ……！」

「いいじゃない。ラトビアたち見て気が変わったのー！」

抗議しながらばたばたと手足を動かす中国さんにぎゅうと抱き着くロシアさんに、苦笑する。そして心の隅で、やっぱり喧嘩の原因はそれか、と思った。

ロシアさんと中国さんの間にはどんな子供が生まれるんだろうとも思いながら。

「…楽しみ、ですね」

「…そうだね。」

ロシアさんと中国さんの子と、うちの子供…ヴァレリーが仲良くなっているところを想像して、くす、と笑った。

笑顔に、子供に、未来に、（後書き）

ありがとうございました。

露中夫婦子供つくる言ってましたけど、まだかなり先ですから。

妊娠順では愛拉の次は再び仏加の予定…  
サーセン。

次回はー出産かなあ？

僕らの息子（前書き）

こゝ、こんにちはは火野村です…！間空いてしまつてすみません！

今回いつもに増してグダグダです…！すみません！

## 僕らの息子

「ちょっと、泣きすぎですよエストニア」

「だ、だって」

「だってじゃありませんよもう。看護婦さん笑ってるじゃないですか、泣き止んで下さい。」

「うう…」

もうこの人は、結構涙脆いんだから。と、どつと来る疲労感に耐えながら思う。僕の腕の中で眠るのは、産まれたばかりの、小さな小さな命。

「お父さんは泣き虫ですねえ？ね、ヴァレリー」

「な、泣き虫って…！」

「泣き止まないからですよ」

ふふ、と笑うと、エストニアは眼鏡を取って涙を拭いた。

「だって…産まれたん、だよ？」

「はい」

「僕とラトビアの、子供が」

「はい…」

笑みが、零れる。本当に幸せだと思えた。

出産予定日より少し早い今日、無事産まれた命は、とてもとても、可愛くて。

押し寄せてくる疲労感や眠気よりも、嬉しいとか幸せとかそうついう

気持ちの方がずっと上だった。

「可愛い、ね」

「はい、とつても。」

男の子ですし、きっとエストニアに似て綺麗な顔立ちな子に育ちますよ。

そう言うと、エストニアは笑って、ラトビアに似て可愛いかもしれないじゃない、と言った。

「…でも…どちらであっても、…僕らの子供、なんですよね」

どちらに似たって、どちらにも似てなくなたって、この子は僕らの子供なのだ。

そう考えると、なんだか愛が溢れてくるようだった。

「これから、頑張っていきましょうね」  
「うん」

そう言って僕らは笑い合って、可愛い息子に微笑んだ。

僕らの息子（後書き）

ありがとうございました！

うむむ…最近軽いスランプかもです。

次回は…仏加？かな？

## 次の子（前書き）

こんにちは、火野村です。最近やっと創作意欲が湧いてきましたです。

今回は米英＋仏加です。アリスたんが結構喋ってます。



## 次の子

「…で？要点だけ述べろ、髭」

「……………次の子が、  
できました……………」

「よし！そこに直れその髭抜いてただのオッサンにしてやるそして殴らせろ」

「ちよつまままま、待てつて！てかこれ普通吉報だよね！？お兄さんなんで殴られるの！？」

「俺が殴りたいから」

「お前が俺とカナダのこと反対してるのは分かるけどさつてちよつだから待つて！」

じりじりじり、とイギリスがフランスとの距離を縮めていく。ちなみにイギリスは右手で拳を握り、高く振り上げている。

フランスは冷や汗を書きながら後ろへ後ろへ退がっていく。そろそろ壁につくな、あれは。あ、ついた。

「イギリス、そこまでにしといてあげなよ。それに親が暴力を振るう光景なんて、子供に見せちゃ駄目なんだぞ」

「……………チツ」

フランスの胸倉から手をはなしたイギリスは静かに舌打ちをした。膝の上に座るアリスが首を傾げる。

「ママ、おこつてう？」

「うん？まあ、怒ってるんじゃないかなあ」

「おじちゃん、かあいそ……………」

「だつてさ！。よかつたねフランス」

立ち上がるフランスにそう言うと、いやよくないよ!?と返ってきた。アリスがまた首を傾げる。カナダの腕の中のミシェルがあう、と声を上げた。

「あとアリス、俺のことおじちゃんって呼んじや駄目って言うてるでしょ。お兄さんだよ、お兄さん！お兄ちゃんでも可！」

「やー！おじちゃん！」

「ママがおじさんって呼べって言ったんだもんね、アリス？」

「ん！」

「イギリスううう！！！！！」

叫ぶフランスに、イギリスはソファアに座ってからべーっと舌を出した。

フランスも眉根を寄せながら、向かいのソファアに座った。

今日は、しばらく前からフランスたちが遊びに来る予定だった日だ。アリスが1才、ミシェルもまだ小さいけど外出できるくらいにはなったので、子供たちを会わせておこうと思って計画したものだった。

だけど、だけどだ。フランスと、一応カナダも、空港に出迎えに行ったときから何か様子が変だった。俺とイギリスは2人して首を傾げながら、一緒に家まで行ったんだけど、家に着いてリビングに入ったらフランスがいきなり頭を下げるから、びっくりした！

嫌な予感がしたのか、イギリスが低い声でフランスに何だと訪ねれば、フランスは謝罪の言葉と何故こうなったかについてを先に述べ始めたんだ。俺とアリスとカナダ（と、ミシェル）はソファアに座って黙って2人を見ていた。そして、冒頭のやり取りに戻る。

つまりは、カナダとフランスに、また子供が出来た、ってことらしい。

「実は2日前に分かったことなんです…」

「「2日前!?!」」

「よ、4ヶ月だそうで…」

カナダが苦笑しながらうなだれる。2日前かよ…とイギリスが呟いた。

「大変じゃないかい? 年子なんだろう?」

「う…確かに大変、だけど」

「けど?」

「あ…、やっぱ、う、産みたい、ってゆうか」

俺の質問に答えながら、カナダがどんどん真っ赤になっていく。ミシエルがまたあうあと声を上げたから、カナダがミシエルを腕の中で揺らして笑わせた。

「まあ別に子供できたってんなら構わねえけどよ。もともと俺が関与するような話じゃねえしな」

「! イギリス!」

「何人子供出来ようが、俺は別に構わねえ。

た・だ・し、だ。子供が何人出来ようが何があるうが、」

「ウイ、わかってる。カナダも子供たちも、俺が一生幸せにします。」

「

ふわ、と雰囲気を醸し出しながら、フランスが微笑む。わかってん  
じゃねえか、とイギリスは肩を竦めた。

## 次の子（後書き）

ありがとうございました！

うーむ、子供のことヨクワカラナイ（・・・）

次回はまた仏加かなっ

きつと君は、気付いてない(前書き)

こんばんは、火野村です。お久しぶりです。

こんな深夜になにやってんだとは言わないで下さい。

今回は壱普と仏加です。このCPかけあわせやすいな！。

きつと君は、気付いてない

「あー俺も早く子供欲しいぜなーオーストリアっー!!」

「……………そうですね」

「そうですねじゃねーよー!!この根性なしが!!」

プロイセンはそう叫び、視線を外すオーストリアをぎっと睨む。オーストリアは申し訳ないというような、だけれど落ち着いている顔をしている。

プロイセンはつい熱くなってしまい、ぐっとオーストリアの胸倉を掴んだ。

「てんめえ子供作るとか約束してよお!!結局てめえは根性ねえよな!!中出しどころか生でもしやがらねえ!!結局いつも通りのまんまだ!!」

「なっ…お、お下品ですよ!!」

「うるっせーこの腐れ坊ちゃんが!!」

プロイセンの表情が、今にも泣き出しそうな顔に変わる。オーストリアは少しだけ驚いて、少しだけ眉を上げた。

「俺…お前の子供ほんとに欲しいと思ってるのに…!!お前は俺を裏切んのかよ!？」

「っ…裏切るなんて」

「じゃあなんなんだよ!？」

プロイセンの目にじわりと涙が滲む。オーストリアは、はっとした。プロイセンが視線を落としたその瞬間、オーストリアはプロイセンを抱きしめていた。

「ばっ…は、離せ！」

「…すみませんでした」

「……………え？」

「貴方の気持ちを考えていなくて…本当にすみませんでした。ただ私に勇気がなかったただけなのに…」

…オーストリア、とプロイセンは呟くように言って、オーストリアの顔を見上げる。オーストリアの顔は真剣な、心底申し訳ななさそうな顔だった。

「じゃ、じゃあ子供……………」

「…はい。勇気を、出しますね」

「……………！」

優しい表情のオーストリアの一言に、プロイセンの表情が一気に明るくなる。

プロイセンはぎゅう、とオーストリアに抱き着くと、ありがとな、と静かに言った。

「…プロイセン」

「…ん？」

プロイセンが顔を上げる。オーストリアは微笑んで、プロイセンの顎に手をやる。そしてゆっくりと、二人の唇が近付いてゆき「はいはいそ…こ…ま…で！」

ぱんぱん、と手を叩く乾いた音が響き、辺りが現実に戻されたようになる。二人が見れば、そこにはフランス…と、抱き上げられているミシェルがいた。



「ちよつと人ん家であからさまにイチャイチャしないでよね！用事終わったんならさつさと帰りなさいっ」

「ええー！？なんだよっフランスのけーちー！」

「ケチじゃありませんー普通の考えですー」

妊婦と赤ん坊がいたら当たり前でしょうが！！とフランスは言い切った。プロイセンは眉を寄せ唇を尖らせる。

「お前もうメープル貰ったんでしょ！さつさと帰りなさいよっ。てかオーストリアも何か言えよ！」

「はあ。」

「はあじゃないっ！！」

びしっ！！とフランスはオーストリアに左手人差し指を向ける（右手はミシエルを抱えてふさがっているから）。もおお前は、とフランスがため息をついたところで、まあまあフランスさん、とカナダが苦笑した。ちなみに、いたのか、とプロイセンとオーストリアが同時に思ったのは秘密。

「なんだかすみません…おもてなしもできないのに」

「いや、別に大丈夫だ！てか、まあ一応フランスの言う通りだよな。さつさと帰らねーと迷惑だよな」

「迷惑なんてそんな」

「実際メープルシロップ貰いに来ただけだしな、悪かったな邪魔して」

にへら、とプロイセンが笑うと、同時にミシエルがあうーと声を上げた。ミシエル可愛いな、とプロイセンが言うと、ありがとうございませぬ、と照れたカナダが言った。

「じゃ、元気な子産めよカナダ！メープルありがとな」

「はい。プロイセンさんも、頑張ってる」

「ケセセツ、そうだな」

プロイセンは自分の荷物と袋に入れたかなりの量のメープルシロップを持つと、ひらひらと手を振った。

「じゃ、カナダ。フランスも。またな」

「お邪魔致しました」

にこりと笑ったプロイセンとオーストリアは、玄関へと向かった。カナダとフランスは手を振って二人を見送る。

「あ、そうだフランス」

ドアノブに手をかけたプロイセンが言う。なんだよ、とフランスが言えば、プロイセンはにかつと笑って、

「あんまカリカリすんなよ！」

とだけ言って、扉の向こうへと颯爽と出ていった。くすり、と笑ってから、オーストリアも。

きよとん、としたフランスに、カナダが、友達って結構見てるものですね、と囁いたのは約1分後のことだった。

きつと君は、気付いてない(後書き)

ありがとうございました。グツダグツダすみませんでした。

あ、更新少ないのにもアクセスありがとうございます。これからも頑張ります。

次回は出産かなー

## 秋産まれの愛しのアンジェ（前書き）

こんばんは、火野村です。お久しぶりでございます。

やー最近好きなジャンルのこととかグラッグラで、つい小説も進まなくて…すみません；

今回は仏加と米英！ちなみに本編中はカナちゃんはその場に居ます  
が寝てます。

あ、サブタイトルには突っ込まないでやって下さいまし。

## 秋産まれの愛しのアンジェ

「えっ…」

『産まれた』!?」

もう!?!とフランスは携帯電話に大声で言いながら、走る。器用にスーツのジャケットを着て、仕事場から外に出る。タクシーはもう呼んである。

少しだけ、肌寒いと思う。季節はもう秋だった。

\*

「もー可愛いなあ〜ほんと俺とカナダの子!」

「お前な…先にお礼言うとかねえのか?」

「いえ。ミシエルを見てもらっていた上に産気付いたカナダのことまで、ありがとうございます」

「ん。」

イギリスは頭を下げるフランスに満足げである。(もう夜なので)眠っているアリスを椅子に座りながら抱えて、アリスの背をなでている。

「しっかし年子か。大変そうだなあ…」。

まあ、頑張れよフランスパパ」

「お前にパパとか言われると気持ち悪いっ」

「ん?もつと言ってやるっか?」

くすくすとイギリスは意地悪く言う。フランスはまあ、とむくれて抱いていた小さな男の子をベビーベッドへと下ろした。

「ねえ、その子の名前、なんて言うんだい？」  
「え？」

フランスが振り返る。可愛らしく首を傾げるミシエルを抱いた、アメリカがそこにはいた。  
なんとなく、本当になんとなくだが、ミシエルがそのままアメリカの子ってことで連れていかれそうだなあ、とフランスは思った。

「この子の、名前？」

知りたい？とフランスが言えば、当たり前じゃないか！とアメリカが言う。ふ、と笑ったのは実はフランスだけじゃなくて、イギリスもだったのは秘密である。

「…この子の、名前はね。」

ルカ。

ふわりと微笑んで、フランスはそう言った。

（ちなみに後でアメリカが聞いたのだが、全て直感で名付けたらしい。）

「いい名前、だね」

「でしょ？」

自慢の息子になってくれるといいなあ」

「…そうだな」

イギリスは、少し遠くにあるベビーベッドを見詰める。そして、ふっと優しく笑うと、アリスを抱えて立ち上がった。

「じゃ、俺らはそろそろ帰るかアメリカ」  
「そうだね」

はい、とアメリカはフランスへミシエルを渡す。ばいばい、とアメリカがミシエルへ手を振れば、ミシエルはその小さな手で、小さく手を振り返した。

「じゃーなフランス。カナダによろしくな」

「ん。お前らも早く二人目作れよー」

「うっせ！」

べつと舌を出してから、にししとイギリスは笑う。

そーいえばお互い子供が出来てから比較的仲良くなったよなあこの人たち、とアメリカは密かに思った。

ドアの開閉を静かにして、アメリカたちは廊下に出た。外は少し寒そうな色をしている。秋だな、と誰ともなしに呟いた声が響いた。





幸せで、楽しみで（前書き）

ひつつっさしぶりですね！！！！お久しぶりです火野村です！！  
夏休みにはついったー浸りになったり携帯没収されたりといろいろ  
ありました。ジャンル移行もしたりとか。  
とりあえず、他の連載はまだ分かりませんが、この作品だけは続け  
ていこうと思っています。

ヘタリアの勢いもまだまだ衰える気配なんてさらさらないみたいで  
すしね！がんばります！

今回はイタちゃんとロマのお話です。

## 幸せて、楽しみで

「くっそ……気持ち悪くて仕事になんねえぞこんちくしょーが……」

仕事場で書類処理中、兄（…姉？）が呟いたその言葉に、俺はぴくりと反応した。

「……気持ち、悪い？」

「あー、そうだよそうだよきもちわりいんだよ。かれこれ3週間くらいずっとひでえんだ」

「…あー。もしかしてすっぱいものとか、食べたくならない？」

「…いや、ときどき変なモンは食いたくなるけどな…その、砂、とか」

……同じ、だ。

俺は思った。持っていたボールペンを指先でぐるりと回して、少しだけ眉をよせた。

俺も兄ちゃんと同じ。

ほぼいつも気持ち悪いし変なもの食べたくなるし。ついでに眠いしイライラしやすいし。（兄ちゃんも最近よくあくびしてるし、イライラしやすいみたいだし。）

でも俺は、この症状ってなんのせいなのか、だいたいわかってきているんだけど。

くっそ、と兄ちゃんは前髪をかきあげて手に持った書類をにらんでいた。

ああ、やっぱり病院いかないとだね。

「兄ちゃんも一緒に、ね」

「は？」

\*

「兄ちゃんおめでとー！ー！」

『バツカ、お前こそ。お、おめでとーだぞコノヤロー』

「えへへへ」

2日後。電話でお互いに、報告し合った。

ふたりとも、妊娠、してた。

しかもふたりとも、3ヶ月、らしい。

「予定日近いよね、楽しみだなあっ」

『…おう』

「あ、そういえばスペイン兄ちゃんの反応どうだった？」

そう質問を投げかければ、…ああ…、と兄ちゃんは呆れたような声を出した。

『「でかしたでロマ！俺らの子供ができたねんでうわああああああああお祝いせな！名前はどするっ？男！？女！？ああああめつつつちや嬉しいわあホンマ大好きやでロマーノ！！！」』

……って暑苦しいほど抱きしめられた。正直ウザかった。』

「ああー…」

スペイン兄ちゃんらしいね」

頬を紅潮させて、おもいつきり破顔して喜ぶ彼が目に浮かぶようだ。

『一応聞くけど…』

お前のところはどつだったんだよ』

「え?」

あー、ドイツの反応?

と俺は首をかしげた。兄ちゃんがドイツのことを気にかけるなんてめずらしい。

…もしかして、少しは認めてくれたのかな?俺たちのこと。

「うん…まあ、

『本当に、ありがとう。頑張っていこう』

みたいなこと言われて、赤面されちゃったからハグして終わり?って感じ」

『ほー…じゃがいも野郎らしいじゃねーか』

「ふふ、そうかなあ」

赤ちゃんができたの、と唐突に言ったときの、びっくりした顔と、赤面した彼を思い出して、微笑む。たしかに、ドイツらしい反応だったなあ。

「まあ、お互い頑張ろうね」

『ああ、そうだな』

「性別とか、名前とか、分かったり決まったりしたら連絡ちょうだいね?」

『お前こそな。』

…あ、ちょうどスペイン帰ってきたみてえだ』

少し遠くのほうから、ただいまーロマーあ、とくたびれた声が聞こえる。

ふふ、と笑ってから、じゃあまた電話するね、と言って、おう、という返事を聞いてから受話器を置いた。

「……………うーん、  
楽しみだなあ」

おなかに手をあててそう呟いたら、玄関の戸が開く音と愛する旦那様の声が聞こえたから、  
おかえり！と大きな声を上げて、俺は玄関に向かった。

幸せで、楽しみで（後書き）

ありがとうございました！

まあこれからも長くなりそうですが、応援よろしくお願いします。

ちなみに今はめだかボックス中心に活動して（るつもりでございます）  
ます。球磨川せんぱいが好きです。

次回も引き続き独伊と西ロマの予定です。

## 双子（前書き）

こんばんは火野村です！もうね！ざくざく更新してくよ！  
今回も予告通り独伊と西ロマです。内容はまあ、サブタイトル通り  
といたしますか。  
ぐだぐだですが、どうぞ。

## 双子

「「双子?」」

病院の診察室。俺はルートと声をそろえてそう言った。

「はい、はっきりと赤ちゃんは2人映ってますから。性別のほうはちよつと…隠れているので分かりませんが」

医師が言う。今日は検診に来ていたのだが、まさかの発見に驚いた。そして、嬉しかった。

自然にルートと顔を見合わせて、笑う。一度に2人も、愛しい愛しい家族が増えるなんて！

「まあ双子となると出産のほう若干大変になるんですけどね…特に問題ないでしょう。うちには双子用の設備も整ってますし」

にこりと笑う医師に、そうですかと微笑んでふくらんできた自分のお腹を見た。

そっか、双子か。

「（ロマーノたちにも報告しなければな）」

「（あ、そうだね）」

ルートの小声に、俺も小声で返す。そうだなあ、家に帰ってから電話しようかな。

なんだか幸せで、つい、えへへと声を出して笑ってしまった。



\*

家へ帰ると、電話が鳴っていた。りりりりん、と長年愛用している古めの電話機から音が響く。

「んん？誰だろー」

そう呟いてから、受話器を手にとる。挨拶をする前に、ヴェネチアーノか！？という聞き慣れた声が受話器越しに聞こえた。

「兄ちゃん？どうしたの、慌ててるみたいだけど」

『これが落ち着いていられるか！きよ、今日検診行ってきたんだけどよ！これが驚きの検査結果で！』

「え、どうしたの？」

この様子なら、悲しい知らせとかではないらしい。俺は少しだけ首をかしげて兄ちゃんの返答を待った。

『あ、あいな、驚くなよ。』

じつは俺の子、…

双子、だっただよ！』

……きっかり3秒俺は固まった。

視界の隅で、ルートがげげんそんな顔をしているのがわかった。

「兄ちゃん、」

『、なんだ』

「俺もなんだよ！」

『……………え？』

俺は目を見開き、輝かせた。こんな偶然があり得るだろうか。同時期に妊娠したと思ったら、今度は2人とも双子だなんて！

「俺も今日の検診で双子だってわかったんだ！すごい！これほんとに偶然なのかな！？」

『ま、マジかよこのやるー…！すごい確率じゃねえのか、これ』

「うん！ほんとすごいよね！俺、なんか嬉しいよ！」

俺は飛びはねたくなるような思いだった。自然と顔がほころんで、すごく嬉しい気持ちになった。

ふたりとも、双子なんて、すごすぎる！

「えへへ…！兄ちゃんおめでと！一緒に、がんばっていこうね！」

『ん、ヴェネチアーノも、お、おめでと、う。』

うん、がんばろー、な』

俺には、照れて赤くなりながら言葉を紡ぐ兄ちゃんの姿が見える気がした。

『イタちゃん！ドイツー！お互い頑張ろなー！』

『っ！こらスペイン、耳元ででけえ声出すんじゃねえ！』

『す、すんません、カンニンやでロマ』

スペイン兄ちゃんの元気そうな声が聞こえて、俺はくすくすと笑った。

ここに子供たちが増えたら大変そうだなあと思いながら、俺は幸せ

な気分におもいつきり浸った。

## 双子（後書き）

ありがとうございましたー！  
しかし旦那ズの台詞がすげえ少ないな……。。

次回も引き続き独伊と西ロマの予定です。

あと、リクエストしてくださった方ありがとうございましたー！

## 電子音と振動（前書き）

こんばんは。火野村です。小説かくのつてたのしいね。

今回は引き続き独伊と西ロマ！出産間近、ですね。

しかし、さくつと文が上手くなる方法とかないものでしょうか。

## 電子音と振動

「いやーでもホンマすごいなあ

イタちゃんとかロマがほぼ同時に妊娠して、

しかもふたりとも双子やなんて！」

「そうだな」

「はーホンマ楽しみやわーもうすぐやで！」

息子と娘に会えて、イタちゃんの子2人にも会えるんや！

ぜったい4人ともかつわええに決まっつとるで楽園やんなあ！」

「ああ…楽しみなのは分かるがなスペイン、

手を動かせ！仕事しろ！！」

ドイツが怒声を上げる。スペインはちえーと唇をとがらせながらペンをとる。ここは今日はスペインとドイツの2人が、わけあって一緒に仕事をしていた。

ちなみに、もうイタリアもロマーノも出産予定日を1週間ほどあとに控えているのであった。

「やって〜…急ぎの仕事やないし、話もしたいやん？」

スペインが言い訳すると、ドイツが溜息をついた。

「急ぎの仕事ではないと言ってもな、上司からは『終わらないと部屋から出さない』などと言われているのだぞ？」

しかも今月はイタリアもロマーノも臨月だ。つまり、いつ産気づいてもおかしくない。

あとは、わかるな？」

「了解や」

スペインは苦笑いすると、ペンをしつかりと持ち、書類を片付け始めた。

少しの間だけ、部屋のなかは沈黙した。

しかしスペインがこんな空間に耐えられるわけもなく、スペインの口は自然と開いてしまった。

「そーいえば、ドイツ。子供の名前は決まったん？」

「…静かに仕事できないのか？」

「できへんわ！口も手も動かすとくさかい、話そつや」

ドイツは手を動かしながらも再び溜息をついたが、仕方ないと言わんばかりにゆっくりと口を開いた。

「……ニーナと、ロベルトだ」

我が子の名前を口にする。性別は、女と男のはずだから、当然女の子と男の子の名である。

「へえーっなかなかええやんか！2人で決めたん？」

「女のほうをイタリアが、男のほうを俺が決めたんだ」

「ほー。なんや決め方もドイツらしいなあ。ええ名前やん」

スペインのその言葉に、ダンケ、と呟いてドイツは微笑む。

でなーうちの双子の名前はな、とスペインは聞いてもいないのにへらへらと笑いながら言葉を紡いだ。

「エレーナと、カルロ言うねん。ええ名前やろ？」

ふたりで相談して決めてん。とスペインは幸せそうな顔で言う。そうだな、とドイツはスペインの顔をちらりと見てから笑った。

「、スペイン。手が止まっているぞ」

「おお、スマンスマン」

ペンが紙の上を走る音がひとつ増える。

ほんでなー、とスペインが再び口を開いた。

\*

窓の外はもう夕焼けで染まり、あれだけあった書類もほぼ片付いてきたころ。

ピリリリ、と電子音が響き、ふたりの会話が止まった（会話と言っても、スペインののろけ話にドイツが適当に相槌をうっているだけだったが）。

「…イタリアだ」

「んー？どないしたんやイタちゃん。いつも仕事中には掛けて来おへんちゃん」

「悪い、出させてもらう」

ぴっ、と通話ボタンを押し、ドイツが電話にでる。

イタリアか？とドイツが心配そうな声で電話の相手へ話しかけた。

「…い、イタリア？大丈夫か、っえ？そ、そうか。

無理するなよ。俺もすぐそっちに行く。ああ、大丈夫だ」

ドイツの受け答えや声掛けだけで、鈍感なスペインにもどんな状況なのかはだいたい想像できた。



きつと、イタリアが産気づいているのだろう。

びっ、とドイツが電話を切る。と、ドイツはスペインに向き直った。

「…スペイン、悪いんだが」

「わーっかとするで。イタちゃん、出産やる？」

スペインがにっつと笑うと、ドイツは、ああ、と返事をした。

そわそわと落ち着かない様子のドイツは、なかなかめずらしい。

「…ええで。行ってきいや。仕事ももうあらかた終わっとるし、上司には俺から言っとくさかい。」

心配で、仕方ないんやろ？とスペインが軽くウインクしてやると、ああ、とドイツは手荷物をひっつかみ立ち上がった。

「頑張りや。応援しとるわ」

「…悪いな」

「出産祝いはずんでくれればそれでエエでー」

にかりと笑って手を振ると、ドイツは微笑んでから、颯爽と立ち去っていった。

閉まったドアを見つめて、スペインはしばらく微笑んでいた。

「…ふう」

息を吐いて、さて仕事の続きを、とスペインは再びペンを手にとった。  
が、ポケットの中の振動に、仕事を再開することは遮られた。

「んもー誰やねん…ってロマーノやった」

どしたんやろ？と疑問符を浮かべながら、スペインは電話に出た。

「ロマーノ？どないしたん？」

そして、目を見開いて、驚いた。

「……ええ！？」

がたり、と、スペインも立ち上がった。

## 電子音と振動（後書き）

ありがとうございました。

旦那ズの台詞が前の2話とても少なかったのでべらべら喋らせてみた結果がこれだよ。

次回、独伊西ロマ出産編ラストです。

病室にて（前書き）

お久しぶりです火野村です！約一ヶ月ぶりでしょうか？

書けなかったりとかテスト週間とかいろいろ重なって更新延びてしまつて…申し訳ないです；

今回は独伊（+西ロマ）です！サブタイ通りな感じですよ。

あと独伊西ロマ出産編ラストになります；次回がラストですすみません；

## 病室にて

俺の子が、生まれた。俺とドイツの子が、生まれた！

可愛らしい女の子と男の子。名前はニーナとロベルト。誕生日は1月24日。

ああなんて幸せなんだろ俺！

「頑張った、な。ありがとうイタリア」

「ヴェー……。ドイツ、涙拭くぐらいしたら？みつともないよ〜」

「お前に言われたくない」

「あ、ひっどーい」

ドイツはハンカチで涙をぬぐった。ここは病院。

俺の部屋はドイツのおかげでご丁寧に個室を用意してもらって、俺はそのベッドで寝そべっていた。

「てゆーか、陣痛ホント痛かったよ……鼻からスイカ出す痛みとか言うけど、ホントそんな感じだった……」

「そんなに痛いのか？」

「さすがのドイツでも泣くと思うよ」

そう言っつてつい陣痛でドイツが泣いているありえない姿を想像して、嘔き出してしまう。あ、ちなみに俺はもちろん大泣きだった。だいたい、（これ日本から聞いたんだけど）男の精神って妊娠の痛みに耐えられないらしいし。俺奇跡だね。

しかしホント痛かったなあ……と陣痛に耐えていた数時間前を思い出す。今もう一回産めって言われたら泣くなあ。

そんなことを考えながら、ふふ、と小さく微笑む。と、ドイツが、  
ああ、と声を上げたのでどうしたの？と疑問符を投げかけた。

「スペインやロマーノに報告しなくてはいけないんじゃないのか？」  
「あ、そういえば！そうだね連絡しなきゃー」

病院なので携帯使うのはドイツに止められるから、ドイツがわざわざ  
病院内の公衆電話で掛けてくれるらしい。

電話を掛けてくる、とドイツが病室を出る。  
赤ちゃんは双子だからなのか、すこしだけ未熟だったから別室なの  
で部屋には俺一人。静かな病室で、俺は一気にちいさくなったお腹  
をぺたりと触った。それでなんだかすごく嬉しくなって、顔をほこ  
るばせた。

なんだか不思議だなと思いつつしばらくお腹をぺたぺたしている  
と、ドイツが戻ってきた。

「あ、おかえりドイツ、どうだった？」

「……………向こうも、……………だ」  
「え？」

ドイツの声がよく聞こえなくて聞き返す。ドイツは真剣な面持ちを  
していた。

「向こうも、今、分娩中だそうだ」

理解するのに、きっかり3秒かった。

「ええええええ!!!!?」

病室にて（後書き）

ありがとうございました！

にゃーやっぱ書けねえ…ぐだくだや…

次回は西ロマもしっかり登場させます！

次回で独伊西ロマ出産編ラスト！



その痛みに伴う幸せ（前書き）

こんばんは火野村ですーやっと続きうp。サブタイトルのセンスのなさはスルーしてやって下さいまし。

今回は独伊＋西ロマです。相変わらずのグダグダクオリティです。

おそらく場所は独伊家と思われ。

## その痛みに伴う幸せ

「もうぜったい子供産まねえ」

兄ちゃんは溜息まじりにそう言い放った。心底嫌そうなその表情は、せつかくの美人がだいなしな感じだった。

「もーあんな痛い思い絶対しねえ……………」

「まあたしかに痛かったけどねー」

おもいつきりうなだれて嘆く兄ちゃんの腕の中には、兄ちゃんが産んだ双子の片割れ・カルロが眠っている。そして、俺の腕の中ではロベルトが。

生後一ヶ月の今日、やっとこうしてお互いの赤ちゃんたちと対面ができたのだ。

ちなみに今、エレーナは少し離れたところで、ドイツと話すスペイン兄ちゃんの腕の中におとなしく抱かれていて、ドイツが寝かしかけたニーナは、少し大きめのベビーベットの中ですやすやと眠っている。

あと、エレーナ&カルロの誕生日は11月25日で、本当に奇跡のような偶然だった。

「俺ほんと死んでねえのが奇跡だ…あんな痛み死ぬだろ」

ぶつぶつと兄ちゃんが呟く呪詛のような言葉に、俺は兄ちゃんも同じようなこと考えてるなーと思った。

まあ痛みに耐えて、この可愛い赤ちゃんたちに会えたんだから俺的には痛かったのももう良い思い出なんだけどさ。

そう考えているとどうやら俺はにやけていたようで、兄ちゃんに何にやけてんだよ、と言われてしまった。俺はえへへと照れ隠しみたいに笑った。

「てかさ、カルロとエレーナって二卵性だっけ？」

「二卵性だな。てか男女別れてんだから普通そうだよ」

「ーナとロベルトも二卵性だよな。と兄ちゃんが首を少し傾げると、俺はうん、と頷いた。

「将来はどっちかがどっちかに似るのかな？」

「面白そうだな」

「エレーナもカルロも可愛いし、どっちに似てもすごい可愛くなるだろうね」

「スペイン×2はやめてほしいけどなあ…性格的な意味で」

確かにそうだろうな、と思ってちらりとスペイン兄ちゃんを見たら、つい嘖き出してしまった。兄ちゃん、これから大変そうだ。

「うちもどっちかがどっちかに似るとか、そんな感じになるといいなあ」

「じゃがいも野郎2号が出来るのは勘弁してくれよ」

…あとお前2号もな。もちろん性格的な意味で」

「あつ兄ちゃんひどい！」

むきむきはドイツだけでいいし、ちゃんとしっかりした子に育てるよー！と俺が言うと、しっかりしてないって自覚はあるんだな、と笑われた。

\*

将来のことなんてまだ分からないし、そう遠くない未来のことだっ  
て分からないけど、願わくばこんな幸せがずっと続きますように。

その痛みに伴う幸せ（後書き）

ありがとうございました！

旦那ズのセリフ、すっくなくいですね……………！！！！ひいすみません

これにて独伊&西ロマ妊娠出産編終了です！

次はおそらく、米英2人目です。

その前にリクエスト消化で夫婦編うpします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5569n/>

---

Happy!! ~みんな幸せになあれ!~

2011年10月25日00時57分発行